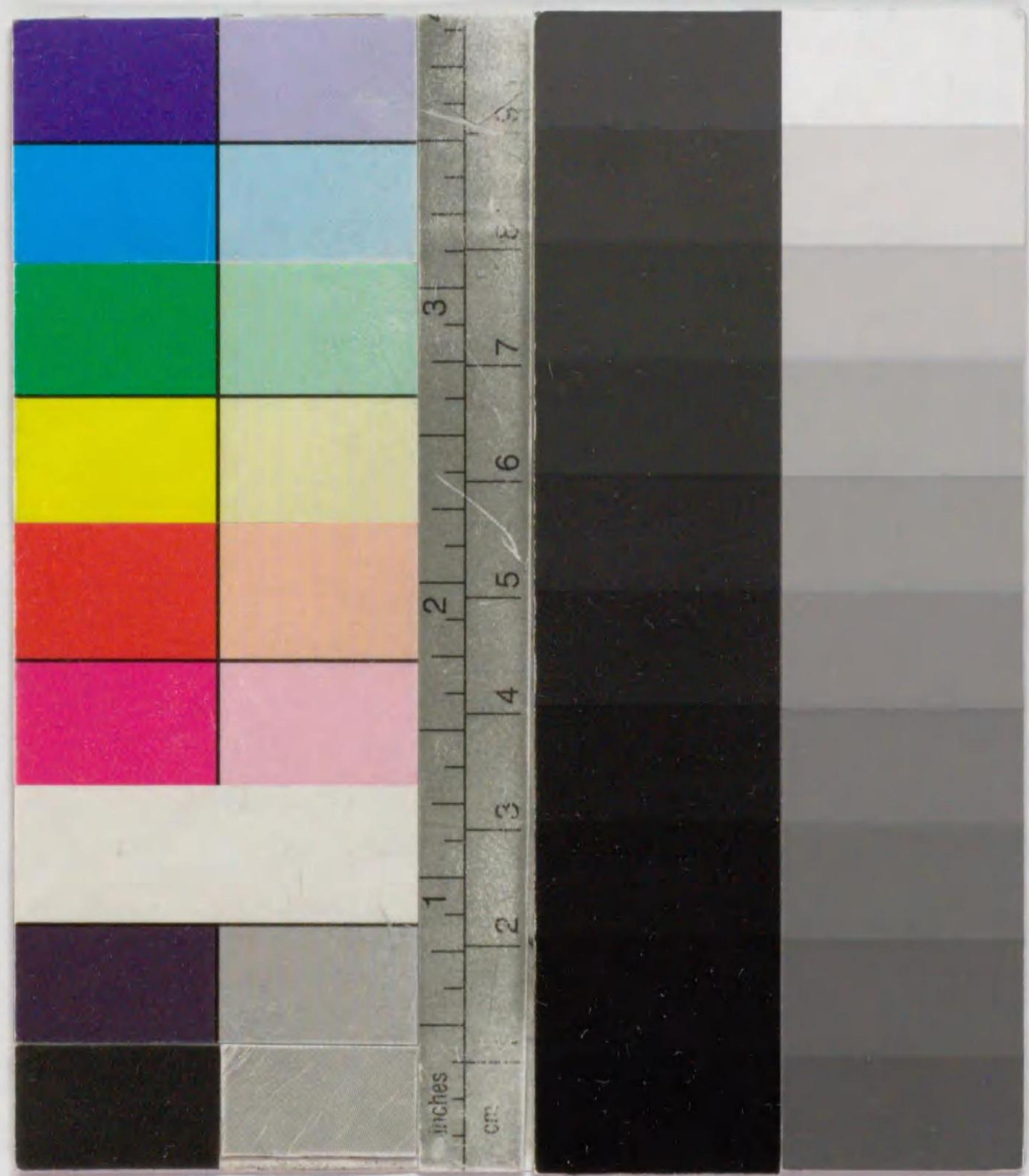


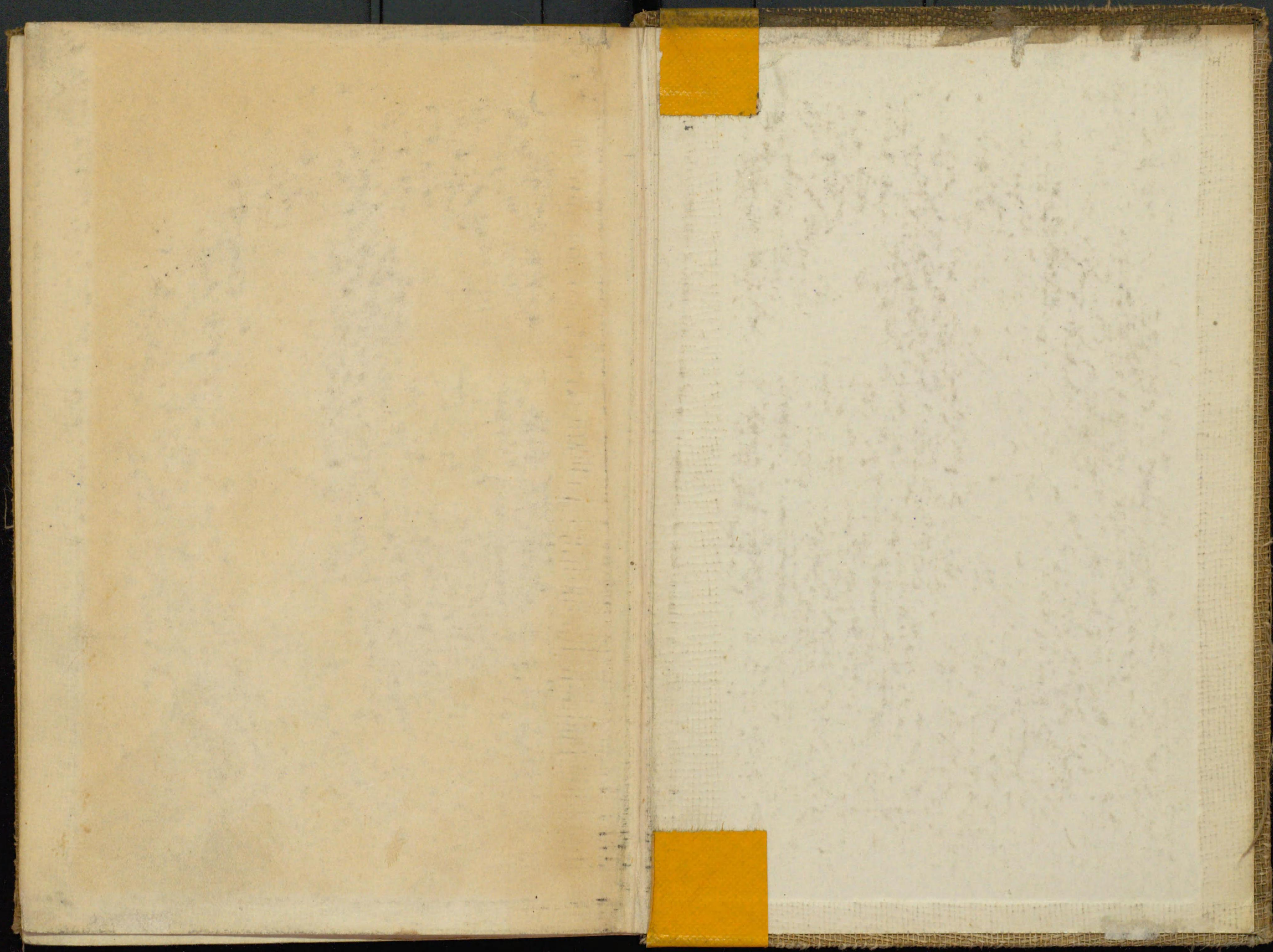
527-16



1200501495050

27
6







岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第十壹卷

東京春陽堂版



岡本綺堂著



527-16

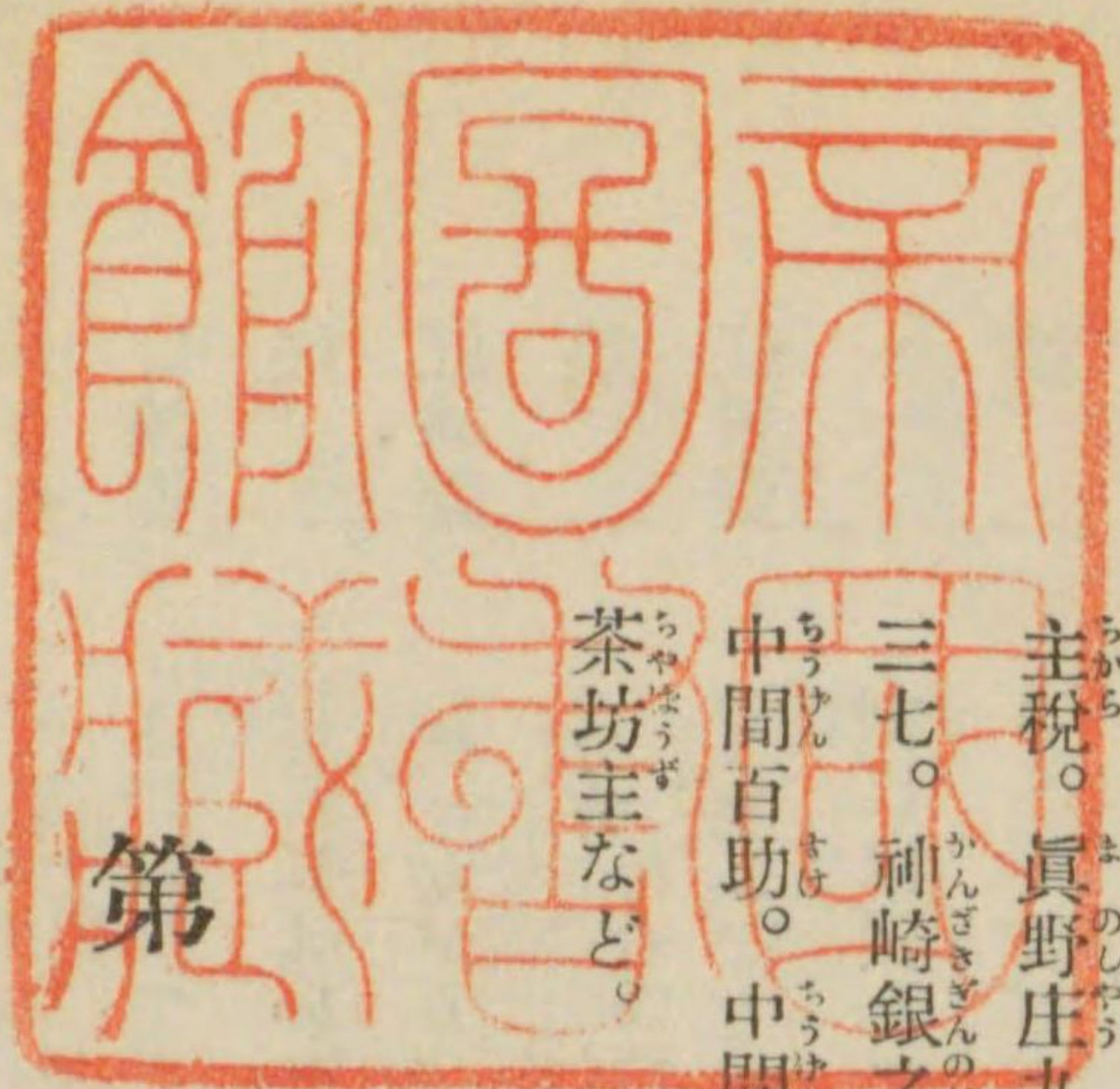
第十一卷 目次

黄門記	一
権三と助十	八
勘平の死	一三
お化師匠	二九
風鈴蕎麥屋	三三
筑摩の湯	三七

黃
門
記

大正十五年十一月作。
昭和二年一月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——徳川光圀（中村歌右衛門）朱舜水（市川中車）藤井
紋太夫（市川左團次）妻お雪（市川松蔭）藪田五郎左衛門（中村鶴藏）眞野庄
九郎、佐々助作（市村龜藏）吉田平三郎（市川猿之助）舜水の僕藤兵衛（坂東
村右衛門）仲間百助（長十郎）など。



第一幕

(一)

登場人物——水戸藩主光圀。朱舜水。藤井紋太夫。藤井の妻お雪。藪田五郎左衛門。柳澤
主税。眞野庄九郎。吉田平三郎。篠原權之助。穂塚彌八郎。鹿島甚兵衛。瀧坂五郎次。太田
三七。神崎銀之丞。佐々助作。舜水の僕藤兵衛。人見道設。吉弘元常。中村願言。岡部玄又。
仲間百助。中間六藏。ほかに茶店の娘。紅繪賣。町人。中間。筆生。小姓。若侍。醫者。
茶坊主など。

寛文十二年、十月はじめの午前。

黄門記

小石川の方面より水道橋を見たる景。上のかたに斜に水道橋あり。正面は低き草土手にて、松の立木あり。お茶の水の流れを隔て、神田の臺の武家屋敷など遠くみゆ。橋の袂に型ばかりの茶店あり。

(紅繪賣の若衆、橋をわたりて出で、茶店の娘に聲をかける。)

紅繪賣。よい日和でござるな。

娘。ほんによい日和がついて結構でござります。お茶ひとつ飲んでおいでなされぬか。

紅繪賣。(笑ひながら。)この繪を一枚買つてくれたら休みませう。

娘。(立寄つて覗く。)ほんに美しい繪ぢや。定めてたと賣れるでござりませうな。

紅繪賣。(又笑ふ。)どなたもやれ見事ぢや、やれ美しいものぢやと、口では褒めて下さるが、扱その割には賣れぬものでござりますよ。

娘。さうでござりますかなあ。

(娘は紅繪をながめてゐる。下のかたより柳澤主税、十五歳。その家來の娘お雪、十七歳、附添ひて出づ。)

お雪。(あとを見かへる。)父は何を致してゐるのでござりませう。

(主税はそれに頓着せず、紅繪賣に眼をつけて進み寄る。)

主税。お、これは綺麗なものだ。(お雪をみかへる。)これ、雪。これを見ろ。

お雪。(すゝみ寄る。)お、まことに綺麗なものでござります。(紅繪賣に。)このごろ流行る紅繪とやらはこれでござりますか。

紅繪賣。あい、あい、左様でござります。御意にかなひましたれば、一枚お求め下さりませ。

主税。お、買つてやる。わしはこれが欲しいぞ。

紅繪賣。それはおやま繪でござります。さあ、さあ、手に取つて御覽じませ。

(紅繪賣は遊女の繪を取りて渡せば、主税は手に取りて眺める。)

主税。おやまと云ふのは遊女のことだな。

お雪。紅繪をお求めなさるにしても、遊女の姿をかいたものなどは……。

主税。ならぬと云ふのか。これはわしが欲しいのではない。殿へのお土産に差上げるのだ。

お雪。(おどろいたやうに。)まあ、めつさうな。そのやうなものをお土産に差上げましたら、屹とお叱りを受けませうに……。

主税。(笑ふ。)おまへなどの知らぬことだ。價をきいて拂つてやれ。

紅繪賣。それは十六文でござります。

主税。十六文でよいお土産が出来た。(お雪に)さあ、早く拂つてやれ。
お雪。はい。

(お雪は躊躇しながら後をみかへる。下のかたよりお雪の父、藪田五郎左衛門、三十八歳、足早に出る。)

お雪。お父さま。若旦那様がこの繪を求めたいと仰しやります。

五郎左。(覗いて見て苦い顔。)主税様。あなたはそれをお求めになりますか。

主税。(繪を見せる。)十六文では安いものではないか。

お雪。殿様へおみやげに差上げるのださうでござります。

五郎左。(腰巾着より錢をかぞへ出して遣る。)十六文でよいな。

紅繪賣。ありがとうございました。

五郎左。(主税に。)その繪をちよつとお見せ下りませ。

お雪。(五郎左衛門は主税よりその紅繪をうけ取り、すたくに引き裂いて捨つ。みなく驚く。)あれ、お前。なにをなされます。

五郎左。

(お雪に。)御若年とは云ひながら、主税様は最早十五歳、やがては元服もなさる、身で、少しは御分別もあるべき筈。かやうな猥りがましい紅繪のたぐひを、殿様へおみやげなどとは途方もないことだ。萬一御機嫌を損じたら、御自分ばかりか親旦那さまにも御迷惑がかかるではないか。

主税。

(冷かに笑ふ。)五郎左衛門。おまへは相變らずの忠義者だ、正直者だ。わしの代になつたら取立て、やるぞ。

五郎左。

(云ひすて、主税は橋を渡り去る。紅繪賣もなんとなく極り悪く、これも逃げるやうに下のかたに立去る。茶店の娘もあとに退る。五郎左衛門は紅繪賣のあとを見送りに舌打ちする。)

紋太夫。

次第に世の中が猥らになつて、あのやうな商人どもが徘徊する。困つたものだな。

(水戸家の若侍 藤井紋太夫、廿二歳の美男、橋をわたり出て出づ。)

五郎左。

(五郎左衛門とお雪は會釋する。)

紋太夫。

若旦那のお供をして小石川の御親類までまゐりました。
主税殿には唯今そこでお逢ひ申したが、流石は館林様お側に御奉公めさる、だけあつて、

御若年にも似合はず御行儀のよいこととござる。

五郎左。そのお詞では痛み入ります。日ごろ御懇親のお手前ゆる有體に申上げますが、拙者の若主人主税殿、幼少より利口發明の生れ付きなれど、何分にも柔弱で、武士氣質の薄いやうにも見受けらるゝが残念に存じて居ります。現に唯今も……。

お雪。(父の袖をひく。)もし、藤井様にそのやうなことを……。

五郎左。いや、その藤井殿なればこそ正直にお話し申して、なにかの時に御意見もして頂きたいのだ。實は唯今こゝで紅繪賣の商人を見つけてまして、一枚買ひ求めたいと申されます。それも繪にこそ依れ、媚かしい遊女の姿繪で、それを殿へのおみやげに致したいといふのでござる。

紋太夫。なまめかしい遊女の紅繪を買ひ求めて、殿様へ……。あの、館林様へか。

五郎左。(苦り切つて。)左様でござる。

紋太夫。主税どのは十三歳より館林様お小姓に召出されて、あしかけ三年の御奉公、殿さまの御氣質も大抵御存じの筈でござる。殊に日頃から人にすぐれて御發明とあれば……。 (打笑む) その媚かしい御土産が却つて御意にかなふのかも知れませぬな。

五郎左。では、お手前も左様に存ぜらるゝか。

紋太夫。(茶店の方をみかへる。)いや、往來中で左様なお噂はおたがひに慎まねば相成りますまい。

(氣をかへて。)お雪どの。

お雪。はい。

紋太夫。母がこなたの琴のしらべを一度聽かせて頂きたいと申して居れば、近いうちにお暇をみて拙者の宅までお越し下さるまいか。

お雪。(恥しさに。)はい。

五郎左。(急にこゝくして。)はい、おまへの未熟の琴のしらべがおふくろ殿の御所望にあづかるとは仕合せなことだ。そのうちに御邪魔にまゐるれ。

母も拙者もお待ち申して居りますぞ。

お雪。はい。

紋太夫。では、これでお別れ申す。

五郎左。失禮御めん下され。

お雪。おふくろ様にも宜しく仰しやつて下さりませ。

紋太夫。

承知いたしました。

(紋太夫は心ありげにお雪と顔をみあはせて、向うに立去る。)

お雪。

お父様。ほんたうに藤井様の御住居をおたづね申しても宜しうござりますか。

五郎左。

むい。ほかとは違つて水戸様の御家中、殊に紋太夫殿は年こそ若けれ、あつぱれの器量者、そのおふくろ殿も好いお人だ。折角あゝして云はれるからは、一度おたづね申すもよからう。

お雪。

(念を押すやうに。) 屹と參つても宜しうござりますか。

五郎左。

おい、よい、よい。いや、こんなことを云つてゐるうちに、主税様は遠く行つておしまひなされた。さあ、早く来い、早く来い。

(五郎左衛門は急いで橋をわたり去る。お雪は心の残るやうに紋太夫の去りし方を見返りながら、これも父のあとに續いて去る。下の方より水戸家の鷹匠吉田平三郎、廿歳、拳に鷹を据ゑて出づ。橋の上より徳川家の鷹匠眞野庄九郎、三十歳前後、これも拳に鷹を据ゑて出で、雙方無言に會釋して摺れ違ひゆく時、二羽の鷹は物におどろきて飛び起んとするを、平三郎と庄九郎はその緒をいつかと握りて働かさず。平三郎はそのまゝ行き過ぎんとすれば、庄九郎は立ちどまりて聲

をかける。)

庄九郎。

水戸殿のお鷹師、待たつしやい。

平三郎。

(見かへる。) なんぞ御用でござるか。

庄九郎。

お手前にも眼があれば見えるであらう。これは公方家御祕藏の雪の山と申す名鳥でござるぞ。そのお鷹をおどろかして、唯そのまゝに相濟むと思はつしやるか。

平三郎。

お鷹をおどろかしたはお互ひのこととござる。これは水戸殿が御祕藏の筑波山といふ名鳥であることを御存じないか。

庄九郎。

だまらつしやい。たとひお互ひのことであらうとも、公儀のお鷹匠に對して相當の挨拶あるのが當然ではないか。水戸殿を肩に被て、挨拶無しに濟まさうとは、公儀を恐てぬ致し方、近ごろ不埒であらうぞ。

平三郎。

して、いかやうに挨拶しろと云はるゝのか。

庄九郎。

大地に手をついて、このお鷹にお詫をいたせ。

平三郎。

(憤然として。) 馬鹿なことを……。小身ながら吉田平三郎、殿よりお預かりの鳥を拳に据ゑてるながら、大地に手をついて詫びらるゝと思ふか。拙者ばかりか、殿の御威光にもかゝ

はることだ。

庄九郎。

又しても公儀を蔑ろにする申條、いよく聞き捨てには相成らぬぞ。殿の御威光とはなんのことだ。二口目には水戸家の威光を肩にきて、公儀の御威光を恐れぬのか。貴様のやうな不届奴に論は無益だ。この次第を訴へ出て、以後の見せしめに嚴重の仕置をいたさねばならぬ。おれと一緒に鷹匠屋敷へ来い。

(庄九郎は平三郎の腕をつかんで引立てようとする。)

平三郎。

えい、貴様たちに引立てられる覚えはないぞ。

(二人は片手に鷹を据ゑながら争ふ中に、平三郎の鷹は狂ひて緒を振切り、虚空遙かに飛び去る。)

平三郎。

おい、お鷹が飛んだ。

庄九郎。

貴様が未熟で逃したのだ。

平三郎。

あれ、あれ。

(平三郎は鷹の行方を追はんとせしが、とても及ばぬとあきらめて俄に刀をぬき、庄九郎の脇腹に突き立てる。庄九郎は鷹を持ちたるまゝにて倒る。鷹は狂ひて飛ばんとするを平三郎は押へて、その緒を庄九郎の腕にしつかりと縛り付ける。茶店の娘は怖々うかゞひるるを、平三郎はみかへ

りて聲をかける。)

平三郎。

これ、湯でも水でも一杯くれ。

娘。

はい、はい。

平三郎。

兎も角もお屋敷へ歸つてからのことだ。

(娘は茶碗に水を汲んで来れば、平三郎は一口飲みて思案する。)

(平三郎は腰なる矢立を取出し、ふところ紙に「下手人は水戸藩の吉田平三郎」と認めて死骸の懐中に差入れ、下のかたへ足早に立去る。娘は途方にくれたやうに立つてゐる。橋の上より町人二人、下のかたより状箱を持ちたる中間一人出で、いづれも死骸をみて驚く。)

町人一。

やあ、大變だ。お鷹匠が殺されてゐる。

仲間。

こりやあ一體どうしたのだ。おい、姐さん。おめえは知つてゐるだらう。

娘。

(おどくして。) わたしもびつくりしてしまいました。

町人二。

なにしろ飛んだことになつたものだ。

仲間。

まつ晝間往來中で意趣斬でもあるめえが、たつた一突きで遣られたらしいな。

(町人と中間は死骸をのぞいてゐる。このあひだに橋の上より朱舜水、明國の人なれども水戸藩

に聘せられて光圀の師と仰がれ、傲岸嚴峻を以て知らるゝ人物、七十三歳なれども健かなるこ
と壯者に劣らず、明朝の服装にて杖を持ちて出づ。そのあとより日本の従僕藤兵衛、三十餘歳、
舜水の笠を持ちて出づ。

藤兵衛。

誰かそこに倒れて居ります。

舜水。

病人ならば薬をやるがよい。

(藤兵衛は進み寄りて覗く。)

藤兵衛。

やあ、人が斬られてゐる。おゝ、これはお鷹匠だな。どうして殺されたのだ。

娘。

ほかのお鷹匠と摺れ違ふはずみに、お互ひの鷹をおどろかしたと云ふのが喧嘩の始まりで、
相手の鷹が飛んで行つたので、そのお鷹匠はいきなりに刀をぬいて……。

藤兵衛。

この男を殺してしまつたのか。して、その下手人はどうした。

娘。

兎も角もお屋敷へ歸つてからの事だと、獨り言を云ひながら何處へか行つてしまひまし
た。

藤兵衛。

むゝ、屋敷へ歸ると云つたか。おあづかりの鳥を逃した申譯に、相手を殺して自分も切
腹、大方そんなことであらうな。

(舜水もこの問答に耳をかたむけながら進み出づ。)

舜水。

あづかりの鳥を逃した申譯に、相手を殺して……。自分も切腹しますか。

藤兵衛。

はい。それが侍の習でございます。

町人一。

なるほど、預りの鳥を逃して、唯そのまゝでは済まされまい。

中間。

相手を殺して、自分も死ぬのが當りまへだ。

舜水。

(嗟嘆して。)日本は羨ましい。

(人々は不思議さうに舜水の顔をみる。)

(二)

小石川の水戸邸内の修史局。

平舞臺にて、正面には光圀自筆の「彰考館」といふ扁額をかけ、壁には「館警」が貼出してあり。

館 警

一 會館者可辰半入未刻退

- 一 書策謹不可汚壞紛失
- 一 置談諍論宜最戒之
- 一 論文考事各當竭力若有他所駁則虛心議之勿執獨見
- 一 在席勿怠惰放肆

左右に葵の紋をつけたる襖あり。壁の前には本箱、書棚のたぐひを澤山にならべて、和漢の書籍がおびたゞしく積まれてあり。席の正面には光紈と朱、舜水の机が置かれ、その左右に七八脚の机あり。

(修史局員人見道設、吉弘元常、中村願言、岡部玄又の四人が机にむかひて、あるひは筆を執り、あるひは古記録を調査してゐる。局員は隔日の出勤なれば、一脚置きに空机ありと知るべし。下のかたに筆生四人が机を向合はせて、頻りに草稿を筆寫してゐる。人々は無言にて暫らく其仕事を勵みあると、下のかたの襖をあけて、給仕の若侍一人出づ。)

若侍。お食事でございます。

元常。(顔をあげる。)もう午か。けふは大層早いやうではないか。

若侍。いえ、いつもの刻限でございます。

玄又。(これも顔をあげる。)おまへ方はその係であるから、勿論間違ひはあるまいが、まつたく今日は早いやうだな。

願言。仕事にかゝると起つのも面倒だが、まあ仕方がない。すぐにまるるぞ。

若侍。はあ。(引返して去る。)

元常。(道設に聲をかける。)人見氏、もはや午飯の刻限ださうでございます。

(道設は黙つて筆を走らせてゐる。)

願言。人見氏、人見氏……。は、いつもの癖で、仕事にかゝつたら全く夢中だ。これ、人見氏

道設。(初めて筆を休める。)さうぐ、しい、何だ。

玄又。食事の支度が出来たと申してまるつた。

道設。ほう、食事の刻限か。辰半時から机にむかつて、まだ一時も過ぎないやうに思はれるが、もう午時とは……。

元常。それは我々も御同様で、時刻の移るのは實に早いものでござる。併し給仕の係の者をいつ

までも待たせて置くも氣の毒、兎も角も參ると致さう。(起ち上る。)

道設。

むい、むい。(首肯しながら又書きはじめる。)

願言。

(笑ひながら) どうも困つたものだ。(筆生等に) 貴公達は人見氏を連れて来い。

筆生等。

はあ。

元常。

(人々をみかへる。) さあ。

(元常は先に立ち、願言、玄又もつゞいて下のかたの襖をあけて去る。筆生四人は顔のみあはせて起ちあがり、道設のそばへ行く。)

筆生一。

人見先生。食事にお出で下さい。

筆生二。

他の先生方はみな参られました。

四人。

先生。

道設。

どうも煩さいな。少し待つてくれ。

筆生三。

しかし他の先生方は……。

道設。

判つてゐる。わかつてゐる。

(道設はやはり書きつゞけてゐる。)

筆生一。

先生が行つて下さらないと、我々も飯を食ふことが出来ません。

筆生四。

どうぞ早くおいで下さい。

道設。

貴公達はかまはずに先へ行け。

筆生二。

さうは参りません。

筆生三。

先生を置いてゆくと、我々が叱られます。

筆生四。

あなたはいつても世話を焼かせて困る。

筆生。

けふは早くおいで下さい。

四人。

先生。先生。

道設。

(じれる。) えい、うるさいと云ふのに……。

(道設は机の上の文鎮を把つて投げ付けさうにすれば、四人はおどろいて飛び退く。この時、上のかたの襖をあけて、水戸城主光圀、四十五歳、小姓に太刀を持たせ、近習の若侍二人は禪と脇息を持ち出て出づ。)

光圀。

(笑ひながら) 何かさういふやうだ。どうしたのだ。

道設。

(心づいて會釋する。) お耳に入つて恐れ入ります。若い者共が仕事の邪魔をいたしますので……。

光 圀。 なに、邪魔をする。

筆生一。 いえ、決して邪魔を致したわけではござりません。給仕の係の者より最早食事の用意が出來たと申してまゐりましたので……。

光 圀。 (うなづく。) さうか、さうか。そこでお前達が催促しても、人見のからだか机に吸ひ付いて離れぬといふのか。は、いつもの癖だ。まあ、騒ぐな、騒ぐな。

筆生二。 でも、人見先生がその文鎮を把つて投げ付けようとなされますので……。

光 圀。 (又笑ふ。) いや、それは人見が穩かでないぞ。(館警の貼紙を指さす。) その貼出しにも「露談諍論は宜しく最も之を戒むべし」とあるではないか。この修史局の首席ともあるべき者がその戒めを破つてどうするのだ。

道 設。 仕事に心を奪はれて思はぬ亂暴、まことに申譯がござりません。

光 圀。 は、よいから若い者と一緒に行け。

道 設。 はあ。

筆生一。 では、御免くださりませ。

(道設をはじめ、筆生四人は光圀に會釋して、下の方に去る。光圀は褥に坐り、近習と小姓等は其

のうしろに控へる。)

光 圀。 規則の表、一應は吐つたもの、わしも覚えのあることで、一心に調べ物などしてゐる時に、傍でがやく云はれると、つい痼癢が起るものだ。は、は、は、は。

(下の方の襖をあけて、朱舜水出で、光圀に向つて禮す。光圀も謹んで答禮す。)

光 圀。 けふはどこへお出でなされた。

舜 水。 (坐す。) 今日わたくしの休み番に當りますので、お茶の水から水道橋のあたりを散歩してまゐりました。

光 圀。 あの邊の風景がよほどお氣に入つたと見えますな。

舜 水。 わが國の赤壁——御承知でもありませんが、三國のときに呉の孫權が曹操を撃ち破つた處——又彼の蘇東坡が月夜に舟をうかべて、赤壁の賦を作つた處——その赤壁を小さく縮めたやうのがお茶の水の風景で、まことに小赤壁とも申すべきでござります。

光 圀。 小赤壁——成程それではお氣に入る筈だ。時候は小春時で、けふは天氣も好し、久振りの散歩は定めて面白いことではござらう。

舜 水。 いかにも初めは面白うござりましたが……。 (慨然として俯向く。)

光 園。
舜 水。
光 園。
舜 水。

(聞き替めて。) 中途で何か面白からぬことでもござつたか。
水道橋のほとりで鷹匠の殺されてゐるのを見ました。
む、鷹匠が路ばたに殺されて居りましたか。

思ひ違ひをして下さるな。人の血を見ていたづらに心を傷ましめたのではござらぬ。それを見て、今更のやうに日本が羨ましくなりました。(慨然として。) 義に勇むは日本人の習、若し我が明朝の人々にもそれほどの魂 あらば、四百餘州の隅々まで韃靼人に踏みにじらるゝことはござるまい。明朝の忠臣は鄭成功一人、それも日本人の血を引いて居りました。

(舜水は眉をあげて悲憤の色あらはる。光園は慰めかれて黙して聽いてゐる。下のかたの襖をあげて藤井紋太夫出づ。)

紋太夫。

早急に申上げます。

光 園。

なんだ。

紋太夫。

お鷹師吉田平三郎が水道橋際に於て、公儀のお鷹匠を殺害いたしました。

光 園。

(舜水と顔を見あはせる。) では、先生の御覽なされたのがそれでござつたか。

舜 水。

相手は己に立去つた後で、何者とも存じませぬが、恐く自分の屋敷へ立歸つて切腹するで

紋太夫。
光 園。
紋太夫。

あらうといふ噂でござりました。

仰せの通り、平三郎はその次第をお届けに及んで、すぐに切腹すると申して居ります。

して、平三郎は何故に相手を殺害したのだ。意趣斬か、當座の口論か。

兩人が摺れ違ふは亦みに、雙方のお鷹がおどろいて狂ひ立ちましたので、相手はなかく

料簡いたさず、お鷹匠屋敷へ訴へ出て嚴重の仕置をすると申して、無理に平三郎を引立て

て行かうと致しました。こちらは行くまいと争ふうちに、あやまつて緒を切りまして、筑

波山のお鷹はいづれへか飛び去りましてござります。

鷹を逃がしてしまつたか。

光 園。

その申譯に平三郎は、矢庭に相手を刺し殺しました。

紋太夫。

して、相手の鳥は如何いたした。

光 園。

遠く飛び去りませぬやうに。その緒を死骸の腕にしつかと縛り付け、又その下手人は水戸

藩の吉田平三郎と認めたる紙片を死骸のふところに差入れてまるつたと申すことござり

ます。

光 園。

行き届いた致し方、さすがは平三郎だな。今聞くとくところでは彼に罪はない。決して切腹に

は及ばぬぞ。

紋太夫。(主君の顔色をうかがひながら。)仰せではござりますが、何分にも相手が公儀のお鷹匠とござりましては……。

光圀。

公儀でも平大名でも旗本でも、道理に二つは無い。摺れ違ふはずみに雙方の鳥のおどろいたは五分五分であるに、相手が公儀を肩にきて、鷹匠屋敷へ引立て行くの、嚴重の仕置をするのと、不法のことを云ひ募つて、主人より預かりの鳥を逃がしたからは、平三郎は堪忍ならぬ筈ではないか。(屹となつて。)相手を殺すは當然のことだ。

紋太夫。

はあ。

光圀。

平三郎は切腹させるな。たとひ公儀より平三郎を差出せといふ御沙汰があつても、必ず渡しては相成らぬぞ。かれが若し道に缺けた者ならば、公儀の御沙汰を待つまでもなく、當屋敷に於て成敗する。彼が道に缺けた者でなくば、たとひ公儀の御威勢を以て迫るとも、光圀は決して承引せぬぞ。

紋太夫。

はあ。然らば御意の通りに取計らひます。

光圀。

狼狽へて命を捨てぬやうに、早く參つて平三郎に意見いたせ。

紋太夫。

かしこまりました。

(紋太夫は逆らはず、何か思案して立去る。)

舜水。

唯今も申す通り、わたくしは事の終つた後に行き合せたので、その下手人は何者とも存じませなんだが、それが當お屋敷の鷹飼とは思ひも寄らぬこととござりました。併し相手が將軍家の鷹匠とあつては、唯そのまゝでは相濟むまいかと存じられますが……。

光圀。

紋太夫もそれを懸念してゐるやうに相見えましたが、當方の家來に越度がない限りは、ちつとも恐るゝことはござらぬ。公儀の掛合ひ面倒と相成らば、光圀みづから登城して、役人どもに理非を説き聞かすまでのこと、その儀は決して御心配くださるな。(氣をかへて。)それは先づそれとして、手前が一代の仕事と心得居る國史編纂の事業も、おかけを以てよほど撈取つてまゐりまして、手前も頗る満足に存じて居ります。(愉快らしく笑ふ。)先生にもお喜び下され。

舜水。

わたくしは異國の人、もとより本朝の歴史については何の知識もなく、少しく文字の修正にたづさはるばかりで、これぞと申すほどのお役にも立たぬのでござるが、他の人々の働き振りを見て居りまするに、いづれもこの仕事に身も魂も打ち込んで、根かぎりに精出

光圀。

して居らるゝ様子、まことに頼もしく存じられます。
光圀が初めて日本の正しい歴史を編み出さうと思ひ立ちましたのは十八歳の頃で、いよいよそれに取りかかりましたのは三十歳の春でござつた。それから足かけ十五年の月日をかさねて兎も角も一通りの編纂を終りましたが、御覽の通りの恥かしいもので、光圀自身も甚だ不満足、勿論世間に示すべき値のないものと思ひ切つて、更に新しき國史編纂を思ひ立ちました。

舜水。

十五年の長い月日を費して漸く出来あがつたものを、反故同様に惜気もなく打ち捨て、更に新しく作り直さうとせらるゝは、まことに怖しきほどの勇猛のお覺悟で、餘人の容易に企て及ぶところではござりませぬ。これにもわたくしは敬服して居ります。

光圀。

就きましては、當年五月より當屋敷内に修史局を構へ、今後十年、二十年、三十年、手前の命のあらん限りは、この仕事に精力を費す覺悟でござる。水戸は三家の一つなれど、最も小分にて廿五萬石、年々その三分一の八萬石を國史編纂の費用に抛つに就きましては、家老用人その他の重役共のうちにも故障を申立つる者が少からずござるが、光圀の決心は動きませぬ。今太平の世の中に、光圀が一生の心血をそゝいで勵むべき仕事はこれ一つと

舜水。

心得て、飽までも進みゆく決心でござれば、この末ともに先生の御助力をくれぐゝもお願い申す。

光圀。

勿論わたくしも出来るかぎりの御奉公をいたしたいと存じて居ります。已に歴史と申す以上、史實にあやまり無きを期するは當然でござるが、唯それだけでは肉も無い、血もない、骨と皮ばかりの記録に過ぎませぬ。(聲を勵しうして。)それを一貫する雄大の氣魄と正義の精神とが、肉ともなり、血ともなつて、初めて生きた歴史が作らるゝのでござります。孔子春秋を作つて亂臣賊子懼るといふは、孔子の筆に正義の力が籠つてゐるからでござる。屋形ほどの人物が一生の仕事として國史の編纂を思ひ立たれたからは、その歴史を土臺として、日本國のあらゆる人々に正義の精神を吹き込むことを忘れてはなりません。それは手前も心得て居ります。いたづらに空理空論を唱へたとて何んになりませう。生きた歴史を土臺にして、世を教へ、人を導くが光圀の本願でござる。

(下の方より篠原權之助出づ。)

權之助。

申上げます。唯今公儀のお鷹匠頭よりお使者の者がまゐりました。

光圀。

公儀の鷹匠頭より使者がまゐつた……。 (考へて)むゝ、さては彼の平三郎の一件であらう

權之助。左様でございます。公儀のお鷹匠眞野庄九郎を殺害いたしたる吉田平三郎を即刻引き渡せ
とのことでございます。

光 圀。それはならぬと斷るやうに申聞かせてあるではないか。

權之助。(躊躇して)はあ。

光 圀。紋太夫がよく存じてゐる筈だ。彼は如何いたした。

權之助。先刻よりその姿を見受けませぬが……。

光 圀。いや、唯つた今までこゝにゐたのだ。

權之助。兎もかくも見てまゐりませう。

(權之助は引返して行かうとする時、襖をあけて藤井紋太夫出づ。)

光 圀。お、紋太夫。公儀の鷹匠頭より使者が參つたと云ふではないか。

紋太夫。わたくし自身に應對は致しませぬが、大分嚴重の掛合ひのやうでございます。

光 圀。よもや平三郎を渡しはしまいな。

紋太夫。いかに渡せと申されましても、その本人が居りませぬ。

光 圀。なに、本人が居らぬ……。

紋太夫。一旦はお屋敷へ戻りましたが、いつの間にか姿を變へて立退きました。

光 圀。姿をかへて立退いたか。

紋太夫。就ては如何でございます。公儀の使者にその次第を申立て、いづれ當方より詮議して
差出すと挨拶いたし置きましては……。(光圀の顔を見る)それが穩便ではござりますま
いか。

(思案して)それもよからう。然らば先づそのやうに挨拶いたして置け。

光 圀。はあ。

紋太夫。(紋太夫は引返して去る。權之助もついでに去る。)

光 圀。(あとを見送りに獨り言のやうに)あいつ中々才覚者だ。

舜 水。屋形よりわたくしにお預けの御家來衆のうちでは、紋太夫は年こそ若けれ、學問の上達も
人にすぐれ、才智も鋭いやうに見えまするな。

光 圀。(やゝ得意らしく)數多い若侍のうちでは先づ見所のある者でござらう。末を樂みに御指
南くだされ。殊に彼は孝行者で、老いたる母を日ごろ大切にいたすとのことでございます。

光 圀。

舜水。かれの孝心深いことはわたくしも聞いて居ります。忠臣は孝子の門に出づと申せば、行末はあつばれの侍となりませう。わたくしもせいぐ指南いたせば、屋形も随分可愛がつてお遣りなされ。

光圀。紋太夫にかぎらず、家來はみな可愛いものでござるよ。

(下のかたより人見道設、吉弘元常、中村願言、岡部玄文、そのあとより筆生四人も續いて出で、先づ光圀に會釋し、更に舜水に會釋して、めいぐの机に向ふ。)

道設。舜水先生はお休み日ではござりませぬかな。

舜水。(笑ふ) 休み日ではござるが、半日遊ばせて貰へばもう澤山でござる。なにかお手傳ひを致しませうか。

元常。では、早速ながらこれに目を通して頂きませうか。

(元常は筆生に命じて、机の上にかされたる草稿十枚ほどを舜水に渡せば、舜水は自分の机の前に坐りて、その草稿をよみ始める。下のかたより藤井紋太夫出づ。)

紋太夫。公儀のお使者はお歸りになりました。

光圀。おとなしく立歸つたか。

紋太夫。平三郎逐電の儀を申立てましたれば、然らば早々に詮議せよとのことで、そのまゝに引取りました。この後かさねて催促がござりしても、何分にも本人のゆくへ相分らず、いまだ詮議最中と云ひのばして置きますれば、それで仔細はあるまいかと存じます。

光圀。むゝ。(笑ひながら) 紋太夫。

紋太夫。はあ。

光圀。平三郎を逃がしたはお前の智慧か。

(紋太夫は黙つてゐる。)

光圀。して、どこへ逃がして遣つた。

紋太夫。さあ。(躊躇して) はかりごとは密なるを可しとすと申しますれば、恐れながらお屋形様にも……。

光圀。(うなづく) では、聞くまい。萬事はおまへに任せたぞ。

(光圀は脇息に寄りて心地よげに微笑む。紋太夫は平伏す。舜水は一心に草稿を讀んでゐる。他の人もみな其仕事に努めてゐる。時計の音きこゆ。)

第二幕

(一)

第一幕より十年の後、天和二年二月の夜。

水戸城外、上市の屋敷町。正面には生垣を結ひたる大小の武家屋敷つゞいて見ゆ。月明るし。

(上の方より夜まはりの中間二人、一人は棒と提灯を持ち、一人は拍子木をたゝきて出づ。)

中間一。(空をみる) あ、好い月だ。春と云つても夜はまだ寒いな。

中間二。今年は些と餘寒が強いやうだ。それでも今夜は筑波おろしが吹かねえから、大きに凌ぎいと云ふものだ。

(下の方より吉田平三郎、三十歳、旅商人のすがたにて笠をかぶりて出づ。雙方すれ違ひて、中間は聲をかける。)

仲間一。これ、待て、待て。

(平三郎は立ちどまる。)

中間二。貴様はどこへ行くのだ。

仲間一。日が暮れてから無提灯で御城下をあるくのは御法度だぞ。

平三郎。今夜は月が明るいので、つい提灯を持つて來るのを忘れしました。

中間二。見れば旅の者のやうだが、これから何處へ行くのだ。

平三郎。藤井紋太夫様お屋敷へまゐります。

仲間一。藤井紋太夫さまのお屋敷へゆく。(提灯を差付ける。) なんの用があつて、今時分そのお屋敷へたづねて行くのだ。

平三郎。(少し躊躇して。) いえ、それはお目にかゝれば判ります。藤井様はやはり元のお屋敷でござりませうな。

中間二。もとのお屋敷とは何處のことだ。貴様はどうも胡亂だぞ。

平三郎。決して胡亂の者ではござりません。若し御疑念がござりますなら、わたくしを引立て、藤井様のお屋敷へお連れくださりませ。

中間一。

勿論のことだ。さあ、来い、来い。

(中間等は平三郎を取圍みて上のかたへ引返さうとする時、上の方より藤井紋太夫、三十二歳、第一幕よりも出世したる姿、羽織袴にて提灯を持ち出て、この體を見て不審さうに見かへる。)

中間一。

(こゝろ付く) お、藤井様だ、藤井様だ。

中間二。

丁度い、所へお出でなされた。

紋太夫。

丁度い、所へ……。わしに何か用があるのか。

平三郎。

紋太夫どの。(小聲で) 拙者でござる。

(平三郎は笠をぬげば、紋太夫は透し視る。)

紋太夫。

む、お手前は……。

中間一。

あなたはこの男を御存じでござりますか。

紋太夫。

お、存じてゐる。別に不審の者ではない。

中間二。

いや、それで安心いたしました。

中間一。

では、これでお別れ申します。

(中間二人はそのまゝ下のかたに去る。そのあとを見送りて、紋太夫は平三郎のそばに迫りよる。)

紋太夫。

(打解けて) 平三郎、久振りであつたな。あれから續いて米澤に忍んでゐたのか。

平三郎。

一旦は米澤の身寄に草鞋をぬいで、それから秋田庄内を渡りあるいてゐました。

紋太夫。

あの時お手前に腹を切らせるのも残念、さりとてお手前を渡さぬと云つてはお屋敷の迷惑になる。十年たてば餘炎も冷めようから、それまでは隠れてゐると教へて遣つたが、よく

まあ無事でゐてくれたな。

平三郎。

その十年がなか／＼待遠しうござつたが、兎も角も今まで我慢してゐました。お屋敷様にも

若殿様にもお變りはござるまいな。

紋太夫。

どなたもお達者であるから安心するがよい。十年一昔といふが、お手前もあまり變つたや

うには見えぬではないか。

平三郎。

(笑ふ) いや、もう、すっかり山猿になつてしまいました。それに引きかへて、お手前は

この十年のあひだに大層な出世をなされたさうでござるな。

紋太夫。

誰から聞いたか知らぬが、この紋太夫はお屋敷様の御取立てにあつかつて、唯今では三百

石の御知行を頂戴いたしてゐる。まことに有難いことではないか。

平三郎。

ほう、三百石……。八十石と三人扶持のお手前が三百石の御知行取りとは、まったくお羨

紋太夫。

ましい御出世でござるな。おふくろ殿にも定めてお喜びでござらう。そのおふくろは三年前に世を去つてしまつた。(愁然として)もう少し生かして置きたかつたが……。これも壽命で致方がない。

平三郎。

日頃から孝心深いお手前なれば、その御愁傷はお察し申すが、だんくの出世を見とゞけて死なれたのであれば、おふくろ殿も満足でござつたらう。就ては紋太夫どの。お約束の十年も過ぎましたれば、再び歸參の御取りなしが願はれますまいか。

紋太夫。

それは拙者も承知いたしてゐる。彼の一件も最早ほとほりが冷めれば、お手前の歸參も差支へあるまい。お屋形様にも折々に思ひ出されるとみえて、あの平三郎めはどうしてゐるかと、ひそかに仰せられることもあるぞ。

平三郎。

お屋形様が時々拙者のことを思ひ出されて……。 (思はず落涙する。) 忝けないことではござる。

紋太夫。

併し一應は御意を伺はねばなるまいから、その善惡の決着するまで兎も角も拙者の屋敷に逗留するがよからう。實はこれから御城内へまるつて、舜水先生をおたつね申す積りであつたが、お手前ひとりが不意に押掛けて行つては、屋敷の者が胡亂に思ふかも知れぬから、

平三郎。

拙者が立關先まで案内して、女房に引合はせて置くとしようか。

何分お願い申します。して、御妻女はやはり同藩中の娘御でござるか。

紋太夫。

お手前も薄々は知つてゐるであらう。柳澤殿の家來藪田五郎左衛門のむすめ雪と申す者が……。

平三郎。

(かんがへて) いや、存じてゐます。琴が上手だとかいふ美しい娘……。それと御縁組なされたのか。して、子供衆は……。

紋太夫。

子供はない。いや、そんなことは歩きながら話さう。さあ。
(紋太夫は平三郎を頷で招いて、先に立つてゆく。平三郎もついて上のかたに去る。)

(三)

水戸城内、朱舜水の家。日本作りの古き建物にて、床には明人の書を表装したる幅をかけ、ほかに花瓶、香爐、香合などあり。傍らの書棚には澤山の唐本が積み重ねてあり。壁には拂子、棕櫚團扇なども掛けてあり。上のかたの竹窓の前には大いなる唐机を置く。正面には奥へ出入りの襖あり。

窓の外には竹の植込みありて、庭には一株の老梅樹、花は雪のごとくに咲けり。梅のほとりに竹の寛あり。下のかたには低き四つ目垣と枝折戸ありて、垣の外にも白梅の大樹あり。前の場とおなじ夜にて、月明るし。

(光圀、五十五歳。舜水、八十三歳。短檠の下に相對して坐し、光圀のうしろには小姓が太刀を持ちて侍坐す。舜水は大きい眼鏡をかけ、唐紙の書翰箋に認めたる書信を讀んでゐる。奥より藤兵衛、四十餘歳、茶碗二つを盆にのせて出づ。)

藤兵衛。

粗茶でござります。

光圀。

いや、毎日のことだ。構つてくれるな。

(藤兵衛は光圀と舜水に茶をすしめ、一禮して奥に入る。舜水は書信を讀み終りて暫らく無言。光圀も無言にて茶を啜り終る。)

光圀。

(やがて口を開く。)その書面にも詳しく認めてござらうが、まことに餘儀もない次第で、手前のこゝろざしも水の泡となり果てました。御壯健とは申しながら、先生も最早御老年、せめては本國より子孫の一人を呼び迎へ、朝夕の御介抱をいたさせたいと存じて、長崎表まで人をつかはし、彼の國の便船に通信をたのんで、故郷の様子をうかがはせし處、御子

舜水。

息は已に病死、その子の朱毓仁と言はるゝお人が、兎もかくも祖父さまに一目逢ひたいとすぐに長崎までは参られたが、近ごろ我が國法俄に嚴重と相成つて、朝鮮和蘭の使は格別その他の異國人が長崎以外の土地に踏み出すことは、一切禁制と定められたので、残念ながら今更なんとも致方がござらぬ。

左様にお心を勞されては重々恐れ入ります。わたくしが足かけ十七年、あつき御扶持を蒙つてゐるさへも忝けない御恩と存じて居りますに、まだ其上に本國から子孫をおまねき下さらうとは、そのお志だけでもお禮の申上げやうもござりませぬ。(書翰を把る。)この手紙によりますと、孫めもわたくしに一目逢はれぬのをひどく残念がつてるるやうに書いてござります。

光圀。

それは萬々察し入る。久振りで祖父さまの安否がわかり、遠い海路をわざく、長崎まで尋ねて來ながら、顔も見られず、ことばも交されず、その一通の書翰を残して、そのまゝ空しく歸國するとは、唯々お氣の毒に存じ申す。

舜水。

(眼鏡をはずす。)いかにも孫には氣の毒でござりますが、日本の國法嚴重に相成つて、異國人がみだりに關東へ下ることを許されぬは勿怪の仕合せで、たとひお許しになつたれば

光圀。

とて、今更本國の人に逢はうとは思ひませぬ。併しその朱毓仁といふお人は、先生の血をひいた肉身の孫であると申すではござらぬか。それにも逢ひたいとは思はれぬか。

舜水。

(力強く) 逢ひたいとは思ひませぬ。改めて申すまでもなく、わたくしは先祖より十一代、引きつゞいて明朝に仕へた者でござりますが、その大明の世も韃靼にくつがへされて、中國の衣冠は地に墜ちました。その回復を圖るものは國姓爺の鄭成功一人、幾たびか此の日本に使をつかはして、援兵の儀をねがひ出でましたれど、頼もしい返事もござりませぬだ。(嘆息する。)

光圀。

(慰めるやうに) 大明に援兵を送るに就ては、さまざまの議論もあつたれど、日本は日本を守れば可し、他國のことに加勢は無用と、營中の評議一決して、遂に沙汰止みと相成つたは、これも残念な儀でござつた。

舜水。

頼む日本の加勢はまるらず、流石の鄭成功も力盡きて、遂に臺灣の絶島に居すくみとなつてしまひました。その間にわたくしも日本の加勢を頼まうと存じて、長崎まで二度も三度も往復いたしました。唯今もお話の通り、日本は固く國を鎖して隣國の危急を救はうと

光圀。

はして呉れませなんだ。かうして徒らに月日を送るうちに、國はほろびる……。 (悲憤の聲を顔ばせる。) 國姓爺も世を去りました。幸ひにわたくしはお屋形のお見出しにあづかり、身の措き所もない亡國の遺臣が餘命を安穩に送つて居りますは、世にありがたい事と思ふに付け、本國の人々に對して恥づること多く、常に心を苦めて居ります。伯夷叔齊は周の粟を食はず、先生も他國に身を寄せて、かたきの國の粟を食はぬが義者の道ではござるまいか。なんの恥かしいことがござらう。

舜水。

(頭をふる。) お詞ではござりますが、その伯夷叔齊はわたくしの本意でござりませぬ。わたくしは矢はり本國に踏みとゞまつて、明朝の忠臣と生死を共にする筈でござりましたに、ついうかくと屋形の御恩にほだされ、故國の滅亡をよそに見て一身の安逸を貪る。(自ら怒りみづから罵る。) これが恥かしくはござるまいか。疚しくはござるまいか。この朱舜水、少しく恥を知るならば、どの面さけて本國の人々に逢はれませうか。何十年振りだめぐり逢ふ肉身の孫の前に、不忠不義の祖父の顔をおめくと晒されませうか。逢はれぬが却つて仕合せでござりました。

(舜水はあまりに熱して、咳き入りながら疊に伏す。光圀は小姓をみかへれば、小姓は太刀をそこ

に置き、あわてゝ舜水のそばに寄りて介抱す。

光圀。

(奥にむかひて。) 藤兵衛は居らぬか。早く薬湯を持つてまるれ。

舜水。

いや、いや、左ほどもござりませぬ。必ずお騒ぎ下さるな。

光圀。

昨年の秋の御病氣以來、先生にもよほどお弱りなされたやうに見えますれば、御養生が大切でござるぞ。

(奥より藤兵衛は薬湯をさゝげて出づ。)

藤兵衛。

どうぞなされましたか。

舜水。

(薬をのみて一息つく。) 常に老健を誇るわたくしも、昨年の秋以來、身の衰へをよく知るやうになりました。わたくしも本年八十三歳、限りある命の最早終りに近いたのを悟つて居りますので……。今年の正月には檜の棺をあらかじめ作らせて、最期の用意を整へて置きましたれば、何時仆れましても差支へはござりませぬ。

光圀。

彼の國史編纂の事業も、彰考館を開いてより已に十年、最初は頗る抄取るやうにも相見えたと、進めは進むほどむづかしく、なか／＼思ふやうには抄取りませぬ。こゝで先生を失つては、光圀の片腕もがれたやうにも思はれますれば、かへす／＼もおからだを大

切にして、更に十年、二十年の齡を保たれて、光圀の仕事のまつたく成就するまで御助力ください。いや、あまりに長話をいたして居つては、いよく先生のお疲れを増すであらう。今夕はこれにてお暇申す。藤兵衛。

藤兵衛。

はあ。

光圀。

油断なく御介抱申せ。

藤兵衛。

かしこまりました。

光圀。

(小姓をみかへる。) まるれ。

小姓。

はあ。

舜水。

失禮御免くださりませ。

光圀。

(光圀は小姓に太刀を持たせて立上る。)

藤兵衛。

(光圀は縁を降りて草履をはけば、藤兵衛は送つて出る。光圀は枝折戸を出て見かへる。)

藤兵衛。

はい、はい。

光圀。

(外に出る。)

光圀。

(小聲で。) おまへの眼にも見えるであらうが、先生が此頃の様子はどうも宜しくない。何か

たしの國には黄金が乏しいので、日本の金を本國へ持ち歸れば、殆ど百倍にも通用させることが出来る。(云ひかけて寂しく笑ふ。) いや、それもみな夢であつた。その夢の醒める時節が來た。わたしの亡い後には、あの三千兩は相違なくお屋敷に返上してくれ。残りの金はおまへに遣るぞ。

藤兵衛。

(涙ぐんで。)はい。

舜水。

藤兵衛。

何や彼やで忘れてるだが、いつもの通りに靈牌と香爐を、あの梅の木の下に供へてくれ。はい、はい。

(藤兵衛は眼をふきながら奥に入る。時の鐘きこゆ。舜水は信書を懐にして庭に降りかかり、胸苦しき體にて少しくよろめく。時の鐘つゞけて開ゆ。舜水はよろめきながら算のほりに行きて手を淨める。奥より藤兵衛は鄭成功の靈牌をさげ出づれば、舜水はうけ取りて押頂き、ちつと眺めてゐる。藤兵衛は更に床の間より香爐と香合とを持ち來り、庭の上のかたの老梅樹の下に据ゑる。このあひだに下の方より藤井紋太夫出で、枝折戸の外より窺ひゐる。舜水は梅の下に立つて再び靈牌を押頂く。)

舜水。

明朝第一の忠臣、國姓爺鄭成功の尊靈、君が忠義の魂魄は再び天上より人間に下つて、韃

鞬の夷を蹴ちらし踏みにじり、大明の昔の御代にかへさせ給へ。

(舜水は靈牌を梅の根の上に据ゑ、香を焚いて天に祈る。藤兵衛も少しく引退つて地にひざまづいてゐる。紋太夫もひざまづく。舜水は靈牌を取つて又もや押頂けば藤兵衛は進み寄り、これも靈牌をうけ取りて押頂き、さしげてゆく。)

舜水。

(月を仰ぐ。)今夜の月は取分けて曇つて見ゆる。

(舜水は引返さんとしてよろめき、梅の根下に倒れかゝれば、紋太夫は枝折戸をあけて走り入り、舜水を介抱する。)

紋太夫。

先生……先生……。

(舜水は答へず、唯呻くのみ。奥より藤兵衛出づ。)

藤兵衛。

お、又どうかなされたか。すぐにお薬を持ってまゐります。

紋太夫。

これ、これ。お薬は手前が差上げる。(藤兵衛のそばへ行きて囁く。)な、早く行け。

藤兵衛。

では、何分おねがひ申します。

(藤兵衛はあわて、下のかたに走り去る。)

紋太夫。

(再び舜水を介抱する。)先生、先生。兎も角も内へお這入りなされませ。

舜水。

(頭を掉る) いや、こゝでよい。こゝでよい。

紋太夫。

でも、庭先では冷えてなりません。先づあちらへ……。

舜水。

わたしは多年この梅の樹を愛してゐた。この梅の花を見て、故郷の江南の春を偲んでゐた。

この樹の下で死ぬのが本望だ。

紋太夫。

え、死ぬなどとは飛んでもない。先生、わたくしは紋太夫でござります。

舜水。

お、紋太夫か。(探りながらに紋太夫の手を取る) 紋太夫か。屋形からお預けになつた大勢

の弟子の中でも、お前が學問に最も精を出して勉強した。わたしもお前を一番可愛がつてゐた。

紋太夫。

大勢の御門人のうちでも、未熟のわたくしにお目をかけられ、取分けて御深切に御教授く

だされた、その御恩は身にしみて覚えて居ります。小身者の紋太夫が今日の高祿を頂戴い

たすも、第一には屋形の御恩、二つには先生の御恩でござります。

舜水。

師匠の恩は忘れてもよい。主君の恩は必ず忘れてくれるな。この舜水も人なみに忠義の魂

を懐きながら、事はこゝろざしと食ひ違つて、君國に對して萬分の一の忠義も盡さず、今

や異國の土となるが、せめて私の教へを授けた弟子達には、一人も忠義の道を缺せたくな

紋太夫。

い。(念を押して) よいか、よいか。日ごろの教へを忘れるなよ。

餘人は知らず、この紋太夫は先生が多年の御教訓、一々わが胸に刻みつけて、かならず忘

却いたしませぬ。その儀は憚りながら御安心くださりませ。

舜水。

才人は才にあやまらる。いたづらに小才を弄して、心にもない不忠者の名を取るまいぞ。

紋太夫。

はあ。

紋太夫。

(舜水は苦しき息をつきながら又倒れかゝれば、紋太夫は羽織をぬいで又介抱する。)

何分こゝではどうにもなりません。先づ一旦は内へお這入りなされませ。いや、それより

も早くお薬を差上げなければ……。 (奥へ行きかけて又立戻る) もし、先生。しつかりとな

されませ。(下の方を見て) はて、藤兵衛めは何をいたしてゐるのか。

(紋太夫は薬を取りに行かうか、舜水を介抱しようかと、自分一人でうる／＼しながら、笥の水を

茶碗に汲みて舜水に衛ませる。)

舜水。

はい、はい。

紋太夫。

おまへは家の勝手を知つてゐる筈だ。奥へ行つてわたしの衣冠を持つて来てくれ。わたし

紋太夫。が日ごろ大切にしている明朝の正服だ。早く、早く……。

はい、はい。かしこまりました。(再び下のかたを見て。)

藤兵衛。唯今戻りました。はて、藤井様はどうなされたのか。(舜水のそばに寄る。)

如何でござります。

(舜水は藤兵衛にかへられたまゝで呻いてゐる。下のかたより光圀は小姓を連れて出づ。そのあとに醫者一人と茶坊主二人附添ひ出づ。)

とに醫者一人と茶坊主二人附添ひ出づ。)

光圀。(あわたゞしく。)

藤兵衛。(悲しさに。)

光圀。かねて弱つてはるられたが、どうして俄に容體が變つたか。

(光圀は醫師をみかへれば、茶坊主等は舜水をかへ起し、醫者はその脈をみる。光圀も藤兵衛も立寄つて窺ひゐる。)

立寄つて窺ひゐる。)

醫者。(嘆息して。)

光圀。(同じく嘆息して。)

紋太夫。が日ごろ大切にしている明朝の正服だ。早く、早く……。

はい、はい。かしこまりました。(再び下のかたを見て。)

藤兵衛。唯今戻りました。はて、藤井様はどうなされたのか。(舜水のそばに寄る。)

如何でござります。

(舜水は藤兵衛にかへられたまゝで呻いてゐる。下のかたより光圀は小姓を連れて出づ。そのあとに醫者一人と茶坊主二人附添ひ出づ。)

光圀。(あわたゞしく。)

藤兵衛。(悲しさに。)

光圀。かねて弱つてはるられたが、どうして俄に容體が變つたか。

(光圀は醫師をみかへれば、茶坊主等は舜水をかへ起し、醫者はその脈をみる。光圀も藤兵衛も立寄つて窺ひゐる。)

立寄つて窺ひゐる。)

醫者。(嘆息して。)

光圀。(同じく嘆息して。)

醫者。はあ。(頭を垂れる。)

光圀。むゝ。まつたく残念だな。

(奥より紋太夫は明朝の衣冠をさへげて出て、光圀を見て敬禮する。)

光圀。紋太夫。残念ながら既に見込みはないと云ふことだぞ。

紋太夫。(おどろく。)

左様でござりませうか。(舜水のそばに寄る。)

舜水。着せてくれ……。着せてくれ。

(紋太夫は衣を舜水の上に着せかけ、冠を梅の枝にかける。)

光圀。先生。光圀がまゐりましたぞ。

舜水。おゝ、屋形……。紋太夫もゐるか。

紋太夫。紋太夫はこれに居ります。

舜水。屋形……。この上ともに努力して、國史編纂の大事業を成就なされ。紋太夫……。まこと

の忠義の人となれ。

(光圀と紋太夫は頭を垂れて聴く、舜水はやがて衣を抱きながら空を見つめて叫ぶ。)

舜水。

大明三百年の天下……。韃靼四百餘州の仇……。お、國姓爺……。國姓爺……。明朝第一の忠臣……。(云ひ終りて息絶ゆ。)

(醫者は再び立寄つて舜水の息を窺ひ、光圀に向つてもう息は絶えたといふ。人々は今更のやうに顔をみあはせる。)

光圀。

(眼をしばたゝいて。)まことに悲壯な最期であつたな。

紋太夫。

死ぬる際まで國姓爺の名を呼んで……。先生の胸中察し入ります。

藤兵衛。

あの棺桶がたうとうお役に立ちますのか。

(人々は眼をめぐふ。光圀は舜水の死骸をみかへりて云ふ。)

光圀。

今となつては如何に悔んでも返らぬことだ。先生を師と仰いでから十七年、思へば短い月日でもなかつた。そのあひだに先生は慷慨悲憤の意氣を以て、俺まを撓ますに大義を教へ、名分を説いて下された。先生はこのまゝ死なれても、その精忠義烈の精神はいつまでも我々の胸に生きてゐる。それだけでも實に尊い賜物ではないか。

紋太夫。

謹んで。仰せの通りでござります。

光圀。

光圀。あらためて先生にお禮を申上げねばならぬ。

(光圀は紋太夫に指圖して梅の枝を切れといふ。紋太夫はこゝろ得て梅の一枝を切り取りて捧ぐれば、光圀はそれを舜水の前に供へ、ひざまづきて拜すれば、紋太夫も藤兵衛も禮拜す。醫者も小姓も茶坊主等も頭を垂る。)

幕

第三幕

(一)

第二幕より十年の後。元祿五年十一月下旬の午後。

小石川の水戸邸内、藤井紋太夫の宅。紋太夫は十年のあひだに更に立身して、千八百石の年寄役に昇進したることゝ知るべし。家は質素なる二重屋臺にて、正面の床の間には「精忠貫日」の四字を書し、「天和壬戌初春、朱舜水書」の落款ある一幅をかけ、花生げには白き寒菊を挿してあり。つゞ

いて地袋付きの違ひ棚、ついで出入りの襖。床の間の上のかたは壁にて、屏風を立てまはしてあり。庭には石燈籠、松の立木、山茶花、南天などあり。

(幕あくと、奥の襖をあけて一人の腰元は火桶を持ち出て、一人の腰元は花生けの花を直し、屏風の位置を直しなどする。やがて下の方の廻り縁づたひに、紋太夫の妻お雪は藪田五郎左衛門を案内して出づ。第一幕より二十年を経たれば、お雪は已に三十七歳、父の五郎左衛門は五十八歳となれり。お雪は質素なる武家の女房の風俗、五郎左衛門は年には不似合と見ゆるほどの華美なる風俗にて社袴を着てゐる。それと見て、腰元どもは五郎左衛門の前に手を支へる。)

腰元。

いらつしやりませ。

五郎左。

いや、たびく来て厄介になるな。(座に着きながら四邊を見まはす。)いつもながら座敷も綺麗になつてゐる。庭の手入れもよく行き届いてゐるな。

お雪。

(腰元に。)早くお茶の支度をしや。

腰元。

かしこまりました。

五郎左。

(腰元二人は奥に入る。そのあとを見送りて、五郎左衛門は笑ふ。)

座敷も綺麗、庭も手入れが行きとゞいてゐると、なんでも構はずに褒め立て、見たが、實

は腰元どもの聞く前でちよつと世辭を云つたまでのことだ。なるほど穢いといふでもないが、どうも綺麗とは申しにくいな。むかしと違つて今日では、紋太夫どもの年寄役に立身して、千八百石を頂戴してゐる身分ではないか。その重役の住居がこの體では少しく不釣合だな。

お雪。

ほかの藩中とは違ひまして、お上より下々まで質素を守るが御家風でござります。殊に當家の主人などは御重役の末席にも列る身の上でござりますれば、猶々質素を旨として、諸人の手本とならねばなりません。

五郎左。

(火桶に手をかざしながら。)水戸の御家風はおれも豫て承知してゐるが、千八百石の高祿を頂いてこんな暮しをしてゐるほどなら、出世してもしないでも同じことだ。五郎左衛門はよい婚を持つたと羨まれながら、これでは餘り仕合せでもないやうだぞ。(火桶をなで廻して。)この火鉢などもおれの家では先づ女中部屋の隅に置く代物で、今時のお座敷道具ではないな。

お雪。

(無理に笑ふ。)お父様の御屋敷とはまるで御家風が違ふのでござります。

五郎左。

二口目には家風々々といふが、人間には身分相當といふことがあるものだ。お前もよく知

つてゐる通り、おれの御主人柳澤様も以前は百六十石と御藏米三百七十俵の小身であつたが、館林様がお城へ這入つて天下の將軍職にならせられると、それに連れて御主人も鰻上りの御出世で、今では六萬二千石のお大名様だ。御主人が出世なされば、その家來のおれもまた自然に出世して柳澤家の家老職、千六百石を頂戴するほどの身分に相成つたが、それでも紋太夫殿にくらべると、おれの方がまだ二百石少いではないか。ところが、その暮し向きの違ひ方はどうだ。

(お雪は聞くを厭ふやうに顔をそむけてゐる。腰元二人が茶と菓子運び出して五郎左衛門の前に置き、丁寧に會釋して去る。)

五郎左。

(笑ふ。) どの女も行儀がよい。これも御家風だな。は、は、は、は。

お雪。

いつもく粗茶でござりますが、どうぞ召上つてくださりませ。

五郎左。

かたきの家へ來ても口を濡らして歸るものだと言ふ、ましてこゝは婿の家だ。どんな茶でもおれは飲むよ。(茶を一口飲んで、不味さうに顔をしかめて、茶碗を下に置く。)

お雪。

(不快らしく) わたくしがお父さまのお手許に居りました頃には、そんなお茶でも滅多に召上つたことは無かつたやうに覺えて居りますが、此頃では御主人様の御家風につれて、お

五郎左。

口がよほどお上りなされたと見えますな。

それをおれは先刻から云つてゐるのだ。人間には身分相當といふことがあるもので、昔は昔、今は今だ。おればかりではない、御主人とても其通りで、この頃のお屋敷のお暮し向

お雪。

きの派手やかさを、お前も知つてゐるではないか。

それはわたくしも存じて居ります。柳澤様は六萬石餘りの御身上で、十萬石以上のお暮しをなさる。偉いものぢやと褒めるもあれば、成上り者は兎角にさうしたものぢやと……。

五郎左。

(聞き咎める。) なに、成上り者だと……。これ、親子のあひだでも詞を慎め。おれの殿様、おまへに取つても元の御主人を、成上り者とは何のことだ。

お雪。

わたくしが申すのではござりませぬ。あまりに奢りが強くいらせられますので、世間ではそんな噂をいたす者もあるやうに聞いて居ります。お父様も御家老役、ちと御意見を申上けられては如何かと存じられますが……。

五郎左。

え、餘計な世話を焼くな。今こそ六萬石でも、やがては十萬石にも二十萬石にも百萬石にも御出世なさる柳澤様だ。些とぐらゐの奢りや贅澤に不思議があるか。御意見どころかおれも傍から煽り立て、お勧め申してゐるくらゐだ。は、びつくりするな。おれも昔の

五郎左衛門ではないぞ。は、は、は、は、は。

(五郎左衛門は得意らしく笑ふ。お雪は呆れたやうに聴いてゐる。奥の襖をあげて、藤井紋太夫、四十二歳、社杯にて出づ。)

紋太夫。

五郎左。

紋太夫。

舅御、ようこそお越しなされた。早速御挨拶に出ます筈でござつたが、今夕は御殿に於てお能のお催しがおるので、その支度のために思はぬ失禮。なにとぞ御免ください。實はそのお催しでまるつたのだが、今晚のお能は何かの御祝儀かな。御承知のごとく、老公には一昨年を以て御隠居なされ、その以來本國に退隠して居られましたが、先頃久々にて御出府、將軍家に御暇乞ひも相濟んで、來月二日には御歸國に相成る筈でござります。就てはそのお名残りとしてお能を催され、家中の者一同に拜見を許さるる事になりまして、お出入りの觀世を始め、諸流の名ある役者も召されましたが、老公御自身にも皇帝のシテを勤めらるゝと承はつて居ります。

五郎左。

いや、それだ、それだ。それで拙者も押掛けて參つたのだ。觀世や金春は毎々見馴れてるので、一向めづらしいとも存ぜぬが、水戸の老公が御自身に舞はるゝお能ばかりは、金銀を積んでも容易に拜見は出来ぬものだ。拙者も一生の話草に、是非それを拜見いたした

お雪。

五郎左。

お雪。

五郎左。

紋太夫。

お雪。

紋太夫。

いと存じて、かやうに衣服を整へてまるつたのだが、何とかお手前の取計らひで、末座で拜見は叶ふまいかな。

御家中の者は女子供でも拜見苦しからずといふお觸れ出しで、わたくしも後刻拜見に出たいと存じて居りますが、ほかのお屋敷のお人を入れることは……。(紋太夫の顔を見る。)

そこを枉けて頼むのだ。他藩の者とは申しながら、この五郎左衛門は紋太夫殿が現在の舅であれば、なんとか申譯も立たうではないか。

それでも餘の時とは違ひまして、老公様が御自身にお能を遊ばすのでござりますれば……。いや、それだから是非拜見したいと云つてゐるのだ。お前では判らぬ。これ、紋太夫どの。どうか特別の取計らひはなるまいかな。萬一やかましく申す者があつたとしても……。 (や

や誇るが如く。) あれは柳澤美濃守の家老藪田五郎左衛門でござると云へば、おそらく有耶無耶に濟んでしまつて、お手前の迷惑にもなるまいと思はれるが……。 どうであらうな。承知いたしました。何とか御取計らひを致しませう。

(不安らしく。) もし、あなた……。

よい、よい。わたしに任せて置け。

お雪。

でも、柳澤様の藩中と知れましては……。

五郎左。

(不満らしく。) 柳澤がなぜ悪いのだ。

紋太夫。

舅御の前では申しにくい事でござるが、老公には柳澤殿がきついお嫌ひで……。 (苦笑ひする) 併し柳澤殿御藩中とは申さずに、何とか取計らふ術もござれば、お能拜見の儀は拙者がお請合ひ申した。(お雪に。) おまへも安心してゐるがよい。老公も今度御歸國に相成れば最早再び御出府はあるまい。従つて江戸屋敷の萬事萬端もこれからは變つて来る。今までの御家風ばかりを云つてはゐられまいぞ。

お雪。

(よんどころなく。) はい。

五郎左。

流石に紋太夫どのは眼先が明るい。世の中はだんくんに變つて来て、どこの屋敷でも今までの御家風ばかりを守つてはゐられない時節になつて来たのだ。(お雪に。) おまへも覺えてゐるであらう。今の御主人が、まだ主税様と申して部屋住みでゐられた頃に、水道橋際で往來の紅繪賣りを呼びとめて、おやま繪を買はうとなされた事がある。それをおれが怪しからぬとか、柔弱だとか叱つて、その繪をすたくくに引き裂いてしまつて……。 (笑ふ。) いや、今更思へばおれの方がよつほど時代おくれで、主税様の方が遙かに御發明でいらせ

紋太夫。

られたのだ。それほどの御發明なればこそ、唯の御家人から六萬二千石のお大名にも出世なされた。まつたくあの時のことを考へると、おれは今でも冷汗が出るよ。そのお話はかねて承はつて居りますが、その頃にくらべると世の中はすつかり變りました。

お雪。

殊に今の公方様の御代になりましたから、急に又變つて来たやうでござります。

五郎左。

それだから時代おくれの偏屈な御家風は止めにしろと云ふのだ。

紋太夫。

(笑ふ) お手前の御指南をうけて、おひく改革いたす積りでござれば、まあ長い眼で御覽

くだされ。

腰元一。

(下のかたの縁つたひに腰元一人出づ。)

紋太夫。

吉田様がお見えになりました。

腰元一。

はい。

紋太夫。

これへ通せ。

(腰元は引返して去る。)

五郎左。

お客來かな。

紋太夫。

いや、日ごろ出入りを致す者で、お客といふほどでもござりませぬが、お能が始まるまでには少しく間もござれば……。 (お雪に) 五郎左衛門殿をあらへ御案内申して、粗末ながら御夕飯でも差上げてはどうだ。われ々の家の手料理、所詮お口には合ふまいと存するが……。

五郎左。

いや、今日のところは御家風で結構々々。では、遠慮なく御馳走に相成るとしようか。

お雪。

御案内申します。

(お雪は五郎左衛門を案内して奥に入る。)

紋太夫。

(あとを見送る。) 五郎左どのも昔とは大分變られたやうだな。あれでなければ此頃の柳澤家の重役は勤められまい。

(紋太夫は笑つてゐる。下のかたの縁つたひに吉田平三郎は社杯すがたにて出で、縁側に手をつかへる。)

紋太夫。

平三郎。けふはなかく冷えるな。

平三郎。

霜月も末でござれば、これが本當かも知れませぬ。どうやら空も時雨れかゝつてまゐりま

平三郎。

した。

紋太夫。

お手前もお能拜見であらうな。

平三郎。

拜見いたしたいと存じて居ります。(云ひさして左右を見かへる。) お手前様には……。

紋太夫。

勿論のことだ。拙者ばかりでなく、家内も拜見に出る筈だ。

平三郎。

この平三郎はお手前様の御口添へに因つて、十年以前に歸參を許され、元の鷹匠役では人目に立たうとあつて、御徒組の方に廻されましたが、其後もお手前さまの御推擧を蒙つて百五十石の御馬廻りに御取立てに相成りました。それもこれもお手前さまの御恩と、朝夕ありがたく存じて居ります。就きましては、手前が思ひ付きましたことを腹藏なく申上げても宜しうござりませうか。

紋太夫。

(うなづく。) む、身分こそ違へ、お手前と拙者との仲だ。なんなりとも單りなく申してくれ。

平三郎。

(すり寄る。) 今夕のお能拜見をお見合せなされては如何でござりませう。

紋太夫。

なに、お能拜見を見合せろと……。それは又なぜだな。

平三郎。

御近習頭山崎主水殿より竊かに承はりましたところに據れば、御老公には唯一言、紋太

夫めは怪しからぬ奴だと仰せられたと申すことをござります。
紋太夫めは怪しからぬ奴……。(かんがへる。)なるほど老公としては、さう思召すかも知れぬな。

平三郎。日頃からお家大事と忠勤を勵まる、お手前様を、怪しからぬ奴と仰せられました御老公の思召は……。。(これも考へる。)手前共には何分合點がまゐりませぬ。

紋太夫。老公は一昨年御隠居あそばされたが、當お屋形は御孝心ふかく、且は義理堅いお方であるので、何事も御先代の通りと素直に御家風を守つてゐらるゝが、それではお家の爲にならぬやうに思はれる。

平三郎。(その意を解し兼ねるやうに。)さうでござりませうか。

紋太夫。貴公等もかねて承知の通り、老公は平生から京都の禁裏をあつく御尊敬なされ、何事も京都を第一、江戸を第二といふお仕向け方であつたので、兎かくに將軍家の覚えもめでたからず、老中方からは白い眼で睨まれ、御三家のうちでも水戸家ばかりは繼子扱ひをされてゐた。勿論、老公の御一代はそれでもよいが、お代替りの今日と相成つても、矢はりその流儀で押通さうとするのは危い。これからは我が水戸藩も宗旨をかへ、恐れながら京都を

二の次にして、將軍家を第一の守本尊と崇めたてまつらねばならぬ。お家の安泰を計る者はそこに眼をつけるのが當然のことだ。紋太夫はその意見で、當お屋形に内々お勧め申してゐる。恐くそれが老公のお耳に這入つて、紋太夫めは怪しからぬと俄に御機嫌を損じられたのであらうよ。

平三郎。(ため息をつく。)いや、それで判りました。仰せの通り、御老公のやうな萬人に優れたお方は格別、お代替りの今日と相成りましたは、飽までも江戸の將軍家にお縫り申す方がお家安泰の道かも知れませぬな。

紋太夫。それには將軍家にお氣に入りの柳澤、彼の人にも深く取入つて置かねばならぬ。幸ひ拙者の妻は柳澤家の家老職敷田五郎左衛門の娘であれば、その縁を辿つて先頃より柳澤の屋敷へも屢々出入りをして、主人の美濃守殿にも對面を許されてゐる。それらの事も或は御老公に洩れきこえて、いよく御機嫌を損じられたのかも知れぬ。

平三郎。御老公は平生から柳澤殿が大のお嫌ひで、あれは小人である、佞人である、將軍家のお爲にならぬ奴であると、たびく仰せられたとか承はつて居ります。

紋太夫。その大嫌ひの柳澤家へ出入りをして、賄賂進物などを贈る。これも老公の御意には入るま

い。いや、散々だな。(苦笑ひする。)併しこの紋太夫のすることは、決して自分の爲ではない、我身の出世の利欲のためではない、一から十までお家の爲だ。それはお手前達もよく察してくれ。

平三郎。

たとひ誰がなんと申しませうとも、お手前様の御忠節は手前がよく存じて居ります。

紋太夫。

(床の掛物を指さす。)あの掛地には精忠日貫とある。あれは朱舜水先生がこの世を去られる前の月に書いて下されたもので、拙者に取つては大切のお形見だ。あの掛地に對しても忠義を忘れては相濟まぬではないか。

平三郎。

(感激したやうに。)はあ。

(この時、下のかたの庭口より若い中間百助が出て來りて座敷を窺はうとするを、紋太夫は早くも見咎める。)

紋太夫。

そこへ參つたのは誰だ。

百助。

わたくしでござります。

紋太夫。

お、百助か。なにしに參つた。

百助。

もう御殿へおあがりの時刻と存じまして、御様子を見にまゐりました。

紋太夫。

む、やがて出るから其積りで待つてゐろ。

百助。

かしこまりました。

(百助は下の方に去る。)

平三郎。

あれは新參の中間でござるか。

紋太夫。

五六日前から奉公にまるつた者だが、江戸馴れてゐるので役に立ちさうだ。

平三郎。

江戸馴れてゐる……。(かんがへる。)どこかで見たやうな男だが……。

紋太夫。

當人は初奉公と申してゐるが、こゝへ來るまでも何處かの屋敷を渡りあるいてゐるのかも知れぬな。

平三郎。

さうかも知れませぬ。(又考へる。)はて、確に見おほえのある顔だが……。どうも思ひ出されぬ。

紋太夫。

なにをそんなに考へてゐるのだ。

平三郎。

いえ、別に……。(氣をかへて。)そこで、唯今申上げました今夕のお能拜見の儀は……。どうでもお出になりますか。

紋太夫。

今更俄に見合せるのも異なるものだ。いよく老公の御機嫌を損じることになるではない

か。

平三郎。

いつそ急病と申立てられて、こゝ五六日は出仕をお見合せなされては如何でござります。

紋太夫。

そのあひだに御老公は御歸國なされませう。
老公は來月の二日御歸國と觸れ出されてゐるから、こゝで病氣と申立て、五六日引籠つて
れば……。 (少し考へる。) 併し多年の御恩を蒙つた老公の御歸國、殊に今度かぎり再び
江戸の地を踏まぬと仰せられてゐるものを、そのお見送りさへ致さぬといふは如何にも心
苦しい。兎もかくも今夜のお能拜見を濟ませてから、更に考へてみることに致さう。
(不安らしく。) 左様でござりますか。

平三郎。

紋太夫。

若し紋太夫に御不審があれば、病中とてもお召出しが無いとは限るまいではないか。假病
などを構へて引籠るのは、却つて宜しくないやうに思はれるぞ。

平三郎。

紋太夫。

(まだ不安らしく。) はあ。
それともお手前は何か他に聞き込んだことでもあるのか。

平三郎。

いや、別に何事もござりませぬが……。唯なんとなく不安に思はれまして……。
(笑ふ。) そんな氣の弱いことではならぬ。では、拙者もよく考へて見るから、何か又聞き込

平三郎。

んだことがあらば、心得のために早速知らせて貰ひたい。
承知いたしました。(空をみる。お、いつの間にか暮れかゝりました。では、御免くださ
りませ。

紋太夫。

(平三郎は縁づたひに立去る。あたりは次第に薄暗くなる。)
ほんにもう暮れかゝつた。扱今夜はどうするかな。
(紋太夫は思案してゐる。下のかたの庭口より朱舜水、第二幕のすがたにて上のかたへ徐かに行き
かゝる。)

紋太夫。

(すかし見て縁先に出る。) あ、先生……。舜水先生ではござりませぬか。

舜水。

(しづかに見かへる。) 紋太夫。十年振りでおまへに逢つたな。
はあ。(思はず縁に手をつく。)

紋太夫。

やがてお能の始まる時刻だ。猶豫せずに早くゆけ。
はあ。

舜水。

わたしは鏡の間で待つてゐるぞ。
(云ひすて、舜水は消ゆるが如くに立去る。)

紋太夫。

(そのあとを見送りながら俄にこゝろ付く。む、さうだ。奥には五郎左どのも待たせてある。どうでも案内して行かねばなるまい。)

六藏。

(紋太夫は起つて奥へ行かうとする時、下のかたの庭口より中間六藏あわたとしく走り出づ。)

紋太夫。

あわたとしい、何だ。

六藏。

唯今そこで吉田様が殺されました。

紋太夫。

今こゝを出て行つたばかりの平三郎が……。して、相手は誰だ。

六藏。

新參の百助でござります。

紋太夫。

なに、百助が……。平三郎を殺したか。

六藏。

親のかたきだと申しました。

紋太夫。

親のかたき……。兎も角も見とゞけてまるらう。

(紋太夫は押取刀にて庭に駈け降り、下のかたへ走りゆく。六藏もつゞいて走りゆく。奥より五郎左衛門とお雪出づ。お雪は衣服をあらためてゐる。笛太鼓の調への音遠くきこゆ。)

五郎左。

これ、いつまでおれを待たせて置くのだ。

お雪。

はて、紋太夫殿は……。(そこらを見る。)どこへ行かれましたか。

五郎左。

安請合をして置いて、おれを置き去りにして出て行つたのではないかな。婿舅の間でも、そんな不埒なことをすれば勘辨ならぬから然う思へ。

お雪。

まさかにそんな事もござりますまいが……。唯今腰元どもを呼んで調べさせますから、暫らくお待ちくだされませ。

五郎左。

早くしろ、早くしろ。いつまでべんぐと待つてゐられるものか。あれ、あの通り、囃子の音がきこえるではないか。

お雪。

はい、はい。

五郎左。

もし紋太夫が出て行つたとあれば、お前がおれを案内するであらうな。

お雪。

わたくしに御案内は出来ませぬ。

五郎左。

そんなら紋太夫を呼んで来い。

お雪。

はい、はい。

五郎左。

え、早くしろと云ふのに……。

(五郎左衛門は焦れてお雪を突き飛ばす。お雪は父をなだめる。囃子の音。庭口より紋太夫は引返

して出づ。

五郎左。お、紋太夫。お能はもう始まつたぞ。

紋太夫。(それを聞かざるやうに。)あ、残念なことを致した。

五郎左。人をさんぐ待たせて置いて、なにが残念だ。

お雪。(氣がつく。)お、履物も無しに庭へ出て……。どうなされたのでござります。

紋太夫。(息をついて。)平三郎が討たれたのだ。

お雪。え、平三郎どのが……。

紋太夫。たつた今こゝを出ると、不意に突いてかゝつた者がある。廿年以前、水道橋際に於ておの

れの手にかゝつた公儀のお鷹匠、眞野庄九郎のせがれ庄五郎が父のかたきを討つごと名乗

りかけて、忽ち平三郎を仕留めた上に、どこへか姿を隠してしまつた。

お雪。御門改めのきびしい此のお屋敷内へ、どうしてそんな者が入り込んだのでござりませう。

紋太夫。それが新參の中間百助だ。

お雪。え、あの百助が……。では、親のかたきを附狙ふために、素性をかくして奉公に來たので

ござりましたか。

五郎左。こゝの家の奉公人が仇討をして逃けるとは……。いや、飛んだことが出來たものだ。飼

犬に手を咬まれるとはこの事だな。

お雪。あまりに思ひも付かないので、何だか夢のやうでござります。

紋太夫。まつたく夢のやうだ。身分こそ違へ、あの男もおれの味方であつたものを、かへすくも

残念であつた。

お雪。(紋太夫は嘆息しながら縁に腰をかける。)

では、早くその事をお届け申さねばなりませんまい。

紋太夫。いや、これからお能が始まるといふ矢先に、人騒がせをしてはならぬ。委細は今夜を過ぎ

てからのことだ。先づそれまでは隠密だぞ。

お雪。はい。

五郎左。成程それがよいかも知れぬ。では、すぐに案内してくれるか。

紋太夫。御案内いたしませう。お雪も來い。

(紋太夫は足袋の泥を掃つて縁にあがる。冬の日ばまつたく暮れる。)

(11)

水戸邸の奥。能舞臺、鏡の間。一面に毛氈をしきつめて、正面には銀襖。上のかたは橋掛りの心にて緞子の幕を垂れてあり。下のかたも折り廻して銀襖。正面には大なる姿見の鏡を据ゑ、衣桁に唐織の衣裳をかけ、能に用ゐる小道具のたぐひも置いてあり。數ヶ所に大燭臺が煌々として輝けり。
 (光圀、六十五歳、赤がしら、金の唐冠、能樂の「皇帝」の後シテに出る鍾馗の扮装にて、蒔繪のかづら桶に腰をかけてゐる。太田三七、神崎銀之丞の若侍二人は後見の役にて控へゐる。小姓一人は太刀をさし上げてゐる。少しく引退つて下の方に鹿島甚兵衛、瀧坂五郎次の二人は中年の侍樂屋の手傳ひ役にて控へゐる。能樂の囃子の音きこゆ。下のかたより穂塚彌八郎出づ。)

彌八郎。

申上げます。

光圀。

なんだ。

彌八郎。

佐々助作どの兵庫表より歸府いたされました。

光圀。

お。助作が戻つたか。この間から待つてゐたのだ。早く呼べ。

彌八郎。

これへ召しましても宜しうござりますか。

光圀。

苦しうない。早く連れてまるれ。

彌八郎。

はあ。(引返して去る。)

甚兵衛。

兵庫表の御建碑出來のことは、かねて承知いたして居りましたが、いよく助作殿が戻られたと相見えませう。

光圀。

助作だけが戻つたのかな。

五郎次。

助三郎殿はあとに残つて、何かの始末をしてゐられるのかも知れませぬ。

光圀。

大方そんなことかも知れぬ。いづれにしても助作が戻つてまるれば、石碑建立の顛末も詳しく判るであらう。

(下の方より佐々助作は道中のこしらへ、彌八郎に案内されて出づ。)

助作。

唯今歸府つかまつりました。早速のお召とござりますので、衣服も改めずに御前へまかり出ました。

光圀。

お、大儀であつた。このたびは其方一人で戻つたのか。

助作。

兄助三郎は墓碑建立の御供養、又は諸支拂ひ等のために、兵庫表に今以て逗留。わたくし

光 圀。一人だけは一足先に立歸つてまゐりました。
助 作。助三郎から度々の書面で大抵のことは承知いたしてゐるが、墓碑はとゞこほりなく建立されたな。

助 作。とゞこほりなく出来いたしました。當六月初旬より十一月まで足かけ六ヶ月を費しましたは、少しく延引のやうにも相見えまして、殿の思召も如何かとは存じましたれど、地震雷動等にも故障なきやう石屋どもにも篤と申聞かせ、専ら入念に作らせたので、思ひのほかにも日數をかさねましてござります。

光 圀。急ぐには及ばぬ、精々入念に作らせよと最初から申付けてあつたれば、少しくらゐるの延引は致方がない。どうだ、見事に出来たか。

助 作。取りあへずこれを御覽に供へよと、兄より渡されてまゐりました。

(助作はたづさへ來りし包みを解きて、墓碑の石摺を出せば、三七は進み出て受取り、光圀の前にささげらる。)

光 圀。石摺りを持參したか。ひろけて見せい。
三七。はあ。



光 圀。(銀之丞も手傳ひて、その石摺りをひろげる。彌八郎は燭臺をひき寄せる。)
(讀む) 嗚呼忠臣楠子之墓。む。 (氣に入つたやうに眺めてゐる) 光圀の自筆も斯うして見ると思つたよりもよく見えるな。

彌八郎。まことに見事なお出来でござります。

助 作。今一枚は碑陰の銘で、曩に申上げましたる通り、都に於て能書のきこえある岡村元春の筆でござります。

(助作は他の一枚の石摺を出せば、三七と銀之丞は以前の石摺を取片附け、今度は甚兵衛と五郎次が入れ代つてその石摺をひろげる。)

光 圀。(見る) これは舜水先生が特に精神を籠めて綴られた大文章だ。先生は十年前に世を去られたが、その書きのこされた楠公の書讀が測らず今度の役に立たうとは……。 (追懐に堪へざる氣色) 先生は明朝の忠臣であるから、わが身にひきくらべて楠公の忠節を大いに賞讃してゐられた。光圀が大義名分をあやまらず、天地に恥づることなく一生を終ることの出来るのも、舜水先生の教へと云つてよい。思へば有難いことであつた。明日あらためて拜見するであらうから、わしの居間へ持參して、床の間に飾つて置け。

二人。

はあ。

(甚兵衛は楠子之墓の石摺を持ち、五郎次は舜水の石摺を持ちて、下のかたに立去る。)

光 圀。

彌八郎。

彌八郎。

はあ。

光 圀。

藤井紋太夫は參つてゐるであらうな。

彌八郎。

(少し考へて。)まだ見受けぬやうでござりましたが……。篤と見てまゐりませう。

光 圀。

早く見てまゐれ。

彌九郎。

見てまゐるだけでござりますか。

光 圀。

いや、すぐにこれへ來いと云へ。

彌八郎。

はあ。

(彌八郎は下のかたに去る。)

光 圀。

(助作に。)其方は定めて疲れたであらう。委細は明日のこととして、今夜は退つて休息いたせ。その方どもの働きに因て、光圀年來の望みを遂げ、日本の忠臣楠正成の墓碑建立を成就して、甚だ満足に思ふぞ。

助作。

過分の御褒詞恐れ入りました。然らば御免くださりませ。

光 圀。

(助作は一禮して下のかたに去る。光圀は更に三七と銀之丞をみかへる。)

二人。

はあ。

光 圀。

(三七と銀之丞も一禮して正面の襖をあけて去る。上のかたにて能樂の囃子の音きこゆ。)

光 圀。

(耳をかたむける。)む。もう後シテの出場も近いな。紋太夫はなにを致してゐるか。

紋太夫。

紋太夫、まるつたか。

光 圀。

はあ。

紋太夫。

佐々助作の戻つたを存じてゐるか。

光 圀。

楠殿の墓碑建立の儀も滞りなく相濟んで歸府いたしたやうに承はりました。

紋太夫。

今更ではないが、楠は忠臣だな。

光 圀。

仰せの通りでござります。

光 圀。

楠が忠臣なら、足利は逆臣だな。

紋太夫。はあ。

光圀。おまへは自分の主人を楠にしたいか、足利にしたいか。

紋太夫。(曖昧に。)はあ。

光圀。舜水先生はお前になんと教へた。

紋太夫。はあ。

光圀。光圀が一生の仕事として、日本の歴史を作らせてゐるのを何と思ふ。又、このたびも攝州湊川に正成の墓碑を建てさせたのを何と思ふ。

紋太夫。はあ。

光圀。わしは今度こそ本當の隠居で、來月二日には歸國する。光圀は綺麗好きであるから、その

出立前に江戸屋敷の掃除をして行かねばならぬ。悪いものを残して置くと、わが家の爲にもならず、天下の爲にもならぬからな。

紋太夫。そのお掃除ならば我々が御用をうけたまはりまして、何なりとも仕るでござりませう。

光圀。いや、こればかりはわしが自身に手を下さねばならぬのだ。

紋太夫。はあ。

(正面の襖をあけて、三七出づ。)

三七。もはやお出端でござります。

光圀。よい、よい。すぐに出る。

(三七は引返して去る。)

光圀。紋太夫。近うまるれ。

紋太夫。(進み寄つて光圀の顔を見あげる。)お手討でござりますか。

光圀。よい覺悟だ。下世話に申す主思ひの主倒しとはおのれが事だ。いらざる忠義立てをして水

戸の家風を亂さうとする奴、光圀が歸國の前に成敗するぞ。

紋太夫。はあ。お太刀を汚して恐れ入ります。

(紋太夫は形を正して、尋常に肩衣をはれ退ける。)

光圀。(小姓の太刀を取る。)討首にいたさぬは主の慈悲と思へ。

光圀。(光圀は太刀をぬいて紋太夫の肩を斬る。紋太夫は倒れる。)

光圀。(血刀を持つて立つ。)誰か居らぬか。

(下の方より彌八郎あわたとしく出づ。光圀は無言で血刀を出せば、彌八郎は懐紙にて血を拭ふ。)

彌八郎が明けたるまゝの襖のかけよりお雪がうかゞひある。
(それを横目に見て。) 紋太夫の妻も参つてゐるか。

拜見に出て居ります。

光圀。これへ呼んで死骸をみせてやれ。

彌八郎。はあ。

(彌八郎は下のかたを見かへれば、お雪は進み入りて平伏する。)

光圀。紋太夫の女房か。惜い家來ではあるが成敗した。心得ちがひの夫を持つて不便に思ふぞ。

お雪。恐れ入りましてござります。

(上のかたより銀之丞出づ。)

銀之丞。まだお出暮には相成りませぬか。

光圀。むい。面を持って。

(銀之丞は鍾馗の假面を把つて捧げる。彌八郎とお雪は平伏してゐる。能樂の囃子の音きこゆ。)

幕

權三と助十

大正十五年五月作。

大正十五年七月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——駕籠屋權三（市村羽左衛門）女房おかん（市川松蔦）
駕籠屋助十（市川左團次）助十の弟助八（市川猿之助）小間物屋彦兵衛（市川
紅若）彦兵衛伴彦三郎（市川壽美藏）家主六郎兵衛（中村吉右衛門）左官屋勘
太郎（中村鶴藏）猿まはし與助（市川左升）願人坊主雲哲（市川荒次郎）願哲
（中村吉之丞）石子伴作（市川八百藏）など。

第一幕

登場人物——駕籠かき權三。權三の女房おかん。駕籠かき助十。助十の弟助八。家主六郎兵衛。小間物屋彦兵衛。彦兵衛のせがれ彦三郎。左官屋勘太郎。猿まはし與助。願人坊主雲哲。おなじく願哲。石子伴作。ほかに長屋の男、女、娘、子供。捕方。駕籠昇など。

享保時代。大岡越前守が江戸の町奉行たりし頃。七月初旬の午後。
神田橋本町の裏長屋。壁一重を境にして、上のかたには駕籠かき權三、下の方は駕籠かき助十が住んでゐる。いづれも破れ障子のあばら屋にて、權三の家の臺所は奥にあり、助十の家の臺所は下のかたにある。權三の家の土間には一挺の辻駕籠が置いてある。二軒の下のかたに柳が一本立つてゐて、その奥に路地の入口があると知るべし。

(けふは長家の井戸がへにて、相長屋の願人坊主、雲哲、願哲の二人も手傳ひに出てゐる體にて、いづれも權三の家の縁に腰をかけて汗をふいてゐる。助十の弟助八は廿歳前後のわか者、刺青のある男にて片肌をぬぎ、鉢巻、尻からげの跣足にて盥團扇を持つて立つてゐる。權三の女房おかん、河岸の女郎あがりにて廿六七歳、これも手拭にて頭をつゝみ、襷がけにて浴衣の袴をからげ、三人に茶を出してゐる。少しく離れて、猿まはし與助は手拭を頭にまき、浴衣の上に猿を背負ひ、おなじく尻からげの跣足にてぼんやりと立つてゐる。表には角兵衛獅子の太鼓の音きこゆ。)

雲哲。 やれ、やれ、暑いことだぞ。

願哲。 まさか笠をかぶつて井戸がへにも出られず、この素頭をじり／＼と照りつけられては、眼

がくらみさうになる。

雲哲。 まつたく今日の井戸がへは焦熱地獄だ。

おかん。 お前さん達もあたしのやうに手拭でつゝんでるれば好いちやありませんか。

願哲。 かういふ時には女は格別、男は鉢巻でないと何うも威勢がよくないからな。

助八。 は、笑はせるぜ。鉢巻をしたつて、すつとこ被りをしたつて、願人坊主の相場がどう上

るものか。

おかん。 與助さん。おまへさんもお飲みでないかえ。(茶碗を出す。)

與助。 (進みよりにて丁寧に會釋する。) はい、はい。いや、これはありがたい。實はさつきから喉が渴いてひり／＼してゐました。

助八。 いくらおめえの商賣でも、長屋の井戸がへにえて公を背負つて出ることもあるめえぢやあねえか。

與助。 それがね。(猿をみかへる。) なにしる這奴がよく馴染んでゐるのでね。ちつとの間でもわたしの傍を離れないのですよ。

おかん。 畜生でも可愛いもんだねえ。

與助。 可愛いもんですよ。

助八。 ぢやあ、おれも可愛がつて遣らうか。(猿のあたまを撫でる。) やい、えて公。手前も一緒に出て來ながら、親方の背中で高見の見物をきめてゐる奴があるものか。人並はづれて長え手を持つてゐるんぢやあねえか。みんなと一緒に綱をひいて、威勢好くエンヤラサアと遣つてくれ。おい、判つたか、判つたか。(猿の耳を引張れば、猿は引つかく。) え、痛てえ、

痛てえ。こん畜生、だしぬけに引つ搔きやあがつたな。

おかん。おまへさんが悪戯をするから悪いんだよ。

與助。こいつは何うも気が暴くつていけません。八さん。まあ堪忍して遣つて下さい。

助八。痛てえ、痛てえ。(手の甲を撫でながら) 気が暴れえにも何にも、まつたく其奴は旅の山猿

だ江戸前の猿ちやあねえ。

おかん。猿に江戸前も旅もあるものかね。うなぎと間違へてゐるんだよ。(笑ふ)

雲哲。山の芋が鰻になつても、山猿がうなぎになつたと云ふ話は聞かないな。

願哲。は、こいつは大笑ひだ。

助八。おい、與助。その山猿をおれに貸してくれ。

與助。え、どうするのだね。

助八。おれ一人が引つかゝれた上に、みんなのお笑ひ草になつちやあ割に合はねえ。そいつをこゝ

こへ追つ放して、片つ端から引つ搔かして遣るのだ。

おかん。(おどろく) あれ、馬鹿なことをお云ひでないよ。呆れた人だねえ。

雲哲。悪巫山戯はいけない、いけない。(起ちあがる)

助八。(助八は猿を取らうとする。與助は遣るまいとする。この争ひのあひだに助八は又引つかゝれる) あ、こん畜生め、又遣りやあがつたな。もういよく料簡がならねえ。うぬ、生膽を取つ

た上で、兩國のもいんじい屋へ賣飛ばすからさう思へ。

與助。え、人の商賣物をどうするのだ。

(助八と與助は争つてゐるところへ、上のかたより助八の兄助十、三十歳前後、これも鉢巻、刺

青のある肌ぬぎ、尻端折りの跣足にて出づ)

助十。やい、やい。なにを騒いでゐるのだ。煙草休みも好い加減にしろ。いつまでもこんな泥仕

事をしちやあるられねえ。日の暮れねえうちに早く済して仕舞はなけりやあならねえの

だ。みんなも精出して遣つてくれ。大屋さんに叱られるぞ。

與助。大屋さんに叱られては大變だ。さあ、行きませう。

雪哲。さうだ、さうだ。

願哲。やれ、やれ、又一と汗かくかな。

(與助と雲哲、願哲は上のかたに去る)

助十。(おかんに) おい、かみさん。おめえの宿六はどうしたね。

おかん。

奥に寝てゐますよ。

助十。

冗談ぢやあねえ。一年に一度の井戸がへだから、長屋中の者がみんな商賣を休んで、かうして泥だらけになつて働いてゐるんぢやねえか。その最中に自分ひとり悠々緩々と寝そべつてゐる奴があるものか。あんまりお長屋の義理を知らねえ狸野郎の横着野郎だ。ぬす人のひる寐も好加減にしると云つて、早く引摺り起して来い。

おかん。

(むつとして)何もそんなに怒鳴り散らさなくつてもいいぢやありませんか。亭主の代りにあたしが出てゐりやお長屋の義理は濟んでゐますよ。

助十。

え、おめえのやうな曳摺り鼻がよろ／＼してゐたつて何の役に立つものか。よし原の煤掃きとは譯が違はあ。早く亭主をひき摺り出せといふのに……。

助八。

今までおれも氣が注かなかつたが、この權三はまだ出て来ねえのか。なるほど盗人のひる寐にも程があらあ。(おかんに)さあ、早く連れて来ねえよ。

おかん。

おまへさん達は人聞きが悪い。二口目にはぬす人のひる寐なんぞと、大きな聲で云つてお呉んなさるなよ。内の人は夜の商賣が主だから、晝間寐てゐるのさ。それに不思議があるものかね。

助十。

それを云へば、おれだつて同じ商賣で、片棒をかついでゐるのぢやあねえか。そのおれが斯うして働いてゐるのに、相棒の權三が寐てゐるといふ法があるものか。

おかん。

相棒と云つても、内の人は先棒だよ。ちつとは遠慮をするものさ。

助十。

先棒でも後棒でも、斯ういふときに遠慮が出来るものか。

助八。

先棒を嵩にきて、乙う大哥風を吹かすなら、おめえの亭主なんぞは頼まねえ。これからは兄貴とおれとが相棒で稼ぎに出るばかりだ。

おかん。

兄弟が相棒で御神輿でもかつぎに出るのかえ。(土間を見返りてあざ笑ふ)肝心のかつぐ物があるかよ。

助十。

(すこし詰まつて)なに、駕籠なんぞは何處からでも拾つて来る。なあ、八。

助八。

むい。大川へ行つてみる。そんな駕籠なんぞは上げ汐で幾らも流れて来らあ。

おかん。

下駄の古いのと一緒になるものかね。ばか／＼しい。詰らない無駄口をおき／＼でないよ。手前の方がよつほど無駄口を利いてゐるやあがる。河岸の切見世でべちやくちや轉つてゐた癖がぬけねえので、近所となりは大迷惑だ。おなじ年明きを引摺り込むにしても、もう少し眞人間らしいのを連れて来ればいいのに、權三の奴めも見かけによらねえ流つ垂らし野

郎だ。

(奥の障子をあけて権三、これも三十歳前後の刺青のある男、浴衣の片襦を取りながら出づ。)

権三。

やい、やい。さつきから奥で聞いてるりやあ、手前たちは兄弟揃つて、よくも口から放題の悪體もくたいを列べ立てやあがつたな。なるほど俺のか、あは吉原の河岸見世にゐた女で、飛んだ惚けをいふやうだが、おたがひに好き合つて夫婦になつたのだ。それがなんで洩つ垂らした。惚れた女とは夫婦になるなといふ奉行所のお觸れでも出たのか。ざまあ見やがれ。

おかん。

ほんたうに近所迷惑とはこつちで云ふことさ。よるも晝も兄弟喧嘩を商賣のやうにしてるて、その仲裁に行くのはいつでもあたしの役ぢやあないか。

助八。

えい、手前たちこそ毎日毎晩、犬も食はねえ夫婦喧嘩ばかりしてるやあがつて、その留男の役はいつでも誰が勤めると思つてるのだ。

助十。

まあ、まあ、だまつてるろ。こんなすべた女郎を相手にしたつて始まらねえ。やい、権三。(縁に腰をかける。)手前も海驢の生れ變りぢやああるめえ。なんで一日寐をべつてるのだ。長屋中が惣出の井戸がへを知らねえか。寐ぼけた面を早く洗つて、みんなと一緒に綱を引

権三。

きに出て来い。ふだんから相棒のよしみに、長屋の義理や附合ひといふものを教へてやるのだ。ありがたいと思つて禮をいへ。

助十。

それだからおれの名代に、噂をこの通り出してあるぢやあねえか。一軒の家から一人づつ出りやあ澤山だ。女なんぞは頭數ばかりで役にやあ立たねえ。おれの家ぢやあ斯うして大の男が兄弟揃つて出てるのだ。

権三。

そりやあ手前たちの物ずきで勝手に騒いでるのよ。だれも頼んだわけぢやあねえ。折角よく寐てるるところを、無暗にがあく怒鳴りやあがつて、たうとう起してしまやあがつた。(眼をこする。)おい、おかん。茶を一杯くれ。

おかん。

あい、あい。(おかんは茶を汲んでやれば、権三は飲む。この時、上のかたにて大勢の聲きこゆ。)

大勢。

さあ、さあ、引いた、引いた。

助八。

あにい、又始まつたぜ。早く行かう。

助十。

む。こんな奴等にかゝり合つてると、日が暮れらあ。

権三と助十

大勢。

引いた、引いた。

助十。

おうい。待つてくれ。

助八。

待つてくれ。

(助十と助八は鉢巻をしめ直して、急いで上のかたへ行く。)

おかん。

ほんたうに憎らしい奴だねえ。あたしももう行くまいかしら。

権三。

かまふものか。打つちやつて置け。(團扇を取る。)このごろは晝間でも藪つ蚊が出て来やあ

がる。

おかん。

暑い暑いと云つても、もう秋だとみえて、繭のお袴をはいた蚊がだん／＼に大きくなつて

来たねえ。

(おかんも溢團扇をとつて権三を煽いでやる。)

権三。

おや、おや、手前けふは忌に亭主孝行だな。今の話でむかしの事を思ひ出したか。

おかん。

なに、あいつ等へ面當てさ。

権三。

面當てなけりやあ大事にしてくれねえのか。心ほそいことだな。

(上のかたにて又もや大勢の聲きこゆ。)

大勢。

引いた、引いた。エンヤラサア。

(上のかたより以前の雲哲と願哲が先に立ちて井戸換の綱を引き、つゞいて長屋の男二人と子供一人、その次に助十、いづれも綱をひいて出づ。又そのあとから長屋の女房と娘、つゞいて猿まはし奥助は猿を背負ひ、その次に助八、長屋の男、子供など、同じ綱をひいて出づ。井戸端にては水をあける音。一同は又引返して上のかたに入る。)

助十。

(行きながら権三を見かへる。)やい、この野郎。早く出て来ねえか。

権三。

勝手にしやがれ。

助十。

なんだ。(寄らうとして、綱にひかれてよろ／＼となる。)えい、さう無暗に引いちやあいけね

え。やい、権三、手前はどうしても出て来ねえのか。えい、さう引いちやあいけねえと云

ふのに……。

(助十は綱に引かれて、よろけながら上のかたへ引返して入る。奥助と助八はあとに残る。)

助八。

(これも行きながら権三夫婦を見て。)やい、やい、夫婦ながら唯見てゐることがあるものか。お祭が通るのぢやあねえ。早く出て来い。こいつ等、出て来ねえと唯は置かねえぞ。

(助八は寄らうとすると、奥助の猿はその頭髪をつかんで引く。)

権三と助十

助八。え、だれだ、誰だ。悪ふざけをしちやあいけねえ。止せ、よせ。

(助八は猿に引かれながら、上のかたに入る。)

権三。(笑ふ) は、好い観せ物だぜ。

おかん。あいつはさつきも猿に引つか、れたんだよ。

権三。あんな奴等は猿を相手に、きやつくと云つてゐるのが丁度相當だ。

おかん。ほんたうに猿芝居の役者だねえ。

(夫婦は笑つてゐる。やがておかんは氣がついたやうに上のかたを見かへる。)

おかん。お長屋の人達がみんな出てゐるのに、中途から抜けてしまふのも何だから、せめてあたし

だけでも行つて来ようかねえ。

権三。なに、打つちやつて置けといふのに……。ぐづぐづ云ふのは助の兄弟ぐらゐるものだ。ほ

かにも文句をいふ奴があつたら、どいつでもおれが相手になつて遣らあ。長屋中が束にな

つて来ても、びくともするんぢやあねえ。矢でも鐵砲でも持つて来いだ。

でも、大屋さんに叱られると困るぢやあないか。

権三。む。 (少し考へる。) 去年もさんぐ膏を取られたつけな。

おかん。それ、御覽な。ほかの奴はどうでも構はないけれど、大屋さんの心持を悪くするといけな

いからねえ。

権三。だが、大屋さんは善い人だ。まさかに店立てを食はせるとも云ふめえ。

おかん。善い人だけに、こつちでも其のつもりで附合はなくつちやあ悪いよ。

権三。さうかなあ。(又かんがへる。) ぢやあ、いつそおれが行つて来ようか。(起ちかけて又かんがへ

る。) だが、これからのそく出て行くと、なんだか助の野郎におどかされたやうで、ちつ

と癪だな。おれはまあ止さう。おめえも止せよ。

おかん。止してもいゝかねえ。

権三。大屋さんに叱られたら、あやまる分のことだ。なに、むづかしいことはねえ。あやまれば

屹と堪忍してくれるよ。

おかん。あの大屋さんにあやまるのは、幾らあやまつても口惜しくはないけれど……。

権三。それだからあやまると決めて置けばいゝよ。

(上のかたより助八は猿を引つかへて出づ。あとより與助が追つて出づ。)

與助。これ、これ、わたしの猿をどこへ持つて行くのだ。

権三と助十

助八。こん畜生、二度も三度もおれにからかやあがつて……。もう生かして置かれるものか。あの井戸へ叩つ込んでしまふのだ。(上のかたへ引返して行きかゝる。)

與助。え、飛んでもないことだ。

(與助は猿を取返さうとして争ふところへ、上のかたより助十出づ。)

助十。これ、八。馬鹿なことをするなよ。

助八。なにが馬鹿だ。

助十。この最中に猿なんぞを相手にして騒いでゐる奴は馬鹿に相違ねえ。そんなものは打つちやつて置いて、早く行け、行け。

助八。いやだ、いやだ。こん畜生を井戸へ叩つ込まなけりやあ料簡出来ねえ。

助十。折角井戸がへをしたところへ、そんなものを叩つ込まれて堪るものか。馬鹿野郎、よせと云ふのに……。

助八。止さねえ、止さねえ。

助十。そんなら猿の身代りに手前をぶち込むからさう思へ。

助八。なにを云やあがる。

(兄弟はむしり合ひ、なぐり合ひの喧嘩になる。その隙をみて與助は猿を取返し、逆さまに背負ひて上のかたへ走り去る。)

權三。仕様のねえ奴等だな。(おかんに。)留めてやれ、留めてやれ。

(夫婦は縁から降りて、無理に兄弟を引き分ける。)

權三。毎日めづらしくもねえ、兄弟喧嘩はよせ、よせ。

おかん。八さんも兄さんに楯を突くのはよくないよ。

助八。べらほうめ。猿の味方をして弟をなぐるやうな奴は兄貴ぢやあねえ。

助十。手前のやうな判らずやは猿にも劣つてゐるのだ。

權三。まあ、いと云ふことよ。兄弟喧嘩ぢやあ、どつちから膏藥代を取るわけにも行かねえ。

つまり毆られ損だ。止せ、止せ。

(上のかたより家主六郎兵衛出づ。)

六郎。これ、これ、みんな何をしてゐるのだ。もう些とだから怠けてはいけない。(上のかたに向つて團扇をあげる。)

さあ、さあ、早く引いた、引いた。

(上のかたより雲哲、願哲をはじめ長屋の人々は綱を持ち出て來り、再び上のかたへ引返して)

六郎

助八。おまへはこの忙がしい最中に猿にからかつて騒いでるたさうだな。

助八

なに、こつちが猿にからかはれたので……。

六郎

まあ、なんでもいゝから早く行つて、手傳へ、手傳へ。貴様は長屋で一枚看板の馬鹿野郎だ。

助八

あい、あい。大屋さんに逢つちやあかなはねえ。

(助八は叱られて、これも早々に上のかたへゆく。)

おかん

大屋さん。今日はお暑いのに御苦勞様でございます。

権三

まあ、まあ、こゝへお掛けなせえ。

六郎

(権三を見て。)お、お前はさつきから井戸端へ些とも顔も見せなかつたやうだな。

権三

(ぎよつとして。)え。實は其、すこし用がありました……。

おかん

早くあやまつておしまひよ。(眼で知らせる。)

権三

まつたく據ない用がありました……。

六郎

よんどころない用があつた……。

権三

へえ、急病人が出来まして……。

助十

いや、こいつ呆れた奴だ。もし、大屋さん。だまされちやあいけねえ。そんなことは皆んな嘘ですよ。

(夫婦はあわて、手をふる。)

助十

(いよく怒鳴る。)え、嘘だ、嘘だ。大うその川瀬だ。奥に樂々と晝寐をしてるやあがつて、おれが幾度催促に來ても出て來なかつたちやあねえか。

権三

だから、急病人が出来たと云つてゐるのが判らねえかよ。

助十

その急病人はどこにゐる。

権三

その急病人は……。おれだ、おれだ。

助十

這奴いよく呆れた奴だ。朝つばらから酒を飲んでるやあがつた癖に、急病人もよく出來た。あんまり人を馬鹿にするな。

おかん

そのお酒に中つたんですよ。

助十

え、なにも彼も嘘だ、嘘だ。

六郎

成程これは嘘らしいぞ。これ、権三。おまへは去年のことを忘れたか。一年に唯つた一度の

権三と助十

井戸がへで、家主のおれまでが汗みづくになつて世話を焼いてゐる。そのなかで假病の晝寝なぞをしてゐて、長屋の義理が済むと思ふか。去年もあれほど吐つて置いたのに、今年も相變らず横着をきめるとは太い奴だ。又、女房も女房だ。さつきちよいと其の生つ白い顔を出したかと思ふと、もうそれぎりで隠れてしまふとは、揃ひも揃つた横着者め。さあ、さあ、早く出て働け、働け。

夫婦。はい、はい。

(上のかたにて大勢の呼ぶ聲きこゆ。)

大勢。それ、引いた。引いた。エンヤラサア。

六郎。(上のかたを見て。)それ、引いて来る。早くしろ、早くしろ。

(助十は上のかたへ駈けてゆく。権三とおかんもかけ出してゆく。やがて上のかたより以前の如く、雲哲、願哲が先に立ち、長屋の男二人と子供ひとりが綱をひいて出づ。助十と権三とおかんも綱をひいてゐる。この時、下のかたの路地口より小間物屋彦三郎、廿歳ぐらゐの若者、旅すがたにて出づ。)

助十。さあ、さあ、引け、引け。

権三。引いたり、引いたり。

一同。エンヤラサア。

(彦三郎は綱をひく人々を避けながら来るうちに、助十に突きあたる。)

助十。えい、なにをしやあがる。

(助十に突き退けられて、彦三郎はよろめきながら更に権三に突きあたる。)

権三。この野郎、邪魔な奴だ。

(権三に蹴られて、彦三郎はつまづき倒れる。水の音。一同は見返りもせず、綱をひいて上のかたへ引返して去る。)

六郎。これ、これ、手暴いことをするな。(彦三郎を介抱する。)もし、飛んだ失禮をいたしました。

彦三郎。お江戸馴れませぬ者がお取込みのなかへ出まして、わたくしこそ飛んだお邪魔をいたして

相済みません。

六郎。いや、お若いにも似合はず御丁寧の御挨拶で、重々痛み入りました。御覽の通り、けふはこの長屋の井戸換で混雑してゐるところへ、丁度におまへさんがお出でなすつたので、どうもお氣の毒なことを致しました。店子に代つて家主のわたしがお詫をしますから、ど

うぞ料簡して遣つてください。お、お、泥だらけになつた。(手拭で彦三郎の膝のあたりを拭いてやる。)

彦三郎。

いえ、おかまひ下さりませぬ。では、おまへ様がこゝのお家主様でござりますか。

六郎。

はい、はい。こゝは神田の橋本町、その長屋をあつかつてゐる家主の六郎兵衛でござりますよ。

彦三郎。

お、左様でござりましたか。

(この時、以前の長屋の女房と娘、その次に助八と長家の男三人、與助と子供ふたりが綱をひいて出づ。)

助八。

(彦三郎に。)え、なにをほんやり突つ立つてるやあがるのだ。この案山子野郎め。邪魔だ、邪魔だ。

六郎。

よそのお方に失禮をするな。おまへの方でよけて行け。馬鹿野郎め。

助八。

又叱られたか。

(水の音。人々はわやく云ひながら上の方へ引返して去る。)

六郎。

こゝらの長屋にゐる者は我殺な奴等ばかり揃つてゐるので、他國のお方にはお恥かしうござ

ざいます。して、おまへさんは誰をたづねてお出でなすつた。

彦三郎。

お家主様をおたづね申してまゐりました。

六郎。

なに、わたしを尋ねて来た……。いや、それは、それは……。では、まあこゝへおかけなさい。

(六郎兵衛は先に立ちて、権三の家の縁に腰をかける。)

六郎。

して、おまへさんはどこのお人だね。

彦三郎。

大阪からまゐりました。

六郎。

大阪からわたしを尋ねて……。では、もしや彦兵衛さんの……。

彦三郎。

はい。わたくしはこのお長屋で長年お世話様になりました小間物屋彦兵衛のせがれ彦三郎と申す者でござります。

六郎。

あ、彦兵衛さんの息子かえ。(急に顔色を曇らせる。) 遠いところをよく出て来なすつた。

彦三郎。

(これも聲を曇らせる。) もし、お家主様。父の彦兵衛はまったく牢死いたしましたのでござりますか。

六郎。

いや、どうもお氣の毒なことで、今更なんとも云ひやうがない。手紙にも書いてあけた通

り、彦兵衛さんは去年の暮にお召捕になつて、その御吟味中に病氣が出て、この三月に…。(鼻を詰まらせる。) たうとう御牢内で歿りましたよ。

彦三郎。

その節は色々御厄介になりました、お禮の申上げやうもござりません。まことに有難うござりました。(涙ながらに手をつく。) 御手紙によりますと、父は馬喰町の米屋といふ旅籠屋の隠居所へ忍び込み、六十三歳になる女隠居を殺害して、金百兩をうばひ取つたと申すこととでござりますが、それは本當でござりますか。

六郎。

(氣の毒さうに。) さあ、彦兵衛さんに限つてそんな事のあらう筈はないと思つてゐるが、御奉行所の厳しいお調べで本人はたうとう白状したと云ひますよ。

(上のかたより權三はぶらく出で來り、この體をみて少し躊躇し、やがて拔足をして家のうしろを廻り、下のかたの柳の下に立つて聽いてゐる。)

彦三郎。

それがどうしても本當とは思はれません。わたくしの父は盗みを働くやうな、まして人を殺して金をぬすむやうな、そんな不義非道の人間ではござりません。あまりに御吟味がきびしいので、身におほえのないことを申立てたのかも知れません。(だん／＼激して來る。) もし、おまへ様、いづれにしてもこれは何かの間違ひに相違ござりません。屹と何かの間

六郎。

違ひでござります。

息子のおまへさんがさう思ひつめるのも無理はないが、この一件は南の町奉行所のお係りで、お役人は名奉行ときこえてゐる大岡越前守様だ。そのお捌きで落着いたことだから、決して間違ひのあらう筈はないのだ。

彦三郎。

さきほどは御吟味中と仰しやりましたが、それではもう落着いたしたのでござりますか。

六郎。

實は本人の白狀で事件は落着、そのお仕置は獄門ときまつた時に、彦兵衛さんは牢死したのだ。もう何と云つても仕方がない。せめてその死骸を引取つてやりたいと思つて、色々お嘆き申してみたが、重罪人であるから死骸を下け渡すことは相成らぬといふので、残念ながらどうすることも出来なかつたのだ。必ず悪く思はないで下さい。情ないこととでござりますな。(泣く。)

彦三郎。

(このあひだに、上のかたよりおかん出づ。權三は眼で招けば、おかんも竊と家のうしろをまはつてゆく。權三は何かさゝやけば、おかんは首肯いて、再び下のかたより自分の家のうしろへ廻つてゆく。權三は助十の家の縁に腰をかける。)

彦三郎。

(眼をふいて。) いくら名奉行でも、大岡様でも、このお捌きは屹と間違つて居ります。わた

權三と助十

くしの父にかぎりまして、決してそんなことはない筈でござります。どう考へても、それはお奉行様のお眼違ひでござります。

六郎。

彦三郎。

(なだめるやうに。) まあ、まあ、落着いて物を云ひなさい。今更おまへが何と云つたところで、お捌きも濟み、本人も死んでしまつたものを、何うにも仕様があるまいではないか。勿論唯今となりましては、たとひ何と申したところで死んだ父が生き返るわけではござりません。それはよんどころない不運と諦めも致しませうが、せめては無實の罪といふことをお上へ申立てまして、父彦兵衛の悪名を清めたくござります。お家主様。わたくしが一生のおねがひでござりますから、どうぞお力添へをねがひます。御承知の通り、父は大阪生れ、わたくしも御當地は初めて、右を見て左を見ても、誰ひとり頼みになる人はござりません。もし、お家主様。(手をあはせる。) お願ひでござります。お願ひでござります。

六郎。

あゝ、そんなことを云つて泣かせてくれるな。(眼をふく。) 折角のおまへの頼みだ。わたしも何うかして遣りたいのは山々だが、こればかりはどうも困つたな。(かんがへてゐる。)

(このあひだに、家の奥よりおかんがそつと出で、そこにある團扇を把つて、氣のつかぬやうに六

郎兵衛と彦三郎を煽いでゐる。上のかたより助十は汗をふきながら出づ。)

助十。

あゝ、あつい、暑い。

権三。

(小聲で。) おい、おい。

助十。

なんだ。

彦三郎。

(権三は彦三郎を指さして眼で知らせれば、助十もうなづいて、竊と家のうしろを廻つてゆく。) もし、心ばかりは逸つても、わたくしは若年者、殊に御當地の勝手は知れず、なんとも致方がござりません。おまへ様によい御分別はござりますまいか。

六郎。

まあ、待つてくれ。わたしも頻りに考へてゐるのだが、これはなかく、むづかしい。

彦三郎。

むづかしいと申しても、どうしても此儘では濟まされません。大阪を立ちます時にも、お父さんに限つてそんなことのあらう筈がないから、わたしがどんな難儀をしても、屹とお父さんの無實を訴へて來ると、母や弟にも立派に約束して參つたのでござります。

六郎。

さうやかましく云はれると、氣が散つてならない。まあ靜にして考へさせてくれなければいけない。

彦三郎。

(せいて。) このまゝのめ、と戻りましては、母にも弟にも會はず顔がござりません。わた

六郎。

くしを生かすも殺すも、おまへ様のお心一つでござります。むい、判つた、判つた。よく判つてゐます。それだからわたしも色々いふくに工夫くわふを凝こしてゐるのだ。(上の方に向つて。)おい、おい。そつちの井戸いどがへも少し待まちつてくれ。さういふしいと、どうも好いい智慧ちゐが出でない。

(六郎兵衛は又かんがへてゐるを、彦三郎は待ち兼ねるやうに眺ながめてゐる。おかんは貫ももひ泣なの眼めをふいてゐる。)

権三。

(小聲こゑで。) どうだい。いつそ思おもひ切きつて云いつてみようか。

助十。

だが、あぶねえ。うっかりした事を云いつて、飛とんだ係かり合あひになると詰つまらねえぜ。

権三。

それもさうだが……。(考かんへる。) 大屋おほやさんも困こまつてゐるやうだ。第一だいいちあの若わけえのが可か哀あ。

さうぢやあねえか。

助十。

おれも可か哀あさうだとは思おもふのだが、なにしろほかの事ことと違ちがふからな。一つ間違まちがつた日にや

あ、おれ違ちががどんな目に逢あふか判わかるめえぢやあねえか。よく考かんへてみるよ。

権三。

むい。(少すこし躊躇ちゆうちよする。)

彦三郎。

もし、お家主いへぬし様。まだお考かんへは付つきませんか。

六郎。

(ため息ためいきをつく。) どうも困こまつたな。わたしも橋本町はしもとまちの六郎兵衛むつらべゑといへば、名主なぬしの玄關げんくわんでも御奉行所ごぎやうしよの腰掛こしかけでも、相當ううたうに幅はたのきく人間にんげんだが、こればかりは全く困こまつた。一旦たんお捌はきの付ついてしまつたものを、今更いまさらこつちからこぢ返かへすといふのは、つまり大岡様おほおかさまを相手取あひてつて喧嘩けんかをするやうなものだから、こいつは並大抵なみだいだいのことで行く筈はずがない。小間物屋こまものや彦兵衛ひこべゑは確たしかに無實むじつの罪つみだといふ立派りつぱな證據しやうこでもあるか、それとも罪人ざいにんはほかにあると云いふ確たしかかな證しやう人にんでもない限りかぎはなあ。(腕うでをくむ。)

(権三は何か云いはうとして起たちかゝるを、助十はあわてゝその袖そでをつかみ、まあ待まちてと制せいすれば、

権三はまた躊躇ちゆうちよする。)

彦三郎。

(堪こへかれて。) では、どうしても出来できぬことだと仰おつしやるのでござりますか。

六郎。

さあ、出来できないとも限かぎらないが、なにしろこいつは大仕事おほしごとだ。わたしもこの年としになるまで家主いへぬしを勤つとめてゐるが、こんなことに出逢でつたのは初はじめてだからな。

彦三郎。

(決心けつしんして。) では、もうお頼たのみ申まをしますまい。わたくしは自分じぶんの思おもひ通とほりにいたします。(起たちかゝる。)

六郎。

(彦三郎の袖そでを提とへる。) まあ、待まちちなさい。お前まへさんは眼めの色いろを變かへてどうする積つもりだ。

権三と助十

彦三郎。これから御奉行所へ駈込みます。

六郎。御奉行所へかけ込む……。それはいけない。駈込み訴へは御法度だ。

彦三郎。それはわたくしも存じて居りますが、もうかうなつたら致方がござりません。どんなお咎めを受けるのも覺悟の上で、駈込み訴へをいたします。どうぞ留めずに遣つて下さい。(振切つて行かうとする)

六郎。どうして無暗に遣られるものか。飛んでもないことだ。いくら年が若いと云つて急いではいけない。まあ、待ちなさい。待ちなさい。

彦三郎。いや、放して下さい、放して下さい。

六郎。いけない、いけない。

(彦三郎は無理に振切つて行かうとするを、六郎兵衛は留める。おかんはうろ／＼しながら権三を手招し、なんとかしろと云ふ。権三ももう堪らなくなつて進み出で、彦三郎の前に立塞がる。)

権三。まあ、おまへさん。待ちなせえ。

彦三郎。えい、どなたも邪魔をして下さるな。

(彦三郎は突きつけて行かうとするを、権三は抱きとめる。)

権三。邪魔をするわけぢやあねえ。おれが好い智慧を貸してやるのだ。やい、やい、助十。見てゐることはねえ。一緒に留めてくれ、留めてくれ。

おかん。(縁に出る。) 助さんも早く何とかおしなねえ。

(助十も決心して起つ。)

助十。(彦三郎に。) まあ、待ちなせえ。待ちなせえ。まったくおれ達が好い智慧を貸してやるのだ。まあ、まあ、落ちて着いて云ふことを聞くがい、ぜ。

権三。まあ、おとなしくしろ、おとなしくしろ。

(権三と助十は無理に彦三郎を元の縁さきに押戻す。)

六郎。井戸がへで汗になつたところへ、また汗をかゝされた。やれ、やれ。(汗を拭く。) そこでお前達はほんたうに好い智慧があるのか。

権三。さう改まつて聞かれると少し困るが……。おい、助十。おめえから云へ。

助十。いや、おれはいけねえ。おれは不斷から口不調法だからな。

権三。うそをつけ。人一倍大きな聲で怒鳴りやあがる癖に……。

助十。えい、手前こそ矢鱈に無駄口をきくぢやあねえか。

権三と助十

六郎。これ、これ、そんなことを云つてゐては果てしが無い。おい、権三。先づおまへから口をきけ。

権三。どうしてもわつしが口切りかえ。やれ、やれ。

六郎。何がやれくだ。おれが名指しでお前に聞くのだから、さあ、はつきりと云へ。

権三。仕様がねえな。(頭をおさへる。)ぢやあ、まあ聞いておくんなせえ。實はね、去年の十一月の末のことでござえました。(助十に。)おい、あれは幾日だつけな。

助十。さあ、おれもよくは覚えてゐるねえが、なんでも二の酉の前の晩あたりぢやなかつたかな。

権三。違えねえ、二の酉の前の晩だ。その晩の九つ過ぎでもありましたらうか、この助十とわつしとが遅い仕事から歸つて來まして、馬喰町の横町へ差しかゝると、頬かむりをした一人の野郎が天水桶で何か洗つてゐるやうでしたから、何をしてゐるのかと提灯の火で透かしてみると、そいつは着物の袖を洗つてゐるらしいのです。

六郎。むゝ。それから何うした。

権三。(助十をみかへる。)おい、おれにばかり云はせてゐるねえで、手前も些としゃべれよ。かうなりやあ何うでお互えに係り合だ。

六郎。では、助十。そのあとを早く云へ。

助十。もし、大屋さん。うっかりした事をしやべつて、若しそれが間違ひだつた時には、どういふことになりませうね。

六郎。それは事にもよるな。その事によつて重い罪にもなれば、軽い罪にもなる。

助十。人殺しなんぞは重い方でせうね。

六郎。それは勿論のことだ。

助十。いけねえ、いけねえ。それだからおれは忌だといふのだ。権三。手前は勝手に何でもしやべれ。おらあ知らねえ、知らねえ。

権三。知らねえことがあるものか。おれと相棒をかついでゐるたんぢやあねえか。

おかん。(権三に。)もし、お前さん。そんな人にかまはないで、知つてゐることがあるなら早く云つておしまひなさいよ。あたしも何だか聴きたくなつて來たからさ。

彦三郎。(すり寄る。)どうぞ早く話して下さい。

権三。たうとうおれが人身御供にあけられてしまつたか。ぢやあ、まあ話ませう。今もいふ通り、天水桶で袖を洗つてゐるだけならば、別に不思議と云ふほどのことでもねえが、そい

つが光るものを持つてゐる。

六郎。光るものを持つてゐた……。それから何うした。

(人々はすり寄つて聴く。)

権三。その光るものを水で洗つてゐたんですよ。

六郎。天水桶で袖を洗ひ、何か光るものを洗つてゐたのだな。その光る物といふのは刃物らしかつたか。

権三。どうもさうらしいやうでした。それでもその時はたゞ變な奴だと思つたばかりで通り過ぎしてしまつたのですが、明る朝になつて聞いてみると、その晩馬喰町の米屋といふ旅籠屋の隠居所で、六十幾つになる隠居婆さんが殺されて、門跡様へ納めるとかいふ百兩の金を取られたさうで、わつしもびつくりしましたよ。

六郎。むい。(かんがへる。)して、その男はどんな風體で、年頃や人相は判らなかつたか。

権三。さあ、そこだ。(助十に。)おい、い、かえ。思ひ切つて云つてしまふぜ。

助十。まあ、待つてくれ。もし、大屋さん。これから権の野郎が何を云ひ出すか知りませんが、わつしに係り合を付けねえで下さいよ。わつしはなんにも知らねえんだから……。

権三。いや、さうは行かねえ。おれと相棒でゐる以上は、どうしたつて手前もかゝり合ひだぞ。

助十。だつて、おれはなんにも云はねえ。

権三。云つても云はねえでも同じことだ。

おかん。まあ、そんなことは何うでもいゝから、肝心のところを早くお云ひなさいよ。じれつたい人だねえ。

六郎。まつたくおれも焦つたい。さあ、早く云へ、早く云へ。

彦三郎。さあ、早く聞かしてください。(詰める。)

権三。寄つて集つておればかり虐めちやあ困るな。助の野郎め、狡い奴だ。おほえてゐる。

彦三郎。もし、早く云つてください。早く……早く……。

権三。云ふよ、云ふよ。かうなつたら何でも云つて聞かせるよ。その男は……年頃は三十四五で職人のやうな風體で……。

彦三郎。職人のやうな風體でござりましたか。

助十。(権三に。)おい、おい。もうその位にして置くがいゝぜ。

六郎。やかましい、黙つてゐる。(権三に。)まだそのほかに何か目じるしは無かつたか。

権三。さあ。(躊躇する。)

六郎。(嚇すやうに。)これ、権三。なぜおれの前で隠し立てをする。正直に云はないとお前の爲に
ならないぞ。

おかん。お前さん、なぜ隠してゐるんだねえ。をかしいぢやあないか。

権三。え、もう自棄だ。みんな云つてしまへ。(少し聲をひくめて。)夜目ではあり、そいつは頬
被りをしてゐたので、確なことは云へねえが、どうもそれが近所の奴らしいので……。

六郎。む、近所の奴……。誰だ、誰だ。

権三。(思ひ切つて。)豊島町の裏にゐる左官屋の勘太郎によく似てゐたんですよ。

おかん。まあ。あの人が……。

六郎。左官屋の勘太郎……。あいつによく似てゐたのか。これ、助十。どうでお前もかゝり合
から、正直に云はなければならぬぞ。まつたく其奴は勘太郎に似てゐたのか。

助十。かうなりやあ俺ももう自棄だ。(大きな聲で。)そいつは豊島町の勘太郎、左官屋の勘太郎。
たしかにあの勘太郎に相違ねえのだ。

六郎。これ、大きな聲をするなよ。

彦三郎。あ、ありがたい、有難い。お二人さんはわたくしに取つて神様と云はうか、佛様と申さ
うか。もし、もし、この通りでござります。(手をあはせて権三と助十を拜む。)

おかん。それにしても、お前さん達の氣が知れないぢやあないか。それほど判つてゐるならば、な
ぜ早くにそのことを云ひ出して、彦兵衛さんの無實の災難を救つて上げなかつたらう
ねえ。

権三。そのときに氣がつけば格別だが、あとになつちやあ無證據だ。うっかりしたことが云はれ
るものか。どんな係り合になるかも知れねえ。

六郎。それで二人ともに黙つてゐたのか。横着者にも似合はない、氣の小さい奴等だな。
彦兵衛さんに疑ひのかゝつたのは、どういふわけだかよくは知らないけれど、不斷から正

直者のあの人がお繩にかゝつて連れて行かれるのを、一つ長屋内で見えてゐながら、今まで
黙つてゐるといふことがあるものかね。お前さん達は随分不人情だよ。

六郎。まつたく女房のいふ通りだ。せめておれだけでも内々で話して置いてくれれば、なんとか
仕様のあつたものを……。 (叱るやうに。)それほど、その事を知つてゐながら、今まで口をふい
て黙つてゐるとは何のことだ。つまり貴様達が彦兵衛さんを見殺しにしたやうなものだ。

これ、彦三郎さん。お前さんのお父さんのかたきはこの権三と助十だ。なんの、禮をいふことがあるものか。わたしが證人になつてやるから、こゝで立派にかたき討をしなさい。

(権三と助十はびつくりする。)

権三。と、とんでもねえ。なんでおれ達が仇なものか。

助十。かたきと云ふのは勘太郎だ。

権三。あの勘太郎だ。

(云ひながら二人は逃げかゝる。)

六郎。待て、待て。貴様たちが逃げたからと云つて済むわけのものではない。かたき討は免して

やる代りに、その罪ほろほしに彦三郎さんの味方をするか。

権三。(助十と顔を見あはせる。)あい、あい。屹と味方を致します。

六郎。よし、よし。それならば仕様がある。(上のかたに向ひく。)おい、おい。誰か来てくれ。早く来てくれ。

(上のかたより助八を先に、雲哲と願哲出づ。)

六郎。お、助八。おまへの家に麻繩のやうなものは三本ほどないか。

助八。さあ、三本はどうだかな。

おかん。内にも一本ぐらゐはありましたよ。

助八。なにしろ探して来ませう。

(助八は我家に入る。おかんも奥に入る。)

雲哲。用はもうそれだけかね。

六郎。いや、おまへ達もそこにてくれ。まだ外にも用があるのだ。

(おかんは奥より麻繩一本を持ち出て出づ。)

おかん。これで間に合ひますかえ。

六郎。よし、よし。(繩をうけ取る。)

(助八も奥より麻繩二本を持ち出て出づ。)

助八。大屋さん。これでいゝかね。

六郎。む、これで丁度三本揃つた。

助八。そこで、これをどうしなさるのだ。

六郎。人間三人を縛るのだ。

権三と助十

一同。え。

権三。三人といふのは、誰と誰とを縛るんですね。

六郎。先づ貴様を縛る。

権三。え。

六郎。それから助十を縛る。

助十。え。

六郎。それから彦三郎さんを縛る。

彦三郎。わたくしもお繩にかゝるのでござりますか。

六郎。この三人を珠数つなぎにして、南の御奉行所へ牽いて行くのだ。

助八。いけねえ、いけねえ。あとの二人はどんな悪いことをしたか知らねえが、おれの兄貴に限

つちやあ繩をかけられるやうな覚えはねえ筈だ。ふだんから兄弟喧嘩こそしてゐるが、お

れに取つちやあ唯つた一人の兄貴だ。いはれも無しに繩附きにされて堪るものか。なんで

おれの兄貴を縛るのだ。その譯をいへ。譯をいへ。

六郎。さうむきになつて怒るなよ。これには譯のあることだ。こゝにゐる若い人は小間物屋の彦

兵衛さんの息子で、これからおまへの兄貴と権三を證人にして、お父さんの無實の罪を訴へて出ようといふのだ。

助八。證人ならば家主が附添ひで、おとなしく連れて行くがい、ちやあねえか。なんで繩をかけるのだ。

六郎。そのわけは今云つて聞かせる。みんなもよく聞け。今度の一件は並一通りのことではいけない。本来ならばこの彦三郎さんがどこに宿を取つて、その町名主の手から御奉行所へ訴へて出るのが順當だが、そんなことでは容易に埒が明かないばかりか、一旦落着いたお捌きの再吟味を願ふなどと云つては、御奉行様のお手許まで達かないうちに、下役人の手で握り潰されてしまふのは知れてゐる。そこでおれが考へたには、この三人に繩をかけて御奉行所へ牽いて行つて、小間物屋彦兵衛のせがれ彦三郎と申す者がわたくし方へ押掛けてまゐり、父彦兵衛は決して盗みなど致すものでない。それを罪人と定められたは恐れながらお上のお眼がね違ひ、二つには家主の不穿索と、さんぐの悪口を云ひ募るのみか、長屋の駕籠かき権三助十の兩人もその腰押しをいたして、理不盡の亂暴狼藉をはたらき……。

権三。

(おどろいて。)嘘だよ、うそだよ。おれ達が何をするものか。

助十。

御奉行所へ行つて、そんな出鱈目を云はれちやあ大變だ。

六郎。

まあ、騒ぐなよ。そのくらゐに云はなければ中々お取上げにはならないのだ。そこで、よんどころなく長屋中の者うち寄つて右三人を取押へ、かやうに引立て、まゐりましたれば、何とぞ上の御威光を以て彼等に理解を加へ、穩便に引取りまするやうに御取計らひを願ひ上げますると、おれの口から斯う訴へ出るのだ。どうだ、判つたか。かうすれば屹とお取上げになるに違ひない。

助八。

なるほどさうかも知れねえな。こいつは巧めえことを考へ出したね。

おかん。

大屋さんは正直な人だと思つてるたら、うそをつくのは中々上手だわねえ。

助八。

まつたく隅へは置かれねえや。

六郎。

つまらないことを褒めるな。こつちは一生懸命だ。そこで、お白洲へ呼び込まれたら、それからはめいゝの腕次第で、彦三郎さんは自分の思ふことを存分に云ふが好し、権三と助十は自分の見た通りを逐一申立て、馬喰町の隠居殺しはどうしても勘太郎の仕業であらうと存じますと、はつきり云ふのだ。(考へて。)彦三郎さんは大丈夫だらうが、おまへ達

権三。

にそれが出来るか。

出来ても出来ねえでも仕様がねえ。今も鼻に云はれた通り、一つ長屋の彦兵衛さんが繩附きになつて出て行くのを知つてるながら、今まで黙つてゐたのはどうも良くねえ。實はわつしも内々は氣が咎めて、なんだか寐ざめが好くなかつたのだから、その罪ほろほしに出来るだけ遣つてみませうよ。

彦三郎。

なにぶんお願い申します。(助十に。)おまへさんにも宜しくお頼み申します。

助十。

まあ、心配しなさんな。かう見えても江戸つ子の神田つ子だ。自棄のやん八で度胸を据ゑた日にやあ、相手が大岡様でもなんでも構はねえ、云ふだけのことは皆んなべらく云つて遣らあ。細工は流々、仕上げを御覽じろだ。

権三。

おや、おや、手前は急に強くなつたぜ。變な野郎だな。

六郎。

だが、まあ、強くなつた方は結構だ。その勢ひで皆んな縛られてくれ。

おかん。

(かんがへる。)縛られて行つて、すぐに歸して下さるでせうかねえ。

六郎。

それは受合へない。町内あづけとでも來れば占めたものだが、吟味中は一先づ入牢といふことになるかも知れないな。

おかん。あら、牢に入れられるの……。泣き出す。お家主さん。それぢやあゝんまりぢやあゝりませんか。罪もない内の人を牢へ入れて……。若しいつまでも歸されなかつたら、お前さんどうしてくれるんですよ。

助八。吟味中は入牢なんていふことになる、兄貴もちつと可哀さうだな。もし、大屋さん。兄貴の身代りにわつしを縛つて行つてくれませんか。どうせ拵へ事なら兄貴でも弟でも構ふめえ。わつしの亂暴は世間でも皆んな知つてゐるんだから、わつしが暴れたといふ方が却つて本當らしいかも知れませんぜ。

六郎。だが、その晩のことを詳しくお調べになつたときに、本人でないと申口が曖昧になつていけない。やつぱり兄貴を縛るより外はないな。

助八。(助十の顔をのぞく。)兄い、おめも好いかえ。

助十。いゝよ、いゝよ。大丈夫だ。

助八。だが、どうもおれを遣つた方がよさうだな。大屋さん、どうしてもいけませんかえ。

六郎。まあ、まあ、さう案じることはない。(おかんに。)おまへも泣くなよ。自慢ぢやあないが、大岡様とこの家主が附いてゐるのだ。決して悪いやうにはならないよ。

おかん。(不安らしく。)それもやつぱり大屋さんの嘘ぢやあゝりませんかえ。

六郎。おれだつて無暗に嘘をつくものか。安心しろよ。

おかん。若しもこれぎり以内の人が歸つて來なかつたら、屹とおまへさんを恨むからさう思つておいでなさいよ。(泣く。)

彦三郎。(氣の毒さうに。)どうも皆さんに御迷惑をかけまして、なんとも申譯もないことをごさります。(六郎兵衛に。)では、お繩をおかけ下さりませ。(兩手をうしろへ廻す。)

六郎。おまへさんはわたしが縛る。(雲哲等に。)おまへ達は權三と助十を縛つてやれ。

雲哲。あい、あい。長屋中の持て餘し者がどつちもたうとう繩付きか。

願哲。これだから悪いことは出來ないな。

權三。なにを云やあがる。手前たちの知つたことぢやあねえ。

助十。あとでびつくりしやあがるな。さあ、どうとも勝手にしやあがれ。

(權三も助十も覺悟して縛られようとする。)

六郎。これ、ちつとぐらゐ痛くつても構はない、遠慮なしにぐるぐる巻きにふん縛れよ。

雲哲。大屋さんからお許しが出たのだ。せいゝ嚴重に縛つてやれ。

願哲。は、面白い、面白い。

おかん。なにが面白いものか。ほんたうに好い面の皮だ。

助八。こいつ等、面白半分に騒ぎ立てやあがると、おれが料簡しねえぞ。

六郎。はて、喧嘩をしてはならない。静にしろ、静にしろ。

(雲哲と願哲は笑ひながら二人を縛りあげる。六郎兵衛も彦三郎を縛る。)

六郎。ところで、そつちの二人は兎も角も、この人を數寄屋橋内まで引摺つて行くのは可哀さう

だ。(土間をみかへる。)お、丁度そこに駕籠がある。と云つて、權三と助十は繩附きで擔

がせるわけにも行かず、これ、助八。だれか相棒をさがして擔いで行け。

助八。え、おれにかつがせるのかえ。

六郎。あたりまへよ。貴様の商賣ではないか。

助八。商賣は商賣だが、こいつは氣のねえ仕事だな。どうで酒手は出やあしめえ、

六郎。ぐづく云はずに、早く相棒を見つけて來いよ。お、誰彼といふよりも、雲哲、おまへ

が片棒かついでやれ。

雲哲。大屋さんのお指圖だが、これは難儀だ。おれも弔ひの差荷ひはかついだが、生きた人間を

助八。乗せたのはまだ一度も擔いだことがないので……。まあ、仕方がねえ、おれが先棒になつて遣るから、あとからそろく附いて來い。さあ、

手をかせ。

雲哲。やれ、やれ。兎かく長屋に事なけれど。

(助八と雲哲は土間から駕籠を持ち出してくる。)

彦三郎。いえ、それではあんまり恐れ入ります。

六郎。なに、遠慮はないから乗つておいでなさい。

(六郎兵衛は彦三郎の手を取りて駕籠にのせる。助八と雲哲は身支度をする。おんは奥に入る。)

上のかたより猿まはし與助がうるく出づ。)

大屋さん。井戸がへは何うしますね。

與助。急に大事の用が出来て、おれは御番所へ出なければならぬから、井戸がへの方はまあ宜

しく遣つてくれ。お、さうだ。おまにも用がある。願哲は權三の繩取りをして、おま

へは助十の繩を取つて行け。

(おどろいて。)え、どこへまゐります。

與助。

權三と助十

六郎。南の御奉行所へ行くのだ。

與助。え。(ふるへる。)

六郎。なにも怖がることはない。おれと一緒に附いて行くのだから安心しろ。

與助。はい、はい。

六郎。併し猿を背負つてゐては少し困るな。だれかに預けて行け。

與助。いえ、この猿めは迎もわたくしの傍を離れませんか、一緒に連れて行かして下さい。

六郎。では、まあ勝手にするがいゝや。(一同に。さあ、めいゝの役割がきまつたら、日の暮れないうちに出かけようぜ。)

(願哲は権三の繩を取り、與助は助十の繩を取りて引立てる。助八と雲哲は駕籠を昇き上げようと
して、雲哲はよろける。)

助八。おい、おい、しつかりしろよ。

雲哲。おれは素人だ。仕方がない。

(奥よりおかんは新しい手拭と半紙を持ちて出づ。)

おかん。まあ、待つて下さい。(権三のふところに手拭と紙を入れる。) おまへさん、達者で歸つて來

て下さいよ。

権三。え、縁喜でもねえ。泣くな、泣くな。すぐに歸つて來るよ。

助八。(それを見て。) あ、おれも忘れた。待つてくれ、待つてくれ。(わが家の奥へかけ込む。)

六郎。(氣がついて。) あ、おれも忘れた。これ、雲哲。このまゝで御番所へは出られない。家へ行つておれの羽織を取つて來てくれ。

雲哲。大屋さんは相變らず人使ひが暴いな。

六郎。生意氣なことをいふな。この願人坊主め。早く行つて來い。

雲哲。あい、あい。(上のかたに去る。)

おかん。(権三に。) おまへさんも着物を着かへて行つちやあどうだえ。

権三。繩をほどいて又縛られるのは面倒だ。これでいゝ、これでいゝ。どうでお花見に行くんぢやねえ。

(家の奥より助八は緋の錢を持ちて出づ。)

助八。地獄の沙汰も金次第といふが、身上ふるつても二百の錢しかねえ。これでも何かの役に立つかも知れねえから、持つて行くがいゝぜ。(助十のふところに押込む。)

助十。 唯つた二百ばかりがどうなるものか。見つともねえから止せ、止せ。第一それをおれに呉れてしまふと、あしたの米を買ふ錢があるめえ。

助八。 なに、おれは一日ぐらゐる食はずと生きてゐられらあ。まあ、まあ、持つて行く方がいゝよ。ほんたうに心細くつてならないねえ。(権三に)おまへさんにも幾らか持たして上げたいんだけれど……。ちよいとお待ちよ。表の質屋へ行つて来るからさ。

権三。 そんなことをしてゐると遅くなる。すぐに歸つて来るんだから、錢なんぞは要らねえ、要らねえ。

(上のかたより雲哲は夏羽織を持ちて出づ。)

六郎。 御苦勞、御苦勞。(羽織をきる。)さつきも云ふ通り、おれもこの年になるが、かういふ事は初めてだ。當年六十歳の初陣で、なんだか武者震ひがして來たやうだ。

権三。 大將の大屋さんが顫へ出しちやあ困るぜ。 どうぞしつかりお頼み申しますよ。

助十。 なに、大丈夫。さあ、威勢よく出陣だ。

彦三郎。 皆さん、おねがひ申します。

権三。 さあ、繰出せ。

助十。 くり出せ。

(六郎兵衛は先に立ち、助八と雲哲は彦三郎をのせたる駕籠をかきあげると、雲哲は又よろける。

助八も一緒によろける。権三と助十は願哲と與助に繩を取られてゆく。おかんは不安らしく見送る。石町の夕七つの鐘きこゆ。)

幕

第二幕

前まへの場ばとおなじ道具どうぐ。権三ごんざと助十すけの家いへ。第一幕だいいより一月ひとつきほど後の朝あさ。

(権三ごんざの家いへでは、権三ごんざとおかんが酒さけの膳ぜんを前まへにして、夫婦ふうふ喧嘩けんかをしてゐる。)

権三。 (片肌かたはだぬいで。) やい、やい、この阿魔あま、叩たたつ殺ころすからさう思おもへ。

おかん。 さあ、殺ころせるなら殺ころして御覽ごらん。いくら自分じぶんの女房にようばうでも、横町よこちょうの黒くろや斑まだらを殺ころしたのは譯わけが

権三と助十

違ふからね。おまへさんも勘太郎の二代目になりたいのかえ。

権三。

なに、勘太郎の二代目だ。おれがいつ人殺しをした。

おかん。

現在あたしをぶち殺さうとしてゐるぢやあないか。勘太郎は赤の他人を殺したんだが、お

権三。

まへは自分の連れ添ふ女房を殺さうといふのだから、なほく罪が深いよ。

おかん。

べらほうめ。手前なんぞは横町の黒や斑と大した違えがあるものか。黒や斑はおれの顔を

おかん。

みると、尻尾をふつて来るだけでも可愛らしいや。

尻尾をふつて来るどころか、あたしなんぞはこんな家へ来て、女房の役からお鬘どんの役まで勤めてゐるんぢやあないか。それでも可愛くないのかよ。一體おまへだの、隣の助十だのといふ奴を唯置くといふ法があるものか。このあひだの時に牢屋へでも投げ込んでしまへばいゝものを、町内預けにして無事に歸してよこしたお奉行様の氣が知れないねえ。

権三。

あのとくに手前は一粒十六文といひさうな涙をこぼして、おいしく泣きやあがつたのを忘れたか。おれが町内あづけになつて、無事に歸つて来た顔を見ると、手前は又むやみに喜んで、子供のやうに手放して泣きやあがつた。さうして、大岡様はありがたいと手をあは

せて拜んだぢやあねえか。今になつてお奉行様の氣が知れねえもねえものだ。手前勝手も好加減にしろ。

おかん。

そのときは其時さ。けふのやうに亭主風を吹かせて勝手氣儘のことを云はれぢやあ、あたしだつて蟲が承知しないだらうぢやないか。

権三。

亭主が酒を買つて来いといふのが、なんで勝手氣儘だ。どんな裏店でも一軒のあるじが、酒ぐらゐる飲むのは當りめえだぞ。

おかん。

一軒のあるじなら主人らしく、酒を買ふ錢を五十でも百でも、耳を揃へてならべてお見せよ。

権三。

その錢がねえから手前に頼むのぢやあねえか。判らねえ外道だな。

おかん。

外道でも般若でも、質草はもう何にもないよ。

おかん。

それだから大屋さんへ行つて頼めといふのだ。

権三。

家賃を小半年も溜めてゐる上に、そんな蟲のいゝことが云つて行かれるものかね。まして此の矢先ぢやあないか。

権三。

この矢先だから頼みに行けといふのだ。ふだんの時とは譯が違はあ。

おかん。そんならお前が自分で行つておいでな。

権三。おれが行かれねえから、手前に頼むのだ。さういふことは女の役だ。

おかん。金を借りに行くのは女の役だ……。 (あざ笑ふ) 権現様がそんなことをお決めなすつたのかえ。

権三。あ、云へば斯ういふと、手前のやうに亭主を見くびつてゐる女も世界に少ねえものだ。

おかん。おまへのやうに女房をいぢめる亭主も世界にたんとあるまいよ。

権三。うぬ、もうどうしても助けちやあ置かねえぞ。念佛でも題目でも勝手に唱へてゐる。

(権三は土間に飛び降りて、駕籠の息杖を持ち来れば、おかんは掻いくぐりて駕籠のかけに隠れるを、権三は杖をふりあげて追ひまはす。上のかたより猿まはし與助は商賣に出る姿にて、猿を背負ひて出て、この體をみて割つて入る。)

與助。又いつもの夫婦喧嘩か。まあ、まあ、静に하십시오。

権三。こん畜生があんまり不貞腐るから、ぶち殺してしまはうと思ふのさ。

おかん。まあ、聽いて下さいよ。毎日商賣にも出られないで、米櫃がた付いてゐる最中に、朝から酒を買への何のと勝手な熱ばかり吹くから、あたしが少し口答へをすると、すぐに生か

すの殺すのといふ騒ぎさ。愛想が盡きるぢやありませんか。

與助。どつちの最良をするでもないが、どうもそれは御亭主の方がよくないやうだな。

権三。なぜ悪いんだよ。

與助。なぜと云つて、おまへは町内あづけの身の上ではないか。それが朝から酒を飲んで、女房を生かすの殺すのと騒ぎ立て、そんなことがお上の耳に這入つたらどうするのだ。今度の一件の落着するまでは、せいゝ謹慎してゐなければならぬまいではないか。

おかん。それをあたしが云つて聞かせても、馬の耳に念佛なんですよ。

権三。うるせえ。引込んでゐる。(すこし眞面目になつて) なるほど、おめえの云ふ通り、こんなことが聞いたら好くねえだらうね。

與助。それはよくないに決まつてゐる。それだから、まあおとなしくしてゐなさいと云ふのだ。

権三。むい。(いよく消けて) どうも話らねえことになつてしまつたな。

(この時、隣の助十の家でも怒鳴る聲がきこえる。)

助十。この野郎、どうしても唯は置かねえぞ。

助八。喧嘩なら廣いところへ出て来い。

(臺所の破れ障子を蹴放して、助八は播粉木を持ちて跳り出づ。つゞいて助十は出刃庖丁を持ちて出づ。)

おかん。 　あら、隣でも大變だよ。

與助。 　あつちは刃物を持つてゐる。これはあぶない。

(與助は猿を縁におろして、怖々ながら留めようとしてゐると、上のかたより願人坊主の雲哲と願哲は商賣に出る姿にて、住吉踊の傘をかつぎて出で、これを見て騒ぐ。)

雲哲。 　やあ、やあ、又はじめたのか。

願哲。 　刃物をふりまはしては劍難だ。

(助十と助八は捨臺詞にて闘つてゐる。雲哲と願哲は思案して、權三の家の土間から駕籠を持ち出し、與助も手傳ひて、よき隙を見て助十と助八のあひだに突き出し、その駕籠を枷にして二人を隔てる。)

助十。 　え、邪魔なものを持出しやあがるな。

助八。 　早く退ける。退けてくれ。

雲哲。 　まあ、待つた、待つた。

願哲。 　あぶない、あぶない。

與助。 　兄弟喧嘩もいゝ加減にしなさい。

權三。 　さういふ奴等だな。(縁先に出る。)おい、助十。もう止せよ。おれたちは町内あづけの

身の上だから、むやみに騒ぎ立てるとお咎めを受けるの知らねえか。

助十。 　そりやあおれも知つてゐるが、あの野郎があんまり癪に障るからよ。

おかん。 　(表に出る。)朝つばらから喧嘩なんぞをして見つともないぢやないか。一體どうしたの。

助十。 　町内あづけの身の上で、うっかりと出あるくわけにも行かず、よんどころなしに小さくな

つてゐると、あの野郎め、その思ひやりも無しに毎晩遊び歩いてゐるやあがつて、ゆうべもたうとう歸らねえ。仕方がねえから、今朝もおれが水を汲む、飯を炊くといふ始末だ。そこへほんやり歸つて來やあがつて、碌に挨拶もしねえでおれの炊いた飯を平氣で搔つ食つてゐるやあがる。あんまり人を馬鹿にしてゐるやあがるから、おれが一番きめ付けてやると、逆ねぢに食つてかゝつて來やあがる。野郎め、ゆうべは何處かで振られて來やあがつて、その八つ中りを兄貴に持つて來るなんて、途方も途徹もねえ奴だ。おれが腹を立つのも無理はあるめえ。

助八。一年に一度や二度ぐらゐる兄貴に飯を炊かせたつて罰のあたるほどのこともあるめ、第一その米はだれが買ったんだよ。

助十。おれはお預けの身の上だ。

助八。おあつけを好い幸ひにして、弟にばかり働かせることがあるものか。せめて小遣ひ取りに草鞋でも絢へといふのに、それもしねえで毎日毎晩ごろ／＼してゐやあがる。一體、家の兄貴だの、隣の權三だのといふ野郎どもを、無事に歸してよこすといふ、お奉行様の氣が知れねえ。このあひだから牢屋へぶち込んで置けばいいのだ。

權三。こいつも鼻と同じやうなことを云やあがる。手前の兄貴はどうだか知らねえが、この權三は牢に入られるやうな悪いことはしねえのだ。うそだと思ふなら、大岡様のところへ行って聽いてみる。

助八。え、わざ／＼聽きに行くまでもねえ、どうで所拂ひか追放にでもなる奴等だから、お慈悲で當分歸してくれたのだ。手前達は知らねえのか、左官屋の勘太郎はきのふの夕方、無事に歸されて來たぞ。

助十。(おどろく。)え、ほんたうか。

(權三もびつくりして出て來る。)

權三。おい、おい。ほんたうか、本當か。

おかん。本當に勘太郎は歸されたのかえ。

助十。そりやあ些とも知らなかつた。(又かんがへて。)やい、手前。おれ達をかつぐのぢやあねえか。

助八。(すました顔で。)まあ、かれこれ云ふことはねえ。論より證據だ。豊島町へ行つて勘太郎の家を覗いてみる。今ごろは鼻唄で祝ひ酒でも飲んでゐらあ。

權三。こりやあ驚いたな。どうしたのだらう。

おかん。やつぱり人違ひだつたのかねえ。

雲哲。なるほどさう云へば、お奉行所からの差紙で、大屋さんと彦三郎さんは今朝早くから數寄屋橋へ出て行つたさうだ。

助十。ふむう。(權三と顔をみあはせる。)

與助。大屋さんの話では、左官の勘太郎といふ奴は不斷から身持のよくない男で、本職の饅よりも賽ころを持つ方を商賣にしてゐる。さうして、丁度去年の暮頃から博奕に勝つたと云つ

て、急に身なりを拵へたり、酒を飲んだり、女を買つたりして遊びあるいてゐる。いや、まだそればかりでなく、馬喰町の女隠居の殺された晩にも、あいつは夜が更けてから歸つて来て、木戸を叩いて竊つと入れて貰つたといふことだ。

おかん。そのほかにも色々怪しいことがあるから、どうしても勘太郎の仕業に相違ない。今度の一件も十に九つはこつちの物だと、大屋さんも大變よろこんでゐるなすつたのだが、どういふわけでそれが急に引つくり返つてしまつたのかねえ。

願哲。流石の大屋さんも今朝はよつほど苦勞ありさうな顔をして出て行つたといふから、どうもむづかしいのかも知れないな。

與助。八さんのいふ通り、勘太郎がゆうべ歸されて來たのが論より證據だ。

おかん。困つたことになつたねえ。(權三に)おまへさん、どうするえ。

權三。どうすると云つて……。おれも面喰つてしまつた。おい、助十。どうも困つたな。

助十。まつたく困つたな。だからおれが止せといふのに、手前がつまりねえ娑婆ッ氣を出して、云はずとも好いことをべら／＼しやべつたもんだから、到頭こんなことになつてしまつたのだ。

權三。それだからおれも唯、勘太郎らしいと曖昧に云つて置かうと思つたのを、大屋さんが何でも勘太郎に相違ございませんと、はつきり云つてしまへと指圖するもんだから、おれもつ

い其氣になつたのだ。手前だつて御白洲で、確に左様でございませんと云つたぢやあねえか。

助十。そりやあお奉行様が確に左様かと念を押すから、おれの方でもついつかりと、ハイ左様でございませんと云つてしまつたのよ。おれが好んで云つたわけぢやあねえ。

權三。好んで云つても云はねえでも、御白洲で一旦云つてしまつた以上は、もう取返しは付かねえ。どうしたら好からうな。

助十。さあ、どうしたらよからう。おい、八。なんとか工夫はあるめえかな。

助八。それ見ねえ。めい／＼のからだに火が付いてゐるのだ。兄弟喧嘩なんぞしてゐるやうな場合ぢやねえぢやあねえか。

おかん。ほんたうに夫婦喧嘩どころの騒ぎぢやあないよ。

權三。所拂ひぐらゐで濟むだらうか。(おかんがへる)もしお呼び出しになつて、今度こそは入牢申付くるなぞと來た日にやあ助からねえぜ。

與 助。あの彦三郎といふ人は年も若し、親孝行の一心から出たことだから、上のお慈悲もあるだらうが、おまへ達はどうかかなあ。

助 十。このあひだは牢へぶち込まれようが何うしようが構はねえといふ料簡だつたが、さて斯うなつてみると、どうも牢なんぞへは行きたくねえ。やつぱりあの時に止せばよかつたのだ。やい、権三。おれは一生手前を恨むぞ。

権 三。そんなことを云つてくれるなよ。かうなりやあお互えに一蓮托生ぢやあねえか。なにしろ何うも弱つたな。

おかん。(権三の袖をひく。)おまへさん。いつそ今のうちに姿を隠しちやあどうだえ。

権 三。おれが逃げたら、あとの者に難儀がかゝるだらう。今度はおめえが町内預けにでもなるかも知れねえぜ。

おかん。(涙ぐむ。)そりやあ亭主の爲だもの、仕方がないやね。

助 八。ぢやあ、兄い。おめえも逃けることにするか。逃けるなら、大屋さん達の歸らねえうちの方がいゝぜ。

雲 哲。だが、二人を逃がしてしまつたら、家の者ばかりでなく、大屋さんや月番の行事は勿論、

願 哲。まかり間違へば相長屋一同が迷惑することになるだらう。

さうだ、さうだ。皆ながどんな迷惑を被ることになるかも知れないから、駈落なんぞは止して貰ひたいな。

與 助。それもうまく逃げ負せればいゝが、途中で捉まつたが最後、罪はいよく重くなるばかりだ。

助 十。それもさうだな。ぢやあ、まあ、大屋さんの歸るまで、おとなしく待つとしようか。

助 八。大屋さんが歸つて來たら、もう間にあふめえぜ。

與 助。いや、駈落はよくないよ。

おかん。それぢやあ何うすればいゝのさ。

與 助。それはわたしにも判らないが、なにしろ困つた事が出來たものだ。

助 十。おれたちはあの彦三郎の尻押しをして、大屋の家へあばれ込んだと云ふことになつてゐるんだからな。

権 三。おまけにその勘太郎が人違ひと來た日にやあ、どう考へても無事ぢやあ濟むめえ。

助 十。こりやあやつぱり駈落だ。

與助。いけない、いけない。

(與助と雲哲、願哲は助十を支へてゐる。下のかたの路地口より左官屋勘太郎、三十二歳、身綺麗にいでたち、角樽と鯛をさげて出づ。)

雲哲。あ、勘太郎が来た。

與助。なに、勘太郎が来た。

願哲。ほんたうに来た、来た。

(人々は顔を見あはせ、権三と助十は思はずあとへ退る。勘太郎は何気なく一同に挨拶する。)

勘太郎。みなさん、急にお涼しくなりました。

與助。(なんだか氣の毒さうに。) 朝晩はめつきりと涼風が立つて来ました。

勘太郎。御近所に居りながら、つい御無沙汰ばかり致して居ります。

與助。はい、はい。おたがひで様で……。

(人々は勘太郎のこゝろを測りかれて、不安らしく眺めてゐる。)

勘太郎。駕籠屋の権三さんと助十さんの家はこゝでございますね。

おかん。(もぢ／＼しながら。) はい、はい。

助八。

勘太郎。

(度胸を据ゑて進み出づ。) そつちが権三、こつちが助十の家ですが、なんぞ御用ですかえ。とき／＼錢湯でお目にかゝつてゐながら、ついお見それ申しました。お前さんは助さんの弟さんでしたね。わたしは豊島町の勘太郎ですよ。(云ひながら権三と助十に眼をつける。)

お、権さんも助さんもそこにあるのか。

勘太郎。

(権三と助十はだまつて俯向いてゐる。)

早速ですが、わたしも飛んだ災難で、小一月も傳馬町の暗いところへ送られてゐましたが、流石は大岡越前守様のお捌きで、白い黒いはすぐに判りまして、きのふの夕方、無事に下けられて来ました。

おかん。

勘太郎。

(やはりもぢ／＼しながら) それはまあお目出たうございました。今度のことには、権さんと助さんには色々御心配をかけたやうに聞いて居りますので、これはほんのお禮のおしるし、甚だ失禮ではございますが、どうぞお納めをねがひます。

おかん。(とは云ひながら手を出しかれてゐる。)

勘太郎。(助八に) では、八さん。どうぞこれを……。

権三と助十

助 八。

(同じく變な顔をして。)え、どうしてこんな物を呉んなさるのだね。

勘太郎。

今も申す通り、わたしも明るい體になつて世間へ出て來ましたから、近所隣へも心ばかりの配り物をいたしました。そのついでと申しては何ですが、これを權さんと助さんへもお禮心に差上げたいと存じまして……。

助 八。

ひどく切口上で、をかしいぢやあねえか。なんで禮をくれるのだ。(勘太郎の顔をながめてある。)

與 助。

お、角樽に鯛……。いや、なか／＼行き届いたものだな。

與 助。

(與助は猿を背負ひ、近寄つて覗く時、その背中にゐる猿は不意に手をのばして鯛を引つたくる。)

與 助。

(おどろいて。)え、飛んでもないことをするな。(鯛を取返して、猿のあたまを打つ。)さあ、さあ、お詫をしろ。お詫をしろ。

(與助は背中より猿をおろし、その頭をおさへてお辭儀をさせようとすれば、猿はその手を拂ひ退け、齒をむき出して勘太郎に飛びかゝる。不意におどろきたる勘太郎はたちまち殘忍の相をあらはし、兩手に猿の喉を強くおさへて絞め殺し、その死骸を投げ出す。人々は呆氣に取られたやうに眺めてゐると、與助は猿の死骸をかへて泣き出す。)

與 助。

お、猿めが死んだ、死んだ。

雲 哲。

死んだ、死んだ。

おかん。

まあ、可哀さうだねえ。

勘太郎。

いや、これはわたしが悪かつた。猿は死にましたか。

與 助。

(泣く。)死にました、死にました。

勘太郎。

(勘太郎は紙入から金三枚を取出し、紙にのせて出す。)

なにしろ猿めが無暗に飛びついて來るので、わたしも夢中になつて飛んだことをしてしまいました。お前さんの商賣道具をなくなした償ひと、云つては少いかも知れないが、これでまあ堪忍してください。

(與助はだまつて泣いてゐる。)

雲 哲。

(與助のそばに寄る。)商賣道具の猿を殺されては、おまへも定めて困るだらうが、三兩といふ金があれば又どうにかなる。

願 哲。

これも災難とあきらめて、我慢なさい。我慢なさい。

與 助。

幾年も馴染んだ此の猿を金にかへられるものか。(又泣く。)

雲 哲。 さう云つても今更仕様がな。 (勘太郎の手より金を受取る。) さあ、これで代りの猿を買へばいいのだ。

(雲哲と願哲は與助に金をわたし、なだめながら助十の家の縁の方へ連れてゆく。與助は猿をかゝへて泣いてゐる。)

勘太郎。

わたしはなぜこんな手暴いことをしたか。くれぐれも堪忍して下さい。あゝ、これで肴も臺無しになつてしまつた。まあ、酒だけでも納めて貰ひませう。

(勘太郎は落ちてゐる鯛を足にて蹴飛ばす。このあひだに権三と助十に眼で知らせ合ひ、形をあらためて勘太郎のまへに出る。)

権 三。

もし、勘さん。どうも何とも申譯がありません。この長屋にゐた彦兵衛のせがれが大坂からわざく下つて来て、おやぢの無實を訴へると云つて泣いて騒ぐ。大屋さんも氣の毒がつて色々世話を焼いてやる。それに釣り込まれてわつし等もついつかりと詰まらねえことを饒舌つたもんだから、今さら抜きさしもならねえやうな羽目になつてしまつて、たうとうお奉行所まで引張り出されるやうなことになるつてね。

勘太郎。

(冷かに。) いや、それは大抵知つてゐますよ。その節は色々御心配をかけました。

助 十。

まあ、さう云はねえで、一通りは聴いておくんなせえ。何もわつし等だつて確に見とけたと云ふわけぢやあ無し、ほんの夜目遠目でちらりと見たゞけのことだから、正直にその通り云ふ筈だつたのだが、御白洲へ出て曖昧な事を云つちやあならねえ、何でもはつきり物物をいへと大屋さんが云ふもんだから、物の間違ひが自然と大きくなつて、お前さんにも飛んだ御迷惑をかけてしまひました。今となつちやあ、わつし等もまつたく後悔してゐるんですから、どうかまあ料簡しておくんなせえ。

おかん。

ほかの事とは譯が違つて、まつたく料簡の爲にくいこととせうが、わたくし共が打揃つて幾重にもお詫をいたしますから、どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。

勘太郎。

(しづかに。) さうめいくに御挨拶にやあ及びません。腹を立つてゐるくらゐなら、こんな物を持つてわざくお禮に来やあしませんよ。(やゝ皮肉らしく。) つまりはわたしの身狀が悪いかからで……。左官屋の勘太郎は泥坊でもしさうな奴だ、人殺しでもしさうな奴だと、不斷からおまへさん達に睨まれてゐるので、自然こんなことにもなつたのですよ。

権 三。

いや、さう云はれると、いよく穴へでも這入りたくなるが、そこをまあ勘辨しておくんなせえ。

助 十。

これに懲りてこの後は、決して他人様の噂なんぞはしませんから、今度のところだけは何分勘辨して……。

勘太郎。

まあ、同じことを幾度も云はないでもない。なにしろ私はお禮に來たのだから、素直にこれを納めてください。わたしの持つて來た酒だからと云つて、まさかに毒が這入つてゐるわけでもないから。

助 八。

(むつとして)おい、勘太郎さん。飛んだ人違ひをしてお前さんに迷惑をかけたのは重々こつちが悪い。それだから權三も、兄貴も、この通り平あやまりに謝まつてゐるぢやあねえか。それにおめえは男らしくもねえ。堪忍するなら堪忍する、堪忍しねえなら堪忍しねえと、なぜ綺麗さつぱりと云つてくれねえのだ。柄にもねえ切口上で、意地の悪い御殿女中のやうに、うはべは美しく云ひまはしながら、腹には刺を持つてゐるのが面白くねえ。第一、お禮に來たとはなんの事だ。こつちはお前にあやまりこそすれ、おめえに禮を云はれる覺えはねえのだ。

勘太郎。

(あざ笑ふ)それはおまへさんの僻みといふものだ。お禮と云つたのが氣に入らなければ、わたしが無事に娑婆へ出て來た身祝ひだと思つてください。

助 八。

いけねえ、いけねえ。おれの持つて來た酒だからと云つて、まさかに毒が這入つてゐるわけでもねえなぞと、忌なことを云ふぢやあねえか。酒の毒よりもおめえの口に毒がある。それを黙つて聽いてゐられるものか。折角のおこゝろさしたが、兄きに代つておれが斷るから、こんなものは持つて歸つて貰ひてえ。

勘太郎。

それでは喧嘩だ。もう少し穩かに口をきいて貰ひたいな。

(權三の家の縁の下から一匹の犬が出來て來て、勘太郎をみて凄まじく吠えながら飛びかゝらうとする。勘太郎は再び兇暴の相をあらはして屹と睨む。犬はますます吠える。)

雲 哲。

又のら犬が出來て來やあがつたか。

願 哲。

貴様も殺されるな。叱つ、叱つ。

(ふたりに逐はれて犬は上のかたへ逃げ去る。)

おかん。

(云譯らしく)あの野良犬にやあ困るねえ、だれを見てもすぐ吠えるんだから。

權 三。

犬だつて可愛くねえ奴にやあ吠えるのだらう。よく考へてみると、成程こりやあ八の云ふ通りで、折角のおこゝろさしは有難てえが、どうもおまへさんからこんな物を貰ひたくねえ。お禮にしてもお祝ひにしても、これは持つて歸つて貰はう。おい、助。さつきから無

暗にあやまつて、損をしたやうだぜ。

助十。

おれもさう思つてゐるのだ。(勘太郎に)まつたくおめえの云ひ草は御殿女中で、忌にチク
チク當るやうだ。堪忍しねえなら堪忍しねえ、恨みを云ひに来たなら恨みを云ひに来たと
はつきり云つてくれ。面當てらしく酒や肴を持つて来て、眞綿に針で人をいぢめようとす
るのは、江戸つ子らしくねえ仕方だ。

勘太郎。

なるほどお前さん達は江戸つ子だ。(又あざ笑ふ)上方者の尻押しをして、江戸つ子にぬれ
衣をきせるなどは、本當の江戸つ子でなければ出来ない藝だよ。

助十。

やかましいやい。手前のやうな江戸つ子があるから、本當の江戸つ子の面が汚れるのだ。
こんなものは持つて歸れ。(角樽を投げ出す)

勘太郎。

おまへさん達はあやまつてゐるのか、喧嘩を賣るのか。

権三。

もう斯うなりやあ喧嘩だ、喧嘩だ。

おかん。

まあ、お前、お待ちよ。

権三。

えい、牢へ入れられようが、首が飛ばうが構はねえ。こんな野郎は半殺しにして遣らなけ
りやあ氣が濟まねえのだ。

おかん。

また喧嘩を始めちやあいけない。お止しよ。止しておくれよ。

(おかんは頻りに権三を支へる。)

勘太郎。

近いうちにお咎めがあると思つて、みんな自棄になつてゐるのか。そんな病犬の相手にな
つて、折角明るくなつた體をもう一度暗いところへ遣られては堪らない。は、は、は、

(勘太郎は笑ひながら下のかたへ行きかゝると、助十は無言で飛びかゝつて、勘太郎の横面をなぐ
る。)

る。)

勘太郎。

えい、なにをしあやがるのだ。氣ちがひめ。

(勘太郎は又もや人相を一變して、左右を睨む。)

勘太郎。

おとなしくしてゐりやあ増長しやあがつて、好加減にしる。豊島町の勘太郎を知らねえか。
この大哥さんと喧嘩をするなら、からだの骨から鍛へて來い。

助八。

こつちは生きてゐる人間だ。猿の喉を絞めるのとは譯が違ふぞ。
(助八は勘太郎にむしや振り付けば、勘太郎は突き退ける。助十は又むしやぶり付く。権三も留め
られるのを振切つて飛びかゝる。三人は遂に勘太郎をねぢ倒して袋叩きにする。)

権三。

おい、與助、こいつはおめえの猿のかたきだ。みんなと一緒になぐれ、なぐれ。

雲哲。なるほど猿のかたき討か。

願哲。これも長屋の附合だ。

(與助は竹の鞭を把り、雲哲等も一緒に勘太郎をなぐる。)

勘太郎。さあ、どいつも皆んな下手人だぞ。殺すなら殺せ。立派に殺してくれ。

権三。こいつを歸すと面倒だ。ふん縛つてしまへ。

助十。八。このあひだの繩を持つて來い。

(助八は奥へかけ込んで麻繩を持つて來る。)

おかん。縛つてもいゝのかえ。

助八。よくつても悪くつても構ふものか。毒食は皿までだ。

権三。さあ、早く縛れ、縛れ。

(助八は勘太郎を縛る。)

雲哲。どうも仕置が暴くなつて來た。縛つてしまふのは些とひどいな。

願哲。うか／＼してゐて、こつちまでが係り合ひになつてはならない。長屋の附合も先づこのくらゐにして置かうか。

雲哲。これから先、何事が起つても、おれたちは知らないぞ、知らないぞ。

(雲哲、願哲は下のかたへ逃げ去る。)

與助。かたき討が濟んだら、わたしもこゝらにゐない方がよさうだ。

(與助も猿をかへて、おなじく路地の外へ逃げてゆきかけしが、又引返して來る。)

與助。これ、お役人が來たやうだぞ。

権三。なに、お役人が來た。

助十。そいつはいけねえ。どうしよう。

助八。どうしよう。

(三人はうろたへながら四邊を見まはし、助十は駕籠に眼をつける。)

助十。これだ、これだ。

権三。ちけえねえ。早くしろ、早くしろ。

(三人は繩からげの勘太郎を引摺つて駕籠のなかへ押込み、外から垂簾をおろす。おかんは不安らしく表をのぞいてゐると、路地の口より石子伴作は捕方の者ふたりを連れ、雲哲と願哲を先に立て、出づ。)

伴作。左官の勘太郎は確にこの裏にまるつてゐるな。

雲哲。長屋の者と喧嘩をして居ります。

伴作。喧嘩をいたしてゐるか。

(伴作はつかくと進み来る。権三夫婦、助十兄弟は薄氣味悪さうにあとへ退る。)

伴作。豊島町の左官屋勘太郎はいづれへまゐつた。

四人。え。(顔をみあはせる。)

伴作。こゝにまるつてゐる筈ではないか。

権三。(曖昧に。)いえ、そんな者は……。

伴作。(雲哲等のみかへる。)たしかに來てゐると申したな。

雲哲。はい。その勘太郎は……。

助十。(あわて、眼で制す。)その勘太郎は……。もう歸りましてございます。

伴作。(うたがふやうに。)歸つたか。

願哲。でも、たつた今までこゝにゐた筈だが……。

権三。なに、歸つたよ、歸つたよ。この通り、どこにもゐねえちやあねえか。

勘太郎。(雲哲と願哲は不審さうにそこらを見まはしてゐると、駕籠のなかにて勘太郎が叫ぶ。)

もし、お役人さま。勘太郎はこれに居ります。

(権三、助十等はぎよつとする。)

伴作。(捕方をみかへる。)それ。

(捕方は駕籠の垂簾をあげて、勘太郎をひき出す。)

伴作。この者にはだれが繩をかけた。

(権三等はだまつてゐる。)

伴作。御用によつて勘太郎を召捕りにまるつたところ、先廻りをして誰が繩をかけた。

権三。では、勘太郎はお召捕りになるのでございますか。

伴作。昨日一旦ゆるして歸されたは、深い思召しのあることで、かれの罪状いよ／＼明白と相成つて、再びお召捕りに相成るのだ。

助十。いや、さうでございましたか。(安心して。)實はわたくしが縛りました。

権三。わたくしも縛りました。

助八。わたくしも手傳ひました。

伴作。

お、さうであつたか。委細はあらためて申し聞かせる。(捕方に)それ、引立てい。

勘太郎。

おかまひないと申渡されたわたくしが、どうして二度のお繩を頂戴いたすのでございませうか。

伴作。

兎やかう申すな。尋常に立て、立て。

勘太郎。

(強情に。)いえ、恐れながら申上げます。

捕方。

え、立て、立て。

(伴作は先に立ち、捕方は無理に勘太郎を引立て、下のかたに去る。一同は呆氣に取られたやうに

あとを見送る。)

権三。

なんだか狐に化かされたやうだな。

與助。

やつぱり勘太郎はお召捕りになるのか。それといふのも、おれの大事の猿を殺した報い

おかん。

いくら猿だつて無暗にひねり殺すやうな奴だもの、人間だつて殺し兼ねやあしないよ。

雲哲。

さうだらうなあ。むやみにあいつに繩をかけて、どうなることかと心配してるたが、これが過ちの功名と云ふのかな。

願哲。

かうなるとおまへ達はお吐りどころか、却つてお褒めにあづかるかも知れないぞ。

おかん。

お褒めにあづからないまでも、お吐りがなければ結構さ。お役人が来たと聞いた時には、

わたしは本當にぞつとしたよ。

(路地の口より家主六郎兵衛と彦三郎出づ。)

おかん。

あら、大屋さんが歸つて來なすつた。

六郎。

お、みんなはこゝにゐるか。まあ、まあ、めでたい、目出たい。わたしもこれで重荷を

おろした。

彦三郎。

みなさんのお蔭様で、わたくしの本望もやうやく達しまして、こんな嬉しいことはござり

ません。

権三。

本望が達したかえ。いや、それで判つた。今こゝへお役人が來て、勘太郎を召捕つて行き

ましたよ。

彦三郎。

では、勘太郎はもう召捕られましたか。

助十。

(自慢らしく。)おれ達がふん縛つてお役人に引渡して遣つたよ。

六郎。

いや、それは早手廻しであつたな。

権三と助十

助八。
六郎。

それにしても、どうでもお召捕りになる勘太郎をなぜ一旦ゆるして歸したんだね。そこが大岡様のえらい所だ。いくら権三と助十が證人に出てくれても、その晩に見た奴は左官の勘太郎に相違ございませんと云ふばかりで、ほかには確な證據がない。勘太郎は飽までもシラを切つて白状しない。さすがのお奉行様も吟味の仕様がなないので、先づおかまひないと云ふことで勘太郎めを一旦下けて置いて、實はちやんと隠し目附をつけてあつたのだ。ねえ、彦三郎さん。まつたく大岡様はえらいではないか。

彦三郎。

實に恐れ入りましたござります。今もお家主様がおつしやる通り、一旦は勘太郎を無事に下けて、そつと隠し目附をつけて置かれますと、身におほえのある勘太郎は、自分の家へ歸るとすぐに天井の板をはがして、そこに隠してあつた血だらけの金財布を取出して、臺所の竈の下で焼いてしまつたさうでござります。

六郎。

どうで焼くなら早く焼いてしまへばいいものを、そこがやつぱり運の盡きで、今まで天井裏に隠して置いて、それを竊と取出したところを、隠し目附にすつかり睨まれてしまつたので、もう動きが取れない。そこで、今日あらためてお召捕りといふことになつたのだから、彼奴いくら強情を張つても、今度こそは再び娑婆へは出られまいよ。そこで、権三と

助十だがな。

二人。

はい、はい。

六郎。

かうなつた以上は、勿論町内あづけも免されるな。

二人。

はい、はい。

六郎。

自分の低い者どもにも似合はず、俠氣を以て小間物屋彦三郎に助力いたし、まことの罪人を訴へ出でたる段、近ごろ奇特に存するといふので、いづれ改めてお呼び出しの上、お奉行様から直々のお褒めがある筈だぞ。

二人。

やあ、ありがてえ、ありがてえ。

助八。

ぢやあ、御褒美も出るだらうか。

六郎。

欲張つた奴だ。まだそこまでは判るものか。

與助。

やれ、やれ、これでわたしも安心したが、かうなると彦兵衛さんはいよく氣の毒だつたな。

おかん。

今更うたがひが晴れたところで、どうにも取返しが付かないからねえ。

六郎。

いや、そこが又、大岡様のえらい所だ。みんなびつくりするなよ。

権三 (六郎兵衛は彦三郎に指圖すれば、彦三郎はこゝろ得て、路地の外へ出てゆく。)

え。

助十 死ぬもの貧乏とはよく云つたものだな。

六郎 ところが、生かして歸してくれたよ。

一同 え。

六郎 大岡様は初めから見透して、どうも彦兵衛さんは本當の罪人らしくない。これは何かの間

違ひであらうといふので、表向は牢中病死と披露して、實は生かして置いて下すつたのだ。

おかん、彦兵衛さんは生きてゐるんですかえ。

六郎 むい、むい、生きてゐるよ。

権三 彦兵衛さんは生きてゐる……。どこまで行つても、狐に化かされてゐるやうだぜ。

助十 なに、化かされてゐることがあるものか。おれにはちやんと判つてゐらあ。なるほど大岡

様はえらいものだな。

助八 名奉行とあがめ奉つるのも嘘ぢやあねえ。

與助

彦兵衛さんが生き返つてくれりやあ、おれの猿なんぞは死んでもいい。

(下のかたより駕籠かき二人が附添ひ、彦三郎は父彦兵衛の手を取りて介抱しながら出づ。)

彦三郎 みなさん。御安心ください。父はこの通りでございます。

六郎 今はまつ晝間だ。幽霊ではないからよく見なさい。

彦兵衛 みなさん有難うございます。

一同 お、彦兵衛さんだ、彦兵衛さんだ。

(一同はよろこんで彦兵衛のまはりに駆けあつまる。)

幕

勘平の死

半七捕物帳——その一

大正十四年十二月作。

大正十五年二月。新橋演舞場初演。

初演當時の主なる役割——和泉屋與兵衛（市川團右衛門）和泉屋の女房おさき（尾上菊三郎）和泉屋の娘おてる（大谷福之丞）和泉屋の仲働きお冬（尾上榮三郎）和泉屋の番頭和吉（市川男女藏）大和屋十右衛門（坂東彦三郎）三河町の半七（尾上菊五郎）半七の妹おくめ（坂東竹三郎）常磐津文字清（市川鬼丸）半七の子分龜吉（尾上伊三郎）幸次郎（尾上鯉三郎）など。

第一幕

登場人物——和泉屋與兵衛。和泉屋の女房おさき。和泉屋の忰角太郎。和泉屋の娘おてる。和泉屋の仲働きお冬。和泉屋の番頭傳兵衛。同じく彌助。和吉。大和屋十右衛門。三河町の半七。半七の妹おくめ。常磐津文字清。半七の子分龜吉。幸次郎。ほかに女中。和泉屋の若い者。小僧。素人芝居の役者。手傳ひの役者。衣裳の損料屋。芝居見物の男女など。

京橋具足町の和泉屋といふ金物屋の奥座敷。初午祭の素人芝居の樂屋になつてゐる體で、そこには鏡臺が幾つも列んで、座蒲團などもある。衣裳葛籠がある。臺がある。大小や編笠や鐵砲などの小道具がある。燭臺や手あぶりの火鉢が幾つも置かれてある。藥罐や茶道具などもある。何分にも狭いところに大勢が押合つてゐるので、足の踏みどころも無いやうな亂雑の體たらくである。――

勘平の死

江戸の末期、二月初旬の夜。

(座敷のまん中には忠臣藏六段目の勘平に扮したる和泉屋の若い息子角太郎がうしろ向きに横つてゐる。角太郎は半死半生で唸つてゐるのを、店の若い者庄八と長次郎が介抱してゐる。若い番頭和吉、廿四五歳、千崎彌五郎のこしらへて少しくあとに引退つて眺めてゐる。同町内の呉服屋のせがれ伊之助は原郷右衛門のこしらへ、酒屋のせがれ三藏はおかやのこしらへて疊たけを取り、同じくその傍にぼんやりと坐つてゐる。そのほかに衣裳がづらの損料屋五助、顔師にたのまれて来た役者の三津平、店の若い者四五人と小僧二人、それらが立つたり坐つたりしてこたくしてゐる。)

庄八。 　　まだお醫者は來ないのか。

長次郎。 　誰かもう一度行つて呼んで來い。

庄八。 　　急に怪我人が出來ましたから、すぐにおいで下さいとよく云つて來るのだぞ。

小僧一。 　　あい、あい。(下のかたへ出てゆく。)

伊之助。 　小僧さんひとりが行つたのぢやあ判らないかも知れない。誰か若い衆さんを遣つたら何うだね。

長次郎。 　ぢやあ、いつそわたしが行つて來ませう。(立ちかゝる。)

三藏。 　　正直に若旦那が大怪我をしましたからと云つた方がいゝかも知れないぜ。

庄八。 　　さうだ、さうだ。怪我人は若旦那だと正直に云つた方がいゝよ。

長次郎。 　わかつた。わかつた。

(長次郎はあわてゝ出てゆく。)

三津平。 　なにしろ飛んでもないことになつたものだね。

五助。 　　どうしてこんなことになつたのか、夢のやうでさつぱり判らねえ。

三津平。 　わつしにも判らねえ、どうも不思議だよ。魔がさしたのかも知れねえぜ。

(下のかたの襖をあけて、和泉屋の主人與兵衛、四十七八歳、あわたしく出づ。)

與兵衛。 　もし、せがれがどうしました。

伊之助。 　　思ひもよらないことが出來して、みんなも呆氣に取られてゐるばかりです。

與兵衛。 　一體どうしたと云ふのだ。

(與兵衛は角太郎のそばに寄りて覗く。)

與兵衛。 　これ、角太郎。急病でも起つたのか、これ、角太郎……。どうしたのだ。

勘平の死

おさき。

(角太郎は答へず、たゞ唸つてゐる。下のかたより和泉屋の女房おさき、あわてゝ出づ。)
今夜の六段目は大變に出来がよかつたと云つて、みんなも感心して見てゐたら、中途から角太郎が急に倒れたのでびつくりしました。(與兵衛に。)どこが悪いのですえ。
たゞ苦しさに唸つてゐるばかりで判らないのだ。(庄八に。)おい、こりやあ何うしたのだね。

與兵衛。

庄八。

おさき。

へえ。(他の人々と顔をみあはせる。)
(のぞく。)おい、大變に血が流れてゐるやうだが……。

與兵衛。

これは勘平が切腹の糊紅だよ。

三津平。

それが旦那、糊紅でないのですよ。

與兵衛。

え。

五助。

若旦那はほんたうに腹を切つたのでございます。

與兵衛。

(與兵衛もおさきもおどろく。)

なに、ほんたうに腹を切つた……。そ、それはどういふ譯だ。え、誰かはつきりと口を利かないか。

和吉。

(今まで黙つてゐた和吉進み出づ。)

それはかう云ふわけでございます。みな様方も御覽の通り、六段目の幕があきまして、腹切りまでは滞りなく済みましたが、若旦那の勘平が刀を腹へ突つ込んで、手負の臺詞になつてから、何だか様子がをかしくなつたのでございます。

與兵衛。

むい。その手負になつてから、猶さら出来がいゝと皆んなも褒めてゐたのだ。

和吉。

その手負の臺詞まはしや思入れが稽古の時よりはよつほど念入りだとは思ひましたが、ふだんから芝居上手の若旦那のことでございますから、大勢の見物を前に控へて、一倍氣を入れて遣つてゐるのかと思つて居りますと、どうもそれがだん／＼にかしくなつて來るので、わたくし達も不思議に思ひました。

伊之助。

わたしもそばで見てるながら、どうも様子が變だとは思ひましたが、まさかこんなこととは夢にも氣が付きませんでした。

三藏。

そのうちに角さんは倒れたまゝで起きないので……。

和吉。

(ひつたくるやうに。)よく／＼見ますと、若旦那はほんたうに腹を切つてゐたのでございます。(聲をふるはせる。)わたくしも實にびつくり致しました。

勘平の死

おさき。

でも、その刀はほん物の刀ぢやあるまいが……。

與兵衛。

さうだ、さうだ。芝居で使ふ銀紙の竹べらで、ほんたうに腹を切る筈はないではないか。

和吉。

それがどうも不思議でございます。

與兵衛。

損料屋さん。(詰るやうに)おまへさんの持つて來た刀は本身かえ。

五助。

(あわてし)え、飛んでもねえ。なんで本身なんぞを持つて來るものですか。わたしが若

旦那に渡したのは確に舞臺で使ふ金貝張りに相違ないのですが、それがいつの間にか本
身に變つてゐたので、こんな騒ぎが出來してしまつたのです。

與兵衛。

いつの間にか本身に變つてゐた……。

おさき。

まあ、どうしたんでせう。

與兵衛。

それがどうも判らないな。

五助。

まつたく判りませんよ。

與兵衛。

判りませんで済むものか。なんにしてもお前さんが係り合だから、さう思つてください。

五助。

でも、旦那……。

與兵衛。

え、いけない、いけない。どうしてもおまへさんが係り合だ。

おさき。

(與兵衛に)まあ、おまへさん。そんなことを云つてゐるよりも、早く角太郎の手當をして遣つたらどうです。なんだか息づかひがだん／＼にかしくなるぢやありませんか。

與兵衛。

(氣がついて)む、うか／＼してはゐられない。これ、醫者を呼びに遣つたか。

庄八。

はい。さつきから二度も呼びにやりました。

おさき。

呼びに遣つたらすぐに來てくれさうなものだがねえ。手間が取れるやうなら外のお醫者を呼んでおいでよ。ぐづくしてゐると、間にはないぢやあないか。

與兵衛。

誰でもかまはないから、すぐに來てくれる醫者を呼んで來い。三人でも五人でも十人でも一度に呼んで來い。早くしろ。早くしろ。なにをほんやりしてゐるのだ。

店の者。

はい、はい。行つてまいります。

(若い者のひとりはお下のかたへ駈けてゆく。)

與兵衛。

あ、かうと知つたら今年の初午などはいつそ止めればよかつた。

おさき。

初午もお祭だけにして、芝居などをしなければよかつたのでしたねえ。

與兵衛。

それも角太郎が先立ちになつて騒ぎはじめたのだ。(角太郎を覗いて)あ、どうもだんだんに様子が悪くなるやうだ。庄八、今度はおまへが行つて醫者をさがして來い。

庄八。はい、はい。

(庄八は起つて行かうとする時、下のかたにて案内の聲がきこえる。)

長次郎。どうぞこれへお通りください。

おさき。おい、い、鹽梅にお醫者が來たらしい。

與兵衛。醫者が來たか、來たか。

(下のかたより以前の長次郎が先に立ち、岡つ引の半七を案内して出づ。)

庄八。おや、お醫者ではないやうだぞ。

與兵衛。長次郎。こゝへ御案内して來たのはどなたよ。

長次郎。三河町の親分でございます。

與兵衛。三河町の親分……。

半七。(丁寧^{ていねい}に會釋^{あいしやく}する。)へえ。御取込み^{おとりこみ}の最中^{さいちゆう}へ飛び込んでまゐりまして、とんだ御邪魔^{おじやま}をいた

者^{もの}でございます。わたくしは神田^{かんだ}の三河町^{かちやう}に居りまして、お上の十手^{かみじつて}をあづかつてゐる半七^{はんしち}と申す

者^{もの}でございます。

與兵衛。(おなじく丁寧^{ていねい}に。)おい。では、お前^{まへ}さんがかねてお名前^{ななまへ}を聞いてゐる三河町^{かちやう}の半七^{はんしち}親分^{おやぶん}でござ

半七。ざいましたか。わたくしはこの和泉屋^{いづみや}の主人^{しゆじん}與兵衛^{よへゑ}でございます。

實^{じつ}は唯今^{ただいま}この町内^{ちやうない}の角^{かど}でお店^{みせ}の長次郎^{ちやうじらう}さんに逢^あひましたが、なんだか息^{いき}を切^きつて駈^かけてく

る様子^{やうす}が變^{へん}ですから、どうかしたのかと聞いてみると、初午^{はつうま}のお芝居^{しばゐ}から飛^とんだ間違^{まちが}ひが

出來^{でき}ましたさうで……。わたくしもびつくり致^{いた}しました。して、怪我^{けが}人はどんな様子^{やうす}です。

(少し迷惑^{まいわく}さうに。)長次郎^{ちやうじらう}めがおしやべりを致^{いた}して、なにも彼^かも御承知^{ごしやうち}とあれば、今更^{いまさら}かく

し立ては致^{いた}しません。思^{おも}ひもよらない間違^{まちが}ひから、せがれはこの通り^{とほ}でございます。

半七。まつびら御免^{ごめん}くださいまし。

(半七は角太郎^{かくたろう}のそばに進^{すす}みよりて、聲^{こゑ}をかける。)

半七。もし、若旦那^{わかだんな}。氣^きは確^{たしか}ですかえ。

與兵衛。さつきから何^{なに}を申^{まを}しても返事^{へんじ}はございませぬ。

半七。さうですか。困^{こま}つたものだな。(角太郎^{かくたろう}の疵^{きず}をあらためる。)さうして、その刀^{かたな}といふのはどれ

ですな。

庄八。これでございます。(血^ちに染^そみ刀^{かたな}をみせる。)

(半七は無言^{ぼんごん}で刀^{かたな}をうけ取り、燭臺^{しよくたい}の灯^ひに照^{てら}して見て、やがて一座^{いざ}の人々^{ひとびと}の顔^{かほ}をずらりと見^みわた

勘平^{かんぺい}の死

す。人々は何となく薄氣味悪いやうに眼を伏せる。

今夜の小道具の損料屋さんははるますかえ。

半七。(ぎよつとして。)はい、はい。わたくしでございます。

半七。この本身はおめえが持つて来たのかえ。

五助。それを旦那からも御詮議でございましたが、わたくしは決してそんなものを持つて来た覚え

五助。えはございません。ねえ、三津平さん。

三津平。わたしも皆さんの顔をこしらへに来て、舞臺の上のことも何や彼やお世話をしてゐるの

三津平。で、衣裳や持物はみな一通り調べましたが、五助さんの持つて来た大小は金貝張りで、決

三津平。して本身ではなかつたのでございます。

半七。それがいつの間にか本身に變つてゐたのか。(再び一座を見まはして考へてゐる。)

三津平。今も云つてゐるところですが、どうも魔がさしたとしか思はれませんよ。

半七。まつたく魔がさしたのかも知れねえな。(刀をながめて再び考へてゐる。)

おてる。(下のかたより角太郎の妹おてる、十六七歳。仲ばたらきお冬、十七八歳。あわてゝ出づ。)

おてる。もし、兄さんがどうかしたのかねえ。

お冬。若旦那様がお怪我をなすつたさうですが……。 (倒れてゐる角太郎を見て駈けよる。) もし、若

お冬。旦那。どうなすつたんですよ。(泣聲になつて呼ぶ。) もし、若旦那……若旦那……。

與兵衛。これ、これ、親分さんもいらつしやる。まあ、静にしろ、静にしろ。

お冬。でも、若旦那がこんなになつて……。

おさき。まあ、まあ、あとで判ることだよ。

おさき。(おさきは眼で制する。お冬は泣いてゐる。)

半七。時にお醫者はまだ來ませんかね。

長次郎。すぐに来るといふことでしたが、なにをしてゐるのかな。

おさき。おまへの云ひやうが悪いのぢやあないか。

長次郎。いゝえ、若旦那が大怪我をしたから、すぐに来てくれろとよく云つたのでございます。

與兵衛。(じれる。) なにしろ遅いな。庄八、こゝには構はずに早く行つて來い。

庄八。はい、はい。

(庄八が起たうとする時、下の方よりばたくと覺音して、大勢の見物客が男女入りまじつて、

どや〜と入り来る。)

男 甲。若旦那が怪我をしたといふぢやありませんか。

大 勢。(口々に) どうしました、どうしました。

半 七。あ、いけねえ、いけねえ。むやみに這入り込んで荒しちやあいけねえ。

男 乙。(半七は片手に刀を持ち、片手で大勢を制する。おてるとお冬は角太郎を取りまいて泣いてゐる。)

女 甲。でも、若旦那が倒れてゐるやうだ。

半 七。ほんたうにどうなすつたのだらうねえ。

(大勢はがやく／＼云ひながら覗かうとする。)

半 七。えい、うるせえな。斬るよ、斬るよ。

(半七は持つてゐる刀をふりまはせば、人々はおどろいてあとへ退りながら、まだがやく／＼云つてゐる。)

幕

第二幕

神田三河町、半七の家。こゝは茶の間で、小綺麗に片附けられ、拭き込んだ長火鉢や、燈明のかがやく神棚などがある。庭には小さい池がある。壁には子分等の名前をかきたる紙を貼り付け、それによつてにめい／＼の十手がかけてある。次の間の正面は障子、その外に入口の格子がある。

(第一幕より六日目の朝。子分の龜吉が表を掃いてゐる。向うより半七の妹おくめが先に立つて出づ。おくめは神田の明神下に住む常磐津の師匠で、文字房といふ若い女。おくめのあとより三十七八歳の女が附いて来る。これはおなじ師匠で、下谷に住む文字清といふ女。色は蒼ざめ、眼は血走つて、よほど取亂した體である。)

おくめ。龜さん、お早う。

龜 吉。やあ、明神下のお師匠さん。早いね。

おくめ。かせぎ人は違ふのさ。(笑ふ。)

勘平の死

龜吉。まつたくだ。まあ、お這入んなせえ。(云ひながら文字清をじろく見る。)

おくめ。兄さんは家にゐるの。
おかみさんは朝まゐりに出かけたが、親分はゐますよ。なに、もう疾うに飯を食つて、顔を洗つて起きてゐるのさ。

おくめ。おまへさんの云ふことは逆さまだねえ。まあ、なにしろ御免なさいよ。
龜吉。さあ、さあ、通んなせえ。(格子の内に入りて呼ぶ。)おい、おい、親分。明神下のお師匠さんが來ましたぜ。

おくめ。(文字清をみかへる。)さあ、遠慮なしにお這入んなさいよ。
文字清。はい。

(臺所より女中おみのが出て、手あぶりの火鉢に火を入れたりする。おくめと文字清は内に入りて坐る。奥より廻り縁づたひに半七出づ。)

半七。やあ、大層早いな。(長火鉢の前に坐る。)おい、おみの。なんだかお連さんがあるやうたぜ。茶を入れる支度でもしろ。

おみの。はい、はい。

(おみのは手あぶりを二人のまへに置いて、奥に入る。)

姉さんはいつも御信心ね。

半七。ぢやあ、もう龜から聞いたか。けふは十五日で深川へ朝まゐりよ。時にそつちのお客様にはまだ御挨拶をしねえが、どなただね。

文字清。(すゝみ出づ。)申しおくれまして相濟みません。わたくしは下谷に居ります文字清と申しますもので、こちらの文字房さんには毎度お世話になつて居ります。

半七。いえ、どう致しまして……。おくめこそ年が行きませんから、さぞ色々御厄介になりませう。この後も何分よろしくおねがひ申します。

おくめ。そこで早速ですがね。この文字清さんがお前さんに折入つて頼みたいことがあると云ふんですかね。

半七。むい。さうか。(文字清に。)もし、おまへさん。どんな御用だか知りませんが、わたしに出來さうなことだか何うだか、まあ伺つて見ようぢやありませんか。

文字清。ありがたうございます。だしぬけにお邪魔に出まして、まことに恐れ入りますが、わたくしも何うしていゝか思案に餘つて居りますもんですから、かねて御懇意にいたして居ります。

す文字房さんにお願ひ申して、こちらへ押掛けに伺ひましたやうな譯で……。お聞き及び
かも知れませんが、この十日の初午の晩に具足町の和泉屋で素人芝居がございました。そ
のときに和泉屋の若旦那が六段目の勘平で切腹すると、刀がいつの間にか本身に變つて
たので、ほんたうに腹を切つてしまひました。

それはわたしもその場に立會つて知つてゐます。和泉屋でも大騒ぎをして、醫者を呼んで
疵口を縫はせて、色々に手當をしたが、二日二晩苦しみ通して、たうとう息を引き取つた
さうで、どうも可哀さうなことをしましたよ。

おくめ。

そのことに就て、文字清さんが大變に口惜しがつてゐるんですよ。

文字清。

(泣き出す) 親分さん。どうぞ仇を取つてください。

半七。

仇……。だれの仇を取るんだね。

文字清。

わたくしの悴のかたきを……。

半七。

え。(相手の顔をちつと見る) 少しわからねえな。

文字清。

(物狂はしく) わたくしはもう口惜しくつて……。口惜しくつて……。泣く。

おくめ。

まあ、さう泣かないで、よくその譯をお話しなさいよ。

半七。

唯むやみに泣いてるちやあ仕様がねえ。おまへさんの息子が一體どうしたと云ふのだ。ま
あ、落ちついてはつきりと云つて聞かせねえ。

文字清。

はい。(やはり身をふるはせて泣いてゐる)

半七。

おい、おくめ。おまへがこの師匠を連れて來たんだから、一通りのことは知つてゐるだら
う。師匠の息子がどんなことになつたのだ。

おくめ。

實はね、今云つた和泉屋の若旦那はこのお師匠さんの息子さんですとさ。
なに、和泉屋の若旦那はこの師匠の息子だと……。そりやおれも初耳だ。ぢやあ、あの

半七。

若旦那は今のおかみさんの子ぢやあねえのか。

おくめ。

さうですとさ。

半七。

ふむう。さうかえ。(かんがへてゐる)

龜吉。

(龜吉は盆に茶碗を乗せて出で、おくめと文字清の前に置く)

半七。

番茶でございますよ。
話が少し入組んで來たやうだ。おめえは奥へ行つてゐろ。

龜吉。

あい、あい。(奥に入る)

勘平の死

半七。 おい、師匠。文字清さん。和泉屋の息子の角太郎といふのは、ほんたうにお前さんの子供かえ。

文字清。

(顔をあげる。) はい。角太郎はわたくしの實の粹でございます。かう申したばかりではお判りになりますまいが、今から丁度二十年前のことでございます。わたくしが仲橋の近所で矢張り常磐津の師匠をいたして居りますと、和泉屋の大旦那がまだ若い時分時々遊びに来まして、自然まあその世話になつて居りますうちに、わたくしはその翌年に男の子を生みました。それが今度なくなりました角太郎で……。

半七。

ぢやあ、その男の子を和泉屋の方で引取つたんだね。

文字清。

さうでございます。和泉屋のおかみさんがその事を聞きまして、丁度こつちに子供がないから引取つて自分の子にしたいと……。わたくしは手放すのは忌でしたけれど……。(又泣く。) 向うへ引取られ、ば立派な店の跡取りにもなれる、つまりは本人の出世にもなることだと思ひまして、生れると間もなく和泉屋の方へ渡してしまひました。

半七。

さうして、おまへさんは其後も和泉屋へ出這入りをしてゐなすつたのかえ。

文字清。

かういふ親があるのと知れては、世間の手前もあり、當人の爲にもならないと云ふので、わ

たくしは相當の手當を貰ひまして、せがれとは一生縁切りといふ約束をいたしました。それから唯今の下谷へ引越しまして、相變らずこの商賣をいたして居りますが、やつぱり親子の人情で、一日でも生みの子のことを忘れたことはございません。せがれがだんくりに大きくなつて、立派な若旦那になつたといふ噂を聞いて、わたくしも蔭ながら喜んで居りますと、とんでもない今度の騒ぎで、わたくしはもう氣でも違ひさうになりました。(身をふるばせて又泣く。)

半七。

なるほど、そんないきさつがあるのかえ。わたしは些とも知らなかつた。それにしても若旦那の死んだのは不時の災難で、だれを怨むといふわけにも行くめえと思ふが……。それともそこには何か理窟がありますかえ。

文字清。

(屹となつて。) はい。判つて居ります。あの角太郎はおかみさんが殺したに相違ございません。

おくめ。

それをわたしも今朝はじめて聞いたんですけれど、まさか到大家のおかみさんがそんな事を……。ねえ、兄さん。

半七。

まあ、横合から口を出すな。これは大切な御用の話だ。これからは師匠と膝組みで話をし

なければならねえ。おまへも些とのあひだ奥へ行つてゐろ。
はい。(文字清に。)ちやあ、おまへさんも御ゆつくりとお話しなさい。

(おくめは奥に入る。)

半七。

おい、師匠。もつとこつちへ来てくんねえ。和泉屋のおかみさんが若旦那を殺したといふには何か確な證據でもあるのかえ。若旦那を殺すほどならば、初めから自分の方へ引取りもしめえと思ふが……。

文字清。

角太郎が和泉屋へ貫はれてから四年目に今のおかみさんの腹に女の子が出来ました。おてると云つて今年十六になります。ねえ、親分。おかみさんの料簡になつたら、角太郎が可愛いでせうか、自分の生みの娘が可愛いでせうか。角太郎に家督をゆづりたいでせうか、おてるに相續させたいでせうか。(だん／＼に興奮して。)ふだんはいくら好い顔をしてるても、人間の心は鬼です。邪魔になる角太郎をどうして亡き者にしようかぐるの事は考へ附かうちやありませんか。まして角太郎は旦那の隠し子ですもの、腹の底には女のやまもちも屹とまじつてゐませう。そんなことを色々かんがへると、おかみさんが自分でしたか人に遣らせたか知りませんが、樂屋のごた／＼してゐる隙をみて本物の刀とすり換へ

て置いたに相違ないと、わたくしが疑ぐるのが無理でせうか。

半七。むい。

文字清。

(いよ／＼興奮して。)それはわたくしの邪推でせうか。親分、おまへさんは何とお思ひです(詰める。)

半七。

(しづかに。)それだけの話を聞いたところちやあ、お前さんがさう思ひ詰めるのも無理ぢやあねえが……。

文字清。

無理どころか、まつたくそれに相違ないんです。わたくしは口惜しくつて、口惜しくつて……。いつそ出刃庖丁でも持つて和泉屋の店へあはれ込んで、あん畜生をすたく／＼に斬り殺して遣らうかとも思つてゐるんですが……。

半七。

(なだめるやうに。)まあ、まあ、そんな短氣は出さねえ方がい。お前さんはさう一途に決めてゐても、世の中の事といふものは白紙へ一文字を引いたやうに、無造作にわかるものぢやあねえ。兎もかくも悪いやうにはしねえから、この一件はわたしに任せて置きなせえ。

文字清。

半七。

その本當か嘘かを調べてゐるのだ。まあ、まあ、せいちやあいけねえ。

勘平の死

文字清。きつと調べて下さいますか。

半七。おまへさんに頼まれないでもわたしの役目だ。屹と調べてあげますよ。

文字清。いくら自分の子になつてゐるからと云つても、角太郎を殺したおかみさんはよもや無事ぢやあ濟みませんまいね。お上で屹とかたきを取つて下さるでせうね。

半七。そりやあ知れたことさ。

文字清。それでもあのくらゐの大きい家になると、内證で色々に手をまはして、好い加減に揉み消してしまふと云ふぢやありませんか。

半七。(笑ふ)それも事による。いくら金を使つても、手をまはしても、人殺しが滅多に帳消しにやあならねえから、まあ、安心してゐなさるがい。

文字清。大丈夫でせうか。

半七。大丈夫だよ。

文字清。受合ひますか。

半七。受合ふよ。

文字清。そんならいつそすぐに行つてください。

半七。え、どこへ行くのだ。

文字清。これからすぐに和泉屋へ行つて、あのおかみさんを召捕つてください。

半七。(又笑ふ)はい、そんな駄々をこねちやあいけねえ。人間ひとりにお繩をかけると云ふのは重いことだ。

文字清。人間ひとりを殺したのは軽いことですか。さあ、すぐに行つてください。(起ちあがる)

半七。どうも困るな。(奥に向ひて)おい、おい、おくめ。ちよいと来てくれ。

おくめ。はい、はい。(奥より出づ)もう御用は濟んだのですか。

半七。この師匠が無理を云つて、おれを困らせていけねえ。なんとか宥めて連れて行つてくれ。わたしが無理をいふのぢやあない。親分さんがわたしの云ふことを本當にしてくれないんですよ。わたしは口惜しくつて、口惜しくつて……。 (取亂して泣き伏す)

おくめ。兄さん、どうしたもんでせうねえ。

半七。どうすると云つて、だまして連れて行くよりほかはねえ。師匠はよつほど取りのほせてゐるのだ。(文字清に)おい、師匠。幾度云つても同じことだ。わたしが屹と受合つて、おまへの息子のかたきを取つてやるから、その積りでおとなしく歸るがいせ。